

戦姫絶唱シンフォギアガイアメモリ

機械天使

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

事故でこの世を去った男声左 荘吉は神さまの力によつてT2メモリとロストドライバーを持ちシンフォギア世界へと転生をする。そしてある一人の少女を助けてからは共に行動をすることになる。これはシンフォギア世界に転生をした男が三人のライダーに変身をして戦う物語。

# 目 次

## 第1章 転生者たちのそれぞれ

転生をした男性

初めての変身

コードは555

十六夜 零斗

クリスの特訓T2メモリとの相性

コードは000 ネフイリム対000

現れたプログラライズ戦士

スカル&アームズ対イクサ

コウモリと鬼

蓮子が助けた男の子

ツヴァイウイングコンサート

ダークドライブ現る。

## 第2章 動きだした物語

運命

連れていかれる二人

鬼と覚醒の竜姫

現れたネフシュタンの鎧を着た人物と謎のライダーたち

ここからは俺のステージだ!!

完全聖遺物の護衛

再会

フィーネ

ノイズ大量発生!!

フィーネとの決戦!!戦え戦士たち!!

仮面ライダー対怪盗

了の二人に対して判決

### 第3章 シンフォギアG? 編

ツヴァイウイングと二人の歌姫

仮面ライダー対仮面ライダー

現れし謎の仮面ライダー

襲い掛かるファムとリュウガ

未来の決断 戒斗の答え

さあランチタイムだ!!

莊吉に襲い掛かるジ・エンド

ファムとリュウガの正体

響のトラウマ

二人の企み

ファムオルタとの決着

### 第4章 新たな事件? 突然として現れた仮面ライダー

莊吉の調査

莊吉の考える謎

新しいチーム

黒い神父服を着た人物

# 第1章 転生者たちのそれぞれ

## 転生をした男性

「目を覚ましたみたいだな？」

「…………あんたは？」

彼は目を覚まして目の前にいた男性に問いかける。彼自身はふふと笑いながらもそうだねーといい指を鳴らした。

「俺の名前は神エボルトと呼ばれているよ左 荘吉君」

「どうして俺の名前を…………」

「なーに探偵をしていた君ならなんで死んでしまったのか思いだしてごらん。」

「俺は確か…………思いだした犯人を追い込んだが…………奴は人を人質に取ろうとしてそれで…………うぐ!!」

彼は頭を抑えている姿を見てどうやら思いだしたみたいだなとエボルトは見ている。彼の書類を見ながらさてどうするかと目をつぶつていると顔を上げたのを見て目を開ける。

「…………それで俺はどうなるんだ?」

「君は転生という言葉を知っているか?」

「ああ知っているが…………もしかして俺は転生をするつてことか?」

「そういうことだ。お前さんにはある世界に転生をしてもらうことになる。」

「転生か…………それでどこの世界だ?」

「…………シンフォギア世界だ。」

「戦姫絶唱シンフォギアなのか?」

「そうだ。まあ流石に何もないってのは可愛うだからな…………転生特典をつけさせてもらうよ。えつと、これこれ」

彼は紙とボールペンを書いて渡して何がほしいのかここに書いてねといい莊吉は書くことにした。

(ふーむ…………何を書こうかな?こういうのは大丈夫だろうか?)

莊吉は勝いている姿を見て神エボルトは一体何を書くのだろうかと考えている。チート的な考えだつたら却下をするのが事実だからねと思いながら何を書くのか楽しみにしているとできたといいもうう。

「ああ仮面ライダースカルとかになりたかつたんだよな。」

「ああ仮面ライダースカルとかになりたかつたんだよな。」

「ふむ……まあそれなら叶えることができるな。（てつきりナ  
デポとか付けて来そ�だと思つたが……やはり彼にならお願  
いができるそ�だな……）莊吉君……君にはお願ひが  
ある。」

「お願いですか？」

彼はすつと何かを出して彼は受け取る。

「これは・・・・・」

「今から行くシンフォギア世界にいる転生者の数だ。だが何人かは自分の欲望で動こうとしている。それで俺が介入をして彼らは原作始まる前に転生をさせているがその中にはいい奴もいるからな……。そいつらのリストはこちらだ」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

「天才だな君は、本業の」

「俺はそんなのじゃないさ…………それで俺の特典は?」

「ああ認めるがほに受け取るかいい」

莊吉は聞くとそこにはT2メモリがあるかあれ?と疑問になつて

「あのエボルトさん。」

「なんだい？」

「どうしてマグマやティーレックスのメモリがT2メモリ化している

ですか？」

「ああもしかしたら必要かもしないと思つてな、ついでにロストドライバーも入つていいだろ?」

「本當だ」

「転生者はいい奴を含めて10人ぐらいいる。だがその中にはいい奴

がいるつてことだけは忘れないでくれ…………いいな?」

「はいありがとうございます!」

「それとこれは俺からのプレゼントだ」

彼は指を鳴らすと彼の服装が鳴海 荘吉が來ていた探偵服のよう  
な格好となつた。

「どうだ?」

「ありがとうございます……俺らしくですか……」

「そういうことだついでにメモリガジエットたちもつけさせてもらつ  
ている。それがあれば君の探偵活動などが高まるだろ?それとリボ  
ルギヤリーやハードボイルダーを付けさせてもらつていてる。」

「何度もすみません」

「気にするなほらそこの扉を通れば世界へ行くことができる。では頼  
んだよ左 荘吉君」

彼はそういつて歩いていき扉の中へと入つていきシンフォギア世  
界へと旅たつた。

「さて……この失態はどう責任をとつてもらえますかね?」

エボルトは振り返り犯人である天界の神を部下たちが抑えていた。  
彼は近づいてその神の胸ぐらをつかんだ。

「貴様がしたことはかつてユーナがしたことと同じだ。お前を神とし  
てと権限を剥奪させる。」

「貴様あああああああああああああああ!!」

そいつはエボルトの部下をはじき飛ばして彼に襲い掛かるが彼は  
インフィニティードライバーを装着をしてインフィニティフューチ  
チャーグランドに変身をして彼が放つた攻撃をガードをした。

「な……に……」

「終わりだ。」

彼はレバーをまわしていく。

[[[READY GO!! インフィニティフューチャーグランドファイニッ  
シユ!!]]]

「は!!」

蹴りを受けてそいつを吹き飛ばして彼は取り押さえろといい部下

たちに抑えられて連行されて行く。彼は扉の方へと振り返り首を縦に振る。

「後は頼んだぞ……若き戦士たちよ……俺も自分の世界などがありほかの世界へ行くことができない……だから君達に祝福を祈っている……そして世界を守ってくれ……」エボルトはそういう三人の名簿を見ていた。そこに書かれていたのは。

【左 莊吉】

【十六夜 零斗】

【乾 蓮子】と書かれている書類である。

# 初めての変身

莊吉 s.i.d.e

「…………ここがシンフォギア世界か…………さて」

俺は目を開けて辺りを見る。どうやら神エボルトさんが用意をした扉が閉じていき消えていく。とりあえず俺はもらつたトランクを開けるとしよう。中を開けると改めてT2

メモリがたくさんある。

「エターナル、スカル、ジョーカー…………仮面ライダーになるのはこの三つだな…………サイクロンもいいが…………いずれにしてもどうするかな？」

俺は考えているとギジメモリを出してスタッグフォンに刺す。

【スタッグ】

スタッグフォンが変形をして俺はこのあたりを偵察をするように指示を出してから歩きだしていく。しかしここは日本じゃない感じだな…………エボルトさんはいつたいどこに俺を転送をしたのか…………いずれにしても日本じゃないってことだけはわかるな…………おや？何かが見えるな…………

俺は白いハットをかぶり歩いていくと兵隊たちが見えるな…………どうやら捕虜をどこかに運ぼうとしているな…………なら奴らでためさせてもらおうか…………俺はロストドライバーを装着をしてそのまま奴らを見ているとスタッグフォンが戻ってきたのでキヤツチをする。

「さて…………」

バットショットを出して捕虜の顔を見るとしようか…………あれは…………

【雪音 ク里斯…………】

そこにいたのはのちにイチイバルを纏う人物である雪音 ク里斯がいた。なるほどな…………つてことはこの時期は彼女が捕虜生活を送るつてことか…………ならその前に助けるとしよう。「さーて探偵の仕事は大変だな…………」

俺はそう言いながらも彼女を助けるために移動をする。

莊吉 Side 終了

一方でつかまつた捕虜にされた人物たちの中にクリスはいた。彼女は父親と母親を失い、彼うちつかまつていた。

「ぐふふふふふやつたぞ!!ついにクリスを手に入れた・・・・・・まあいいささーてこのこを僕の物にするためにまだ幼女だけどぐふふふ

「ひい！」

クリス

クリスは青ざめた。この人物は自分を襲おうとしているのを彼女は逃げようとしたが男はクリスに近づいてきて具ふふふと笑つていた。

「なんだ！」

•  
•  
•  
•

そこに立っていたのは左 荘吉である。彼はクリスの姿と奴の姿を見てなるほどなと思い拳を握りしめていた。

な  
なんたてめえ！

何ぞ通りすかりの探偵さ

「おれの仕事は、おれの仕事だ。おれの仕事は、おれの仕事だ！」

たつたらてめえをここで殺せはいいたけだ!!

相手は立せられたりテツヰを構める

「變身！」

デツキをベルトに装着をして彼の姿が変わる。

「仮面ライダーインペラーか……まあいい俺がやることは変わらない……」

彼は腰の口ストドライバーを見せてからメモリを構える。

## 「變身」

そのままスカルメモリをロストドライバーに装着をして倒す。

【スカル!!】

彼の体を纏つていき骸骨のような戦士へと変わる。仮面ライダー  
スカルの誕生である。

「な、なんだてめえは!!」

「…………さあお前の罪を数えろ」

「ちい!!ふざけるな!!」

デツキからカードを抜いて右ひざのセットをする。

【スピンドルベント】

右手にガゼルスタッフが現れて彼は装着をしてスカルに対して攻撃をしてきた。

「おら!!」

ガゼルスタッフを振り回すがスカルはそれを軽々にかわして拳を叩つけていく。インペラ一は冷静を失つておりがむしやらに武器を振り回しているだけである。

「このこの!!」

「冷静を失つている状態での攻撃が当たるとでも思うのか?」

彼は右手にスカルマグナムを出してトリガーを引き弾がインペラ一のボディに当たりそのままトリガーを引き続いていき吹き飛ばした。

「が!!」

彼はそのまま歩いていきクリスが無事だつたのを確認をしてから膝をつく。

「ここで待つていろいろな?」

「うん・・・・・・・・」

彼はインペラ一の方へ行き彼はカードを出していた。

【アドベント】

「いけお前ら奴を殺せ!!」

「……………」

ギガゼール達が現れてスカルの周りを囲んでいたが彼は冷静にほのかのメモリを出していた。

「そいいえば改良をしたといつていたな・・・・・エボルトさん:使

わせてもらおう・・・・・

彼はそういうつてT2メモリを出して右腰のマキシマムスロットにセットをする。

「バイオレンスマキシマムドライブ！」

スカルの左手にエネルギーの鉄球が発動されて振り回していきギガゼールたちが襲い掛かるが彼が振り回したエネルギーの鉄球が命中をして次々に爆発させていく。

「ば、馬鹿な!!あの数を簡単に倒しただと!?」

インペラ一は驚いているがスカルはスカルマグナムを構えてスカルメモリを抜いてスカルマグナムにセットをする。

「スカル マキシマムドライブ!!」

彼はスカルマグナムを構えてトリガーを引きインペラ一のボディに命中をして吹き飛ばした。

「ぐああああああああああああああああ!!」

彼は変身が解除されてスカルは近づいていき彼をつかむと相手はひいと怯えていた。彼は何かの札を張り彼は光になっていく。

「な、なんだこれは!!」

「それはあんたを天界に送りこむ札だ・・・・・それで天界へと行くがいい」

「嫌だあああああああああああああああああああああああああああ!!」

相手は天界へと転送されて行き莊吉はスカルメモリを外して変身を解除をする。そのまま白いハットをかぶりクリスのところへ近づいた。

「大丈夫か?」

「うう・・・・・・うわあああああああああああああ!!」

「よしよし・・・・・・怖かったな大丈夫だ・・・・・・」

莊吉は泣いているクリスを抱きしめてから頭を撫でている。数分

後彼女は落ち着いたのか莊吉がくられたお菓子で落ち着いていた。

彼は立ちあがろうとしたが裾を彼女がつかんでいたのを見て莊吉はため息をついた。

「もしかして俺についてきたいのか？」

こくと首を縦に振ったので彼ははあとため息をついて仕方がないなどいいスタッガフォンを出して何かをするトリボルギャリーが到着をした。

「で、でかい・・・・・」

「俺達の移動基地みたいなものだ、まずはお風呂にでも入れ」

「はい!!」

荘吉はそういういつてクリスをリボルギャリーの中へと入れてからお風呂に入るよう指示を出している。エボルトがもしも家などが見つからなかつたことを考えてリボルギャリーを移動基地のようにしていたので空間の中が広いのだ。

荘吉はやれやれといながら帽子を脱いで白いスーツを脱いでラフな格好になる。さてこれからどうするかな?と

コードブック

荘吉がクリスを助けていた頃アメリカにあるF・I・Sの研究所で一人の女性が欠伸をしていた。

ふあああ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
眠い  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

彼女の名前は乾蓮子、彼女はエボルトによつて転生をしてもらつた人物であり仮面ライダーアイズ関連のギアを持つており全部でギアを5つ持つてゐる。

彼女は状況によつて通常はファイズを使用をしている。ちなみにオルフェエノク因子がなくても変身ができるよう工ボルトによつて改良を加えられている。まあ実際に彼女の妹がファイズに変身をしているのでそれをベースにしていたのだ。

「あうエノナゾウ  
ノ色の?」

「どうしたのじゃないですよ。また蓮子姉さんがいないので皆で探し

ていたんですよ！」

彼女は起き上がりよいしょといいながら欠伸をして動くと二人の人物が彼女に抱き付いてきた。

二蓮子おねーちゃんあそぼ!!」

「浮うじがう蓮子肺さま？」

ピンクの髪の人物がふふと笑いながら蓮子の後ろに立っていた。

彼女はここに拾われてから数年が経つたなと思いつつ彼女達と出会いを思いだしていた。

今から数年前。

「ああああああああああああああ!!」

「ぐああああああああああああああ!!」

ファイズに変身をして必殺のグリムゾンスマッシュが決まり相手

の転生者を天界に送つて変身を解除をする。

「やれやれ…………どれだけ転生者はいるのかしら？」

だが彼女は疲労がたまつておりファイズギアを次元に隠した後は倒れてしまい目を覚ましたらベットの上で寝ていた。

それが彼女とセレナ達の初の出会いでもある。それからは彼女はここを拠点にして活動をしていた。年齢的にもまだマリアが13歳ごろと計算をして自分は彼女よりも年上になるんだなと思いながら蓮子は15歳である。

転生をした際に神エボルトがしてくれたんだろうなど彼女は思いつつはあとため息をついていた。

「ごめんちょっとだけ出てくるわ」

「お姉ちゃん?」

「大丈夫大丈夫」

彼女はそういって外へと行きはあとため息をついていた。

「いい加減出て来なさいよ。狙っているのはわかっているのよ!!」

「ほーう貴様も転生者ってことか・・・・しかも女か・・・・」

「女だからって馬鹿にしているのかしら?」

「ふん、まあいい貴様を倒してマリアたちを俺の物にしてくれる!!」

「・・・・・・・・・・・・・・

彼はザビーゼクターを装着をする。  
「変身」

「ヘンシン」

「マクスドフォームか・・・・・なら私はこっちで相手をするわ」

彼女は次元からトランクボックスを出して開いてベルトに装着をしてガラケーのファイズフォンを開いてコードを押す。

「スタンディバイ」

「変身!!」

「コンプリート」

コードが発動をして彼女の姿が変わる。仮面ライダーファイズへ

と

「ふんファイズか・・・・・いくぞ!!」

ザビーは剛腕をふるいファイズに攻撃をしてきた。だが彼女は拳をはじかせてから手をつかんで足払いをして彼をこけさせる。

——どあ!!

—あらどうしたのかしら?

一でめえ!

彼女はふふと笑いながらサビリーはマクスドフォーリムのまま振るうが彼女は的確に攻撃をかわしていき左腰につけているファイズショットにミツショーンメモリーをセットをする。

二三

「ブライアンミット」をショットモードで開いてエンターキーを押す。

サヒリは左手のアトレートを放つが彼女は回避をしてそのおなかにグランインパクトを命中させて吹き飛ばした。

おおのれ！」シカガル！】

が解除をしようと

卷之三

アーマーがページされてライダーフォームへと姿を変える。

「サ比利の本業の力を見せてやる。クロツケアツア」

「クロツクアツ」

するとザビーは高速で移動をしてファイズに攻撃をする。彼女は攻撃を受けながらもなんとかしようとするがやはりクロツクアツプをしている相手に攻撃は当たらない。

「ふんクロツクアツプが使えないお前などに俺が負けるわけない!!」「それはどうかしら?」

彼女は左手のファイズアクセルのメモリを外してファイズフォン

にセツトをする。

【コンプリート】

装甲が展開されてファイズアクセルフォームに変身をする。

「付き合つてあげる10秒間だけね？」

「ふんクロックアップ」

【スタートアップ】

【クロックアップ】

一瞬でお互いに高速モードが発動をしてお互いにぶつかっていく。彼女は右手にファイズエッジを持ちザビーのボディを切りつける。

「くそ!!ライダースティング!!」

【ライダースティング】

彼は必殺技のライダースティングを発動させるが彼女はそのまま接近をして彼が放ったライダースティングをかわしてボディにファイズエッジを命中させてファイズエッジのモードを変えて最大で切りつけた。

アクセルスパークルカットを決める。

「が・・・あ・・・・・・」

【タイムアップ リフォメーション】

胸部装甲が閉じられてノーマルファイズへと戻り彼女はやれやれといいながら札を張り転生者は転送される。残されたザビーゼクターをどうしようかなと考えていると

【クロックオーバー】

「ぐ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

【カブト?】

そのままカブトは腰部をタップをする。

【クロックアップ】

「消えた・・・・・目的はザビーゼクターだったの?」

彼女は変身を解除をしてカブトの目的がザビーゼクターなのかなと判断をして研究所の方へと戻る。

## 十六夜 零斗

「ここは日本にある家、一人の老人が一人の子どもたちを見ていた。ひとりは青い髪をした女の子、もう一人は黒い髪をしている男の子が木刀を持ちぶつかっていた。

「…………そこまで!!」

二人は一人の老人の言葉を聞いて木刀を降ろした。さてではお話をしよう子の人物の名前は風鳴 計堂その人である。

原作では真の黒幕と言つてもいいのだがこの世界では……

「親父失礼するぞ」

「おう弦十郎に八紘か…………よう来た」

「それで翼と零斗はどうですか?」

「うむ一人とも筋はいいからな…………それにしても零斗がここにきてだいぶ経つた…………」

二人は十六夜 零斗を見ていた。今から数年前十六夜 零斗は父と母を失った。そこで彼の父親の親友であつた弦十郎が父である計堂に頼み養子にするようにお願いをして現在に至る。

「…………イチイバルの強奪事件と同じ感じだな…………」

「うむいざれにしてもアメノハバキリは翼の歌で起動をした以上な…………」

「私的には反対です。」

「わかっている八紘…………だがノイズと戦うにはシンフォギアンシステムの力が必要なんじや…………」

「わかっています。」

「わしもできる限りの補助はする。弦十郎は引き続いて二課の総司令を頼むぞ?」

「ああだが親父…………」

「わしの方でも当たらせるとしよう…………」

「人がいなくなつた後計堂は考え事をしていると忍者が現れる。

「計堂さまご報告が」

「見つかつたのか?」

「残念ながら追わせていた部下が逆に・・・・・」

「そうか・・・・・ふーむ緒川」

「なんでしょうか？」

「確かに前には息子が三人いたな?」

「はいおりますが・・・・・」

「次男である慎次を翼の護衛につかせろ」

「はあ・・・・・・・」

「零斗の方にはくの一をつかせるとしよう・・・・・・・」

「くの一ですか?」

「うむ」

（何を考えているのかわからないが従つておくとしよう・・・・・・・）

緒川 藤吉郎はそう思いながら彼の指示を聞くことにした。

零斗 side

今俺は暇をしていた。鏡の方を除くとダークワインディングとドラグレツターとマグナギガがこちらを見ている。転生者たちを倒すのが俺の使命でもあるからな・・・・・さて俺はデッキを構えるとベルトが現れて構える。

「変身!!」

デッキを装着をして俺の姿が変わり仮面ライダーナイトへと変わる。まあミラーワールドに行かなくても変身ができるのでいいかな?さてドラグレツターたちには転生者の差がしてもらい見つかつたみたいなので俺はその場所までミラーワールドを経由をして向かうこととした。

「くつくつく・・・・・・さーて暴れるとするか!!変身!!」

奴の姿が変わりあの姿はガオウだな?さて行きな。

【アドベント】

『ぐおおおおおおおお!!』

「何!?ドラグレツターだと!?が!!」

ドラグレツターが噛みついて奴をこちらの世界へと送りこんできたな・・・・奴はドラグレツターが離れたのを見てガオウガツシャーを構える。

「誰だ!!俺をミラーワールドに入れやがったのは!!」

一  
俺  
だ

「ナイトだと!?」

奴は俺の姿を見て驚いているがダークバイザーを抜いて俺は切りかかる。

「せいい！ てめえがなんて俺の邪魔をする！」

「貴様が転生者たつてことはわかつてゐる。何か目的かは大体はわかつてゐる。」

消えてもうううぜ!!

「ふん

ダークバイザーを使い俺は奴の攻撃をかわしていきカードを装填する。

【トリックベント】

九  
一

アルチャージ

甘いな・・・・・俺の分身たちは奴の必殺技を受けて消滅をするが奴は俺を探しているな?

「とこだ! とこにいる!」

十一

ルベント】のカードを発動させていた。

はああああああああああああああああ!!

飛翔斬が命中をして相手を吹き飛ばして変身を解除させる。やれ  
やれ転生者はいつたいどれだけいるんだよ・・・・・・・・・・  
いつに札を張つて天界へと送つてつと・・・・・・・・・・  
ラーワールドから脱出をしてから変身を解除をする。  
「ふう・・・・・・・・・・いつたいどれだけ転生者がいるのやら・・・・・・・・・・

神エボルトさん曰く奴によつてナデポやオツドアイなどをしている奴がいるから気を付けろと言つていたな・・・・うわー確か色々と転生者がいるわな・・・・原作もまだ始まる前だし計堂のおじさんは優しい人になつて いるわどうなつて いるんだ?まあいいか・・・・・」

零斗は そ う い い な が ら デ ツ キ を 懐 に し ま い 彼 は 家 へ と 戻 る の で  
あ つ た。

クリスの特訓T2メモリとの相性

クリスを救つてから数週間が立ちリボルギヤリーを止めて荘吉は何をしているのかというと?

はああああああああああああああああ!!

甘いぞクリス

彼女は動きやすい格好になつており髪の毛もボニー・テールにして莊吉に殴りかかつてゐるが彼は彼女の攻撃をはじかせたりしてゐる。

「さて休憩にするか」

「おはようございます」

(ふも・・・やはり彼女に合っているのはトリガーカービングアームズかな? トリガー自体は銃撃のメモリだしな、だがアームズは逆にそれをベースに剣や銃などに変えることが可能だ。)

彼が考へてゐるのはもう一つあるロストドライバーを彼女に託すことである。だからこそ現在は彼女が仮面ライダーになつても体力を使うために鍛えているのだ。

— . . . . .

先生

クリス……………静かにしているんだ」

ロストドライバーを腰に装着をしていると人がたくさん現れる。現れたのはライオトルーパーがたくさん現れてアクセルグリップガントを構えている。

多すぎるな

也先生

「いいなクリス、ここから動くなよ？もし何かあつたらこれにこれをさせいいな？」

彼は歩きだしてスカルメモリではないメモリを出して押す。

「變身」

【エターナル】

【エターナル】

スカルとは違ひ白いボディにマントを羽織つた戦士になる。仮面ライダー エターナルが登場をする。

彼は歩きだしてライオトルーパーたちはエターナルに発砲をする。だが彼は背中のエターナルロープを使いライオトルーパーたちの攻撃をふさいでいきエターナルエッジを構えて突撃をする。

エターナルエッジの斬撃がライオトルーパーたちを切り裂いていき爆発が起る。彼は右手に青い光球を作りそれを投げつけてライオトルーパーたちを吹き飛ばした。

だかライオトルリバーの数は一向に減っていない。

モリーは使えないからな・・・・仕方がない

彼はエターナルメモリを外してエターナルエッジの方に装着させた。

【エターナルマキシマムドライブ!】

エターナルエッジの刀身に青い炎が纏わされて行きそれを振るいた  
イオトルーパーたちは吹き飛ばされる。

「師匠すごい!!」

だがクリスは気づいていない・・・・その後ろから迫つてくる人物を・・・・エターナルは次々にライオトルーパーたちを撃破していく彼はそろそろほかのメモリーも使おうかなと考えている時。

何？

彼は振り返るとクリスが一人の男につかまっていた。姿的に転生者だなと思いながらもクリスがそこにつかまっているせいで彼はどうしようかと考えている。

「動くな……そして武器を捨てろ!!」

彼はエターナルエッジを捨てる。相手はへへと笑いながら目的が達しているのかと考えているがクリスは莊吉に言われたことを思い

だした。

『もし何かあつたらそれをそれにさせいいね?』

彼女はもらつたメモリとメモリガシャツを構える。

【ビートル】

刺されたビートルフォンが変形をしてクリスを捕まえていた人物に体当たりをしてエターナルはエターナルロープを脱いでメモリをマキシマムスロットにセットをする。

【ルナマキシマムドライブ!】

「ふん!!」

右手が伸びてクリスの体を巻き付けて自分の方へと引き寄せる。彼女はクリスの頭を撫でる。

「よくやつたなクリス…………」

「えへへへへへ

「貴様ああああああああああああああ!!」

「さて悪いがお前には色々とお仕置きをさせてもらおうか? まずはこのメモリを使わせてもらおう……だが周りの奴が邪魔だな……」

【トリガーマキシマムドライブ!】

トリガーマグナムが現れて彼はさらにメモリを装填する。

【マネーマキシマムドライブ】

「は!!」

放たれたコイン型の弾丸がライオトルーパーたちに放たれてそれが体内に入つていきライオトルーパーたちは一体何をしたと思い攻撃をしようとしたが突然として倒れる。

「ふ…………お前たちの生命エネルギーを吸收をしたんだ。当たり前だな…………さて後はお前だけだ…………どうする?」

「おのれ!!おのれおのれおのれ!!だつたら貴様の生命を奪うだけだ

!!

「ほう俺の生命力を吸い取るね…………」

相手はベルトを装着する。メテオドライブである。

「変身!!」

相手は仮面ライダーメテオに変身をしてエターナルに襲い掛かる。

「ちい相手はメテオかよ…………だつたらもう一つの姿で相手をしてやるよ」

彼はエターナルメモリを抜いて黒いメモリを出して押す。

【ジョーカー！】

【変身】

【ジョーカー！】

「何!?」

「仮面ライダージョーカー…………さあお前の罪を数えろ…………」

彼は走りだしてパンチをお見舞いさせてメテオを吹き飛ばした。彼は右手のメテオギヤラクシーの真ん中のジュピターのスイッチを押す。

【ジュピターレディ?OKジュピター!!】

「くらいやがれ!!」

ジュピターの力を解放させてジョーカーに殴りかかる。彼は回避をするが左足が彼のボディに命中をして吹き飛ぶ。

「ぐあ!!」

「師匠!!どうしたら…………」

するとバットショットが自分にルナメモリを刺してという動きをしているのでクリスは指示に従うこととした。

【師匠を救つて!!】

【ルナマキシマムドライブ!!】

バットショットは超音波を発動させてメテオにダメージを与えている。

「ぐあ!!何だこの音は!!」

「クリスか…………おら!!」

「ぐあ!!」

ジョーカーの蹴りがメテオに命中をしてそのまま彼は連続した拳をメテオに殴り続ける。

【さーて決めるとするかな?】

【ジョーカーマキシマムドライブ!!】

【ライダー・パンチ…………おりやああああああああああああ!!】

右手に黒いエネルギーをためた拳がメテオに命中をして吹き飛ばされた後、ジョーカーはもう一度マキシマムスロットを押す。

【ジョーカーマキシマムドライブ!】

# 「ライダー キック!!」

そのまま走りながら飛びライダーキックがメテオに命中をする。

メテオは爆発をしてシミレーターはふうといいながら変身を解除をする。

先生！

の頭を無である。

「よくやつたなクリス・・・・・・俺が言つた言葉を思いだしたな。」

彼はメテオに変身をした人物に近づいて札を頭に張ると転送され

る、そして愛用の帽子をかぶる。

V  
!!

•  
•  
•  
•  
•  
•  
V

クリスがVサインをしたので彼もVと同じようにする。

コードは000 ネフイリム対000

蓮子 S i d e

それから数年が経ちマリアが19歳になり私は20歳、セレナが13歳になつていた。調と切歌の二人の年知らんな（笑）まあ私はここで普通に過ごしており5つのギアを使いこなしながら転生者たちと戦い続けてきた。

突然の爆発をくらって私は吹き飛はされた  
私をキヤツチをしてくれたつて・・・・・

「アリがニウオーネバジノ

私はオートバジンを撫でてから共に移動をしながら爆発をしたであろう場所へと移動をする。おそらくネフイリムが暴走をしたのね・・・・・

「周を置いて、ナまち  
一切ちやん逃げで！」

## 「切歌に調!!」

私はオーラがアーマーを出して調子の瓦礫をとるためにアーマーフラスクター形態にする。

卷之三

【シングルモード】

オーラアカンから放たれるヒームが調の瓦礫を破壊して私は一人を見る。

一  
大  
丈  
夫  
？

「蓮子お姉ちゃん」

「は!! セレナ達が!!」

「オートバジンこの子たちをお願い」

オートバジンは一人を抱えて脱出をするのを見てから私はネフイリムが暴れているであろう場所へと移動をする。バイクがないと苦労をするけど仕方がないわね。

蓮子 side 終了

燃え盛る研究所で暴れる白き怪物・・・・その名は完全聖遺物『ネフイリム』だがまだ不完全な状態のまま起動をして暴走を起こしたのだ。そしてそれを再び眠らせるためにセレナ・カデンツヴァナ・イヴは自らの意思でアガートラームを纏いマリアやナスター・シャを守るために絶唱を歌う決意を固めていた。

「セレナああああああああああああああああああああああああああ!!」  
（ごめんなさいマリア姉さん・・・・でもこうするしか・・・・こうするしかマリア姉さんや蓮子姉さんたちを守ることができないの!!だから・・・・だから!!）

彼女は絶唱を歌おうとしたときに光弾がネフイリムに命中をする。

「「え?」」

「あー間に合つたみたいだわ大丈夫かしら?」

「蓮子・・・姉さん?」

「蓮子・・・どうして・・・・」

「よっこいしょ!!」

彼女は一気にセレナの場所へと降りたちネフイリムを見ている。セレナは慌てていた。

「蓮子姉さん下がつてください!!ここは私がやります!!」

「いいえ下がるのはセレナ・・・・あなたよ」

彼女は腰にオーガドライバーを装着をしてオーガフォンを出す。コード0, 0, 0を押してエンターを押す。

【スタンディバイ】

「変身」

【コンプリート】

彼女がオーガドライバーにオーガフォンをセットをして変身をして仮面ライダー・オーガに変身をする。

「蓮子・・・お姉さま?」

• • • • • • • • • • • • • • •

彼女は腰のオーガストランザーを抜いてミツションメモリーをセットをする。

〔レ  
テ  
1〕

オーラストランザーの刃が伸びて長剣モードへと変わり彼女は歩きだしてネフイリムの元へと行く。ネフイリムは咆哮をあげて襲い掛かる。

一  
吉いれ

オリガストランサーで岡腕を受け止めてから腰のオリガノカンを外してフォンブスター形態へと変える。

【バーストモード】

連続した光弾がネフイリムの頭部に命中をしてそのまま胴体を切りつけてダメージを与える。

「お！」

そのまま切りつけた場所にさらにオーガストランザーで連続で切り裂いてダメージを与えていく。

「これで終わりにしてあげる」

彼女はオーガフオンを戻してから開いてエンターキーを押す。

## 【エクシードチャージ】

オーガストラッシュが命中をしてネフイリムは爆発を起こして彼女はオーガストランザーのミッショントモリーを外して短剣モードへと変えて腰にセットをして変身を解除をする。

一蓮子姉さん

「無事みたいねセレナ」

「姉さんのその力・・・・・はいつたい・・・・・  
「これが私が隠していた力なのよ。」

蓮子はそういつて笑いながら研究所を見ている。辺りは爆発をしているのでここでは過ごせないわねと思いながらナスター・シヤにどうするのかと話をする。

「いずれにしても私たちが住む場所が必要になりますね……」蓮子の言葉を通りに研究所が使えない状態なのでどうするかと考えることにした。一方で蓮子は気になつていることがある。

（そういうえばネフイリムのコアが見えなかつたわ……いつたいどこに……）

彼女が言つたコアは女性が手に持つていた。無言で彼女はネフイリムのコアを持ち次元の穴を開いてそのまま姿を消す。

一方で別の場所

「ぐあ!!」

「どあ!!」

「…………」

「てめえ!!何の真似だ!!」

サソードとドレイクの二人はカブトに襲われていた。場所は日本でありカブトは無言でカブトクナイガンを構えていた。

「おい弟やるぞ!!」

「おう兄者!!」

「クロツクアップ」

【クロツクアップ】

「…………」

【クロツクアップ】

三人はクロツクアップをしてお互いにぶつかつて中ナイトに

変身をする十六夜 零斗は見ていた。

「仮面ライダー同士が戦つてゐるがカブトにサソードとドレイクか……」

一方でカブトたちの戦いではドレイクはライダーシューティングを構えている。

「くらいやがれ!!ライダーシューティング!!」

【ライダーシューティング】

• •

放されたライダーシューティングを見てカブトはカブトゼクターのボタンを押す。

[1]  
[2]  
[3]

卷之三

「おふ、おおおおおおおおおおおおおお！」

サンードがサンードセイバーをふる三たかガブトはアツクアモードで受け止めてから左手をつかんで放たれたライダーシューティングをサソードでガードをする。

• • • • • • • • •

そのままゼクターホーンをライダーフォームの方へと倒す。

【ライターキッケ】

そのままサソリドを躊躇トレイクにも命中をする

二人は爆発をしてクロツクオーバーとなり二人の変身が解けていきカブトはサソードゼクターとドレイクゼクターを回収をする。さらに二人には札を張り転送されるのを見て零斗は一体何者なんだろうと見ていたがカブトはそのままクロツクアップをして逃げていき零斗も撤退をする。

クロックアップをした方アトはクロックオーハーを解除をしてセクターを外す。

「ふう・・・・・・これでハイパー・フォームになつてもパーソナル・エクトゼクターの三体がそろつたわね。神工ボルトさんが言つていた転生者かしらあのナイトも・・・・」

彼女の名前は天道 文子・・・・前世では特撮ファンのOLである。カブトの転生をもらつたのはいいが神エボルト曰く。

「つてことはそいつらを倒せば好きに使つてもいいの!!」  
る三体のゼクターがあの世界に散らばつてゐるんだ。」

「えつとはい・・・・・・」

「よつしやあああああああああああ!!ゲットをするわよ!!」

「えつといつてらつしやい」

エボルトは苦笑いをして彼女を送るのであつた。

一方で天界

「何!?あの世界に転生者はまだいたのか!?」

「はい!!奴曰く悪のライダー以外にも送ったみたいでして・・・・・・」

「何!?」

彼は再び資料を確認をすると確かにその通りだつたので頭を抑えていた。

「なんてことだよ・・・・・彼らには苦労をさせてしまうな・・・・・」

「エボルトさまも行けませんもんね?」

「ああそのとおりだ。あの世界に行くことはできるが・・・・・だが自分の世界を離れるわけにはいかないからな・・・・・あの世界に転生をさせたあの子たちに任せるだけだよ・・・・・頼んだよ戦士たちよ・・・・・・」

# 現れたプログラライズ戦士

零斗 s i d e

あれから数年がたち翼はアメノハバキリを纏いノイズと戦つている。俺もナイトに変身をして共に戦う中新しい奴が入っている。

天羽奏、ガングニールの装者でありノイズを家族に殺されたそうだ……現在俺達はノイズが現れたと聞いて出動をしている。

「…………さて奏」

「なんだ？」

「どうして俺のバイクに乗っている？」

「いいじやねーか翼のバイクに乗ると怖いんだよ…………」

「はあ…………まあいいがあまり動くなよ?」

俺はドラゴンナイトに出てきたバイクに搭乗をして奏は俺の後ろを抱き付いているが…………当たっているのですが!?

「なあ零斗」

「なんだ?」

「実はなあたしには幼馴染がいたんだ…………けどあの時あたしを逃がすためにあいつは…………」

「ちなみに名前は?」

「不破 或歩だ」

「…………そつか」

バイクを吹かせながら俺は走つていき現場に到着をするが一人の戦士が戦っているのを見た。あれはゼロワンだよな?

「なんだあれは!!」

「零斗と同じ?」

ゼロワンはアタッショカルリバーを振るい構えている。

「グラスホッパーアビリティ! ライジングカバンストラッショ!」

「はあああああああ!!」

必殺技を放ちノイズ達が撃破されて行くのを見て俺たちは見ていると突然として光弾が飛んできて俺達はかわすとそこに立っていたのはギャレンの姿だ。

「ちい外したか・・・・・・あの神も使えないな・・・・まあいい  
こいつらを倒せばいいだけだからな!!」

【ジエミニ】

ギャレンは分身をして俺達に襲い掛かつてきた。さらにノイズが  
いるから俺は声を出す。

「翼と奏はノイズを頼む!!」

「奏だつて!?」

ゼロワンが言うがギャレンが放つてきたので俺はダークバイザー  
でガードをする。

零斗 s i d e 終了

ゼロワンはアタッショカリバーでギャレンに攻撃をするがあちら  
はギャレンラウザーを使い攻撃をしてきたのできりがないなと思  
いプログラライズキーを出す。

【ウイング！オーソライズ】

ライジングホップバーから姿を変えて変身をする。

【プログラライズ！ライジングファルコン！】

フライングファルコン形態へと変身をして空を飛びギャレンに攻  
撃をする。ギャレンはギャレンラウザーを放つがゼロワンフライン  
グファルコン形態は回避をしてアタッショニアローを構えてギャレン  
にダメージを与える。

「ぐ!!」

「さらに姿を変える!!」

【ファイアーリオーソライズ！】

トラ型のライブモデルが発生をして着地をしてからセットをする。

【プログラライズ！フレイミングタイガー！】

「は!!」

「ぐ!!」

炎を出してギャレンにダメージを与えてそのまま接近をして炎の  
爪でギャレンのボディを切りつける。

「だつたらこれで決めてやる!!」

「・・・・・・あんたを止められるのはこの俺だ!!」

【ドロップ！ファイアーバーニングスマッシュ！】

【フレイミングインパクト!】

お互いにドロップキックとけりが命中をしてギャレンが吹き飛ば

一方でナイトの方もギヤレンの射撃に苦戦をしていた。彼はカーラ

トを装填する

「や、こや」

片にギガキヤノンが装着されるのを見てギヤレンが驚いている。

は!!なへてアヘーがソルクのスリを打っているケガ!!

「黎明へ、ひいたい！」

「ちい!!」

彼はそのまま接近をしてカードを装填する。

卷之三

ヴァイングランナーを装着をして連続した突きを放つガートの方を装填をしてギヤレンのボディを突き刺したのである。

四

彼はファイナルベントのカードを装

【ファイナルベント】

だが現れたのはドラグレッターだつた。そのまま上空へとひドラゴンライダーを放ちギヤレンに命中をして吹き飛ばして一體のギヤレンに戻る。

が  
・  
・  
・  
・  
・  
あ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

そのまま変身が解除されてゼロワンとナイトは近づいて札を張る  
うとしたがお互いに札を持つているのを見てゼロワンの方が張る。

一君もなんだね？

「ああそういうことだ・・・・・・それであんたは？」

「俺の名前は十六夜 零斗だ」

「……………そうだね君が変身を解除をしているからな……………俺も変身を解除をしないとダメだよな？」

ゼロワンはゼロワンドライバーを外して変身を解除をする。奏は 目を見開いている。

「えつとその・・・・・奏・・・・・」

「うわ！」

奏は涙を流しながら彼に抱き付いた  
或歩はそのまま倒れてしまふ

よ!!あたしがどれだけ心配をしたと思つてゐるんだ!!

「ゞ」めん奏・・・・・俺も色々とあつてすぐに出でこれなかつたんだよ・・・・・・・奏には寂しい思いをさせてしまつたね・・・・・・・

「わかつてゐる」

その様子を零斗と翼は見ていた。

「良かつたな奏」

「なんだ？」

「私たちもあんな風になつていたらどうする？」

「私だつてそう・・・・・あなたを見捨てたりしない・・・・・だつてあなたは私の恋人だから・・・・・」

「翼」 · · · · ·

そう彼は翼と付き合つてゐる。訃堂や弦十郎、八紘にも付き合いま

すというと三人は大笑いをして翼を頼んだぞといわれたのである。

ちなみに告白をしたのは零斗からであり翼の方も零斗のことが気になっていたので二人は恋人関係になつたのである。

二課へと戻ると弦十郎が待つていて立つていた。

「戻つたかお前たちそして君が・・・・・・

「俺は不破 或歩だ。奏がお世話になつたみたいだな・・・・・ありがとう・・・・・・」

「気にすることはない君も今日から俺達の仲間だ。」

「・・・・・或歩、少しだけ話がある」

「?」

彼は零斗についていき廊下へと行く。

或歩 side

俺は零斗に連れられて廊下へと来たが・・・・・なんでだろうと待つていると彼は胸元からバツチを出した。

「!!」

その手長は・・・・・まさか・・・・・

「やはりお前だつたか・・・・・久しぶりだな啓斗」

「直哉なのか・・・・・お前は」

「ああ、まさかお前だつたとはな・・・・・」

「なるほどナイトはお前が好きな仮面ライダーだつたからな・・・・・」

「お前はゼロワンか・・・・・てつきりドライブかと思つたぞ?」

「ふふ最近は子どもたちとゼロワンを見ていたからね・・・・・ほかにもバルカンと滅、迅に変身ができる」

「へえー俺はナイトで龍騎とゾルダの力を使えるようにしてもらつた」

お互に前世では同級生であり俺達はコンビの警察官として解決をするコンビである。

「さて再びコンビ復活つてことで!!」

「おう!!」

さて場所が変わり外国

リボルギヤリーに乗っている莊吉と大きくなり原作みたいになつ

ている雪音 クリスは日本へと向かつて出発をしている。

「師匠、私たちはこれからどこへ行くのですか？」

「ああ日本へ行こうと思う…………まあ俺の知り合いと話をすることになるけどな…………」

「師匠の知り合い…………ですか」

「ああそして俺達に渡してきたこのペンドント…………」

「イチイバルつて奴ですね？」

「ああ…………（まさかエボルトさんが寄こしてくるとは思つてもいなかつたけどな…………手紙の内容が俺達にとつては最悪なことになるとはな…………転生者は彼らだけじゃないつてことか…………）」

莊吉は移動をしながらクリスは莊吉にむぎゅと抱き付いてきた。

「えへへへ師匠暖かいです」

「…………そうか？」

莊吉は顔を見せないようにしていた。その理由はクリスの大きな胸が当たっているからだ。

（どうしてこうなつた…………修行させて仮面ライダーアームズとして変身が可能となりさらにはイチイバルもゲットをしてパワーアップをしているんだよな…………アームズの状態でイチイバルの力を使用をして仮面ライダーアームズイチイバルフォームとなることが可能となつてているからな…………そして食事のマナーや箸の使い方なども教えたりしてアナザークリスのようになつたな…………だがたまーにちょせいや当たれええええとか言つたりしている。）

はあとため息をつきながらリボルギヤリーを動かしていたが揺れた。

「うわ!!」

「なんだ？」

彼はリボルギヤリーを止めてクリスと共に降り立つ。攻撃をしたのはイクサのパワードイクサである。

「…………」

「イクサか・・・・・」

「先生!!」

「ああやるとしようか?」

「人はロストドライバーを装着をしてそれぞれのメモリを押す。

【スカル!】

【アームズ!】

【変身!!】

【スカル!】

【アームズ!】

「さあお前の罪を数えろ!!」

## スカル＆アームズ対イクサ

リボルギヤリーを止めたパワードイクサに対してスカルとアームズは降りたちイクサも降りてイクサカリバーを構えていた。

「さてクリス、お前も色々と戦ってきたな・・・・・・」

「はい師匠!! テロリストにノイズなど色々とあります!!」

「うむ今回の相手イクサは厄介な敵だ。あのイクサカリバーは銃や剣にのなれる武器でありそしてあのベルトも武器になっている。」

「なるほど気を付けますね?」

「うむ・・・・・・いくぞ!!」

「はい!!」

アームズは左手の装甲が武器へと変わりマシンガンへと変わつてイクサに攻撃をする。イクサは攻撃をかわしてイクサカリバーをガンモードからセイバーモードへと変えてスカルに切りかかるが彼はスカルマグナムを使いイクサカリバーの攻撃をガードをして蹴りを入れてアームズが攻撃をして吹き飛ばされる。

「よーし師匠が作ってくれたこのアームズセイバーで!!」

彼女は背中に装備されたアームズセイバーを抜いて構える。アームズドーパントが使用をする大剣を莊吉が開発をしてT2メモリの力を引きだすアイテムとして開発をしたものである。

彼女はアームズセイバーを振るいイクサのボディを切りつける。そしてサイクロンメモリをセットをする。

【サイクロンマキシマムドライブ】

「サイクロンセイバー!!」

竜巻を発生させてイクサにダメージを与える。イクサはパワードイクサーに搭乗をしてミサイルなどを発射させてきた。

「ちい!!」

「うわ!!」

二人はパワードイクサーに苦戦をしているとリボルギヤリーが体当たりをしてパワードイクサーを吹き飛ばした。

「まさか?」

「お父さん大丈夫?」

「はあ・・・・調べ物は済んだのか桜花（おうか）?」

「うん終わったよ。でもなんか外が騒がしかつたからリボルギヤリーで体当たりしちゃつた（笑）」

「流石私の妹おおおおお!!」

「クリスは落ち着け、さて桜花、君だつたらイクサに対してどう戦う?」

「・・・・・そうですねダブルなら何とかなりますかね?」

「上出来だ。クリスダブルドライバーでダブルに変身を」

「はい!!」

彼女は一旦変身を解除をしてダブルドライバーを装着をする。すると桜花のほうにもダブルドライバーが現れる。

〔サイクロン!〕

〔ジョーカー!〕

〔変身!!〕

桜花がサイクロンメモリを刺すとメモリが転送されてクリスのドライバーの方に彼女はそのままサイクロンメモリを押してジョーカーメモリを刺す。

〔サイクロン! ジョーカー!〕

仮面ライダーダブルサイクロンジョーカーに変身をして構える。

〔さあお前の罪を数えろ!!〕

「・・・・」

イクサは立ちあがりイクサカリバーをふるつてきた。彼女はかわしてから連續した風を纏わせた蹴りをお見舞いしてイクサを吹き飛ばす。イクサは立ちあがりイクサカリバーを放とうとしたが弾丸がイクサカリバーが吹き飛ばされる。スカルが放つたスカルマグナムが命中をさせた。

「今だクリスと桜花!!」

『これで決めようクリスお姉ちゃん!!』

「おうさ!!」

ジョーカーメモリを一旦抜いてマキシマムスロットの方に刺す。

【ジョーカーマキシマムドライブ!!】

風が発生をしてダブルは上空へとび両足蹴りをお見舞いさせる。

『ジヨーカー エクストリーム!!!』

するとダブルの半身がずれていき二連発の蹴りがイクサに命中をして変身が解除される。スカルは帽子を深くかぶり彼に近づいていき札を張り男性は天界へと転送される。

莊吉 Side

「何とかなったが、さて桜花との出会いを言わないといけないな……」あれは日本にリボルギヤリーで向かう途中で休憩をしている時だった。ボロボロの姿の彼女を保護をして俺はトランクを開けるとそこにあつたのはダブルドライバーとファングメモリーとエクストリームメモリにロストドライバーだった。

そこから俺達は彼女の傷を治すために止めて目を覚ますまで待つた。数週間かかつたが彼女は目を覚ました。

「君、自分の名前は言えるか？」

・・・・・花咲 桜花（はなざき おうか）

そのか桜花ちゃんがいい名前かな

「

卷之三

俺は悩んだがこの子をほつとくわけにはいかず彼女を連れていくことにした。彼女は星の本棚を持つており、いつの間にか俺のことはお父さんはやめてくれと言つたが、彼女はきよどんとしていたので諦めることにした。

クリスは溺愛するほどになつておりクリスお姉ちゃんと呼ばれたのが嬉しかったのだろう・・・・それで彼女が持つてゐるダブルドライバーを使うことで仮面ライダーダブルに変身が可能となつたので状況によつて俺かクリスがダブルドライバーを装着をしてダブルになつたり桜花がファングメモリを使つた形態のファングジョーカーになつたりすることがある。

さて現在俺は奴が吹き飛ばしたイクサカリバーを拾っていた。

「ふむ・・・・・・桜花これを改良つて出来そうか?」

「・・・・・・これ?」

彼女はイクサカリバーを持ちチエックをしていると指をぐつと立てたのでああOK何だなと思い彼女に預けることにした。ちなみにアームズの武器も彼女が作つたものだ。案外武器を作るのは天才かもしない。

俺は白いハットをかぶり日本が見える方角を見ていた。

「師匠・・・・・・日本が見えますか?」

「いや見えないが・・・・・・おそらくあっちだらうなと思う

「お父さん日本は向こうだよ?」

「・・・・・・・・・・・・」

俺は恥ずかしくなり桜花がさした方角に向いた。

「さて向かうとしよう

「はい!!」

「わかりました!!」

二人の返事を聞いて俺達はリボルギヤリーに乗りこんで日本の方へと向かうのであつた。

## コウモリと鬼

特異災害機動二課、シンフォギアシステムと仮面ライダーの保持をしておりノイズに対抗ができる組織である。

そして今日も彼らはノイズを倒す為に・・・・出動をする!!

【アドベント】

『キイイイイイイイイ!!』

コウモリ型のモンスター、ダークレイダーが飛びたちノイズ達に体当たりをして吹き飛ばした。

「はああああああああああああ!!」

ダークレイダーから翼は降りたち剣を構えノイズを切り裂いた。同じく着地をしたナイトがダークバイザーを抜いてノイズに対して攻撃をする。

「やれやれ今日もノイズが現れたのか・・・・全くせつかくのデー  
トが台無しだな?」

「今はそんなこと言わないでよ!!」

「へえー翼はデートを台無しにされたのに?」

「そ、それは・・・・」

二人がイチャイチャをしているのを見てノイズたちが襲い掛かつてきたが一人は斬撃を振るいノイズたちは切り裂かれる。  
「ならまずは・・・・」

「こいつらの殲滅だな?」

ナイトはダークバイザーを腰にセットをしてカードを装填する。

【シユートベント】

ギガランチャーが現れてキヤツチをして構える。

「翼は行け。」

「わかった!!」

翼は走りだして二刀流にしてノイズ達に対して回転をして切り裂いていき翼に襲い掛かろうとしたノイズ達をギガランチャーを放ちノイズ達を吹き飛ばす。

「悪いが翼をやらせるわけにはいかない」

一方で奏と或歩も現場に到着をしてノイズを突き刺した。或歩はフォースライザーを装着をしてステイングスコープオンプログライズキーを構える。

【ポイズン】

「あれ？ ベルトが違う気が・・・・・・」

【まあな・・・・・・変身】

【フォースライズ！ スティングスコープオン！】

サソリ型のライブモデルが刺さり仮面ライダー滅に変身をして突撃をする。

「はあああああああああああああ！！」

左手の伸びてノイズ達を突き刺して彼らに効く毒を発動させて消滅させていく。奏もガングニールの槍を突き刺してノイズ達を次々に消し去っていく。

【やるじやないか奏】

「当たり前だぜ・・・・・・そつちもやるじやねーかよ」

【お互いさまだ】

二人は笑いながらノイズに向かつて走つていき滅はアタツシユアローを装備をして刃でノイズを切つていき奏は槍を投げつけると分身をしてノイズ達を次々に突き刺さり消滅させた。

【やるじやねーか】

【ファング！】

ハイティングシャークプログライズキーをアタツシユアローにセットをする。

【シャークズアビリティ！ バイティングカバンシユート!!】

【は!!】

サメ型のエネルギーが発生をしてノイズ達にダメージを与えた後にフライングファルコンキーを押す。

【ウイング！】

再びアタツシユアローにセットをする。

【ファルコンズアビリティ！ フライングカバンシユート!!】

【は!!】

ハヤブサ型のエネルギーが発生をしてにノイズ達に当たり爆発が起ころ。奏の方も地面に突き刺さつた槍を抜いて滅の方へと歩いていく。

「やつたな!!」

「・・・・・・・・

「或歩?」

「まだいるみたいだ

一方で翼と零斗の方も構えている。

「誰だ!!」

氷が発生をして二人は回避をする。

「仮面ライダーレイか・・・・・・・・

彼の周りが凍つていくのを見てナイトに変身をしている零斗はどうするかと考えていた。

「どうする零斗?」

「方法はある。」

彼はデッキからカードを出す。それは燃え盛る翼の方を出していった。そしてダークバイザーを抜いて姿が変わりドрагバイザーツヴァイの形になつているが目の部分がナイトの形になつていて。そして口部を開いてサバイブ烈火のカードを装填する。

「サバイブ!」

炎がナイトの体を纏わせていき仮面ライダーナイトサバイブ烈火モードへと変わる。レイは驚いている。

「ナイトにあんな力はないはずだ!!」

「翼、援護は任せた!!」

「ああ!!」

一方で歌舞鬼は音激棒を持ち炎を放ってきた。滅はアタツシュアローではじかせて奏は槍を振るい攻撃をするが彼は音激棒で彼女が放つた攻撃をはじかせていく。

「こ、こいつ!!」

「奏伏せろ!!」

彼はフォースライザーベルトを一回閉じて開かせる。

【ステイングユートピア!!】

「はああああああああああああああ!!」

必殺のステイングユートピアを発動させて歌舞鬼に攻撃をするが傘を開いて彼が放つた攻撃をガードした。

「どあ!!」

「或歩大丈夫か!!」

「なんとかな・・・・・・だがあいつは厄介だな・・・・・・」

「これで終わりだ!!」

歌舞鬼は烈火弾を飛ばしたが彼はサソリ型のライブモデルを出してガードをした後後ろへと下がり一旦変身を解除をしてショットライザーを構えてトリガーを引きアサルトウルフログライズキーを出していた。

【アサルトバレット！カメンライダー！カメンライダー！】

「変身!!」

【レディーゴー！アサルトウルフ！】

仮面ライダーバルカンアサルトウルフ形態へと変身をして両手の短機関銃を発砲をして歌舞鬼に攻撃をする。

歌舞鬼は傘でガードをしようとしたが背部にミサイルポットを出現させたアサルトウルフが発砲をしてミサイルが歌舞鬼を吹き飛ばした。

一方でレイの方はナイトサバイブ烈火はカードを装填する。

【ソードベント】

ドラグバイザーツヴァイの刀身が展開されてソードベントを振るつてレイのボディを切りつけていく。

レイは爪で攻撃をしようとしたが翼が大剣でレイの爪をガードをしてその隙をついてナイトが攻撃をして吹き飛ばした。

「これで決める!!」

デツキからカードを抜いてファイナルベントカードを装填する。

【ファイナルベント】

ドラグレッターが変身をしたドラグランサーがバイクになりそれに乗り炎が纏われて行き突撃をするファイヤーダッシュがレイに命

中をして爆発。変身が解除されて相手は倒れる。

一方で歌舞鬼の方もオーソライズスターを構えたバルカンに苦戦をして奏の槍がボディを突き刺して彼はガンモードの弾丸が吹き飛ばす。

「ぐあ・・・・・・」

「これで終わりだ」

〔プレス！バスター・ダスト！〕

「は!!」

マンモスの頭部を模したエネルギー弾を発射させて歌舞鬼に命中。変身が解除されてたのを見て彼は札を札を張り天界へと送る。

一方でナイトこと零斗の方も札を札を張り天界へと転送される。

「やれやれ・・・・・・」

「任務完了かな？」

「そうだな」

「ならデートの続きをしようよーーーー」

「いいだろう」

二人はそのままデートの続きを向かう一方天界神エボルトはふうといいながら机に座つていた。

「お疲れレグリア」

「ありがとう・・・・・・」

「大変ね？」

「お前らも本来だつたらこんなことをするんだぞ・・・・・・」

「まあ私たちはアマルスマに殺されたからね・・・・・それで彼らに

色々とお金を振りこんだりしているわけね？」

「そういうこと・・・・・・さてとりあえず転送された転生者たちをどうするか送らんといけんな・・・・・・」

そういつてエボルトこと如月 戰鬼は歩きだして彼らによつて転送された哀れな転生者たちをどうするかを考えるのであつた。

## 蓮子が助けた男の子

ネフイリムを擊破して研究所が使えなくなり蓮子たちは今普通の家に過ごしているが地下室がありそこにシユミレーション室もあり蓮子やマリアたちが使用をするが今回は別の人間が使っている。

「はああああ……」

蓮子がマイクを使い声をかける。

『じゃあロビンいいわね?』

「はい!!お願いします!!」

蓮子がスイッチを押すとシユミレーションがスタートをしてロビンは腰に力を込めるとオルタ・リングが発生をしてポーズをとる。

「…………変身!!」

両腰のスイッチを押してベルトが光りだして彼の姿が変わり仮面ライダーアギトへと変身をする。ノイズがアギトに襲い掛かるが彼は後ろへとバック転をしてから後ろに現れたノイズに蹴りを入れて消滅させた後左腰のスイッチを押してフレイムセイバーが現れて仮面ライダーアギトフレイムフォームに変身をする。ロビンは左利きのためそのためフレイムセイバーを左手に持ちノイズ達を次々に切り裂いていく。

フレイムセイバーは蓮子を見ながら彼を助けた日を思い出す。

蓮子 side

彼と出会ったのは今から数か月前になる。あれはネフイリムと戦つた後研究所が使えなくなつて普通の家で引っ越しをして改造などをして私のサイドバッシャー やオートバジンは車庫へと入れて地下室はシユミレーションで使えるようにするなどナスター シャさん万能じやん。さて私たちはそんなこんなんでいると切歌が目を光らせて部屋にいつてきた。

「デスデスデース!!」

「切歌どうしたの?」

「蓮子お姉ちゃんこれを見るデース!!」

「これ? 何何…………旅芸人サー カスね…………」

「それが今日この街に来ているデース!!」

「なるほどね、ナスター・シャさんいいですか?」

「ええ構いませんよ?」

「やつたデース!!」

というわけで私たちは夜の部を見るために全員で行くことにした。ナスター・シャさんは家で留守番をするといい私たちだけで来ている。中へと入り私たちは椅子に座つて始まるまで話していた。

「はやくみたいデース!!」

「切ちゃん落ち着いて?」

「そうだよ切歌ちゃん」

「それにしてもサークスか・・・・・・」

「蓮子姉さんは見たことがあるの?」

「いいえ見たことがないわよ。だから私も楽しみにしてるのよ」

照明が暗くなつていくと団長みたいな人が現れる。

『レディーエン! ジェントルマン! 皆さま今日は我が旅芸人サークスショーにようことおいでなさいました。我ら一同皆さまを喜んでもらえるように一生懸命練習をしました!! さあ皆さまショーをお楽しみにください!!』

団長さんがいなくなるとそこからサークスの芸が始まり私たちはそれに魅了されていき彼らはかなりの練習をしたんだなと思い見ている。そしてあつと/orいう間にサークスが終わつたので帰ろうとした。だが私は嫌な予感がしてマリアたちに先に帰らせてからサークスの方へと走る。

蓮子 side 終了

「ふう・・・・・・」

彼の名前はロビン・ペガサス・クラウン、だが彼の本当の名前は沖田 凌平という名前なのであるが彼がこのロビンという名前を名乗つて いるには理由がある。

彼がまだ小さいとき両親と海外旅行をしたときにテロが発生をして両親をその時に目の前で失つてしまう。彼は絶望をしたまま歩いていると旅芸人たちに出会い彼らは彼を育てようと決意をして今に

至る。

彼にとつてここは第二の家族の場所でもあるため講演後休憩時間で彼は外に出ており戻った。

え？

だが彼が見たのは血を流して倒れている団員たちである。彼は一  
体誰がやつたんだと見ているとざしゅという音が聞こえて走ると団  
長の男が切られる瞬間を見てしまう。

「ああ？ まじか、やめりや！」

たな  
..

「まあ俺こうござな?」

現れたのは仮面ライダー黒影、グリドンが現れた。そして男はドリアンロックシードを持ち変身をする。

一變身

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

づく。

すると彼の脇にノハターレンジャーが発生をして彼は叫びながら刃を抜いて仮面ライダーアギトに変身をしてブラー・ボ達に襲い掛かる。

力が!!

影松を構えた黒影の槍がアギトのボディを突き刺して火花が散る。さらにグリドンがドンカチでアギトを叩いた後にブラー・ボは戦極ド

# 【ドリアンスカツシユ!!】

「おら!!

頭部にエネルギーがためられてそれを振り回してアギトを吹き飛ばした。

「が  
・  
・  
・  
あ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
」

「けけーこいつ弱すぎるじゃん!!」

「だつたらさつさと殺そうぜ!!」

グリドンと黒影はアギトを殺すために武器を構えて徐々に近づいていき彼を殺すとした。

【バーストモード】

「「どあ!!」」

「何?」

弾丸が二人を吹き飛ばしてブラー・ボは誰が放ったのかを見ているとそこに立っていたのは蓮子が変身をした仮面ライダーカイザである。彼女はカイザブレイガンを構えていたのを腰に戻した。

「なんだてめえ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

カイザは無言で歩いていきグリドンと黒影は起き上がる。

「やろう!!」

「さつきは良くもやりやがったな!!」

二人は先ほどカイザに吹き飛ばされたのでお返しに攻撃をしようとしたがカイザは一人が放った攻撃を回避をしていき二人は怒り心頭で攻撃をしているので攻撃が当たらない。

「くそ!!」

「当たりやがれ!!」

「ふ・・・・・・」

そして二人は振るつたのがカイザに当たらずにお互いに当たつてしまつたのだ。

「てめえ!!どこに目をつけてやがる!!」

「はあ!?お前の方だろうが!!」

「・・・・・・・・・・」

カイザはカイザショットを抜いてミッショソメモリをセットする。

【レディ】

そのままエンターキーを押して走りだす。

【エクシードチャージ】

「は！」

グランインパクトが黒影とグリドンに命中をして二人は吹き飛んで爆発をする。

「ぐああああああああああああ!!」

二人は変身が解除されて倒れているのを見てブラー<sup>ボ</sup>は笑いだす。「馬鹿やつらだ…………まあいいてめえも殺してやるよ!!」

ドリノコを振り回してカイザに切りかかるが後ろへと交わされてカイザブレイガンとフォンブ拉斯ターの同時攻撃を受けてブラー<sup>ボ</sup>のボディに火花が散る。

「てめえええええええええええええええええええええええええ!!」

【ドリアンスパークリング!!】

「死にやがれええええええええええええええええええええええええええ!!」

ドリノコを振り回して光弾を放つたが彼女は冷静にカイザブレイガンとフォンブ拉斯ターでそのエネルギー弾を落としていき相殺をした。

「な、なに!?」

そしてそのままカイザフォンを戻してミッショントモリをカイザブレイガンに装着をしてブレードモードにして走りだしてブラー<sup>ボ</sup>に攻撃をしてダメージを与える。

「ぐあ!!」

「・・・・・・・・・・・・

さらにボディを切りつけていきダメージを与えてからカイザフォンをずらしてエンターキーを押す。

【エクシードチャージ】

カイザブレイガンの後部を引っ張りトリガーを引きブラー<sup>ボ</sup>に命中をして動けなくさせる。

「何!?」

そのまま構えて走りだしてカイザスラッシュが決まりブラー<sup>ボ</sup>は爆発をして変身が解除されて倒れる。

「・・・・・・・遅かった」

蓮子は三人に札を張り天界へと送った後にサイドバッシャーを呼

んで変身が解除されている彼を連れて家へと戻りマリアとセレナ達と共に彼を看病などをして今に至る。

現在 ロビンが変身をしたアギトはフレイムフォームからストームフォームへと変わりストームハルバードを振り回してノイズ達を切り裂いた。

現在彼はバーニングフォームやシャイニングフォームに変身することが可能となつており蓮子自身も彼が成長をしてくれたことは嬉しかつた。お互いに転生者つてこともありさてどうするかと考えているとマリアが彼にスポーツドリンクを持ってきた。

「お疲れ様ロビン」

「ありがとうございますマリアさん」  
(あらあら)

そうロビンは看病をしてくれたマリアに一目ぼれらしく彼女に告白をして付き合い始めている。蓮子は笑いながらも彼らを見守ることにした。

# ツヴァイウイングコンサート

零斗 side

俺と或歩は今色々と考えていることがある。それはツヴァイウイングのコンサートについてだ。原作では死亡者が多く……響ちゃんなど生きている人が迫害を受けてしまったからな……だがコンサートは通常通りに始めるつてことでネフシユタンの鎧の起動実験を行うことになる。

「それでどうする？」

「正直言つて俺たち一人で観客全員を守ることは不可能だな……」「ああそうだな。頑張つて全員を守るのは不利だからな……」「まあ当たり前だよな……いざれにしてもなんとかお客様たちを守りながら避難活動をしないとダメだな……だが問題はそこに転生者たちが乱入でもして来たら厄介だな……」「或歩の言う通りだ。おそらく敵はノイズだけじゃない……」「いずれにしても俺達がやれるのはできる限り人を逃がすことだ。それが今の俺達がやれるだけのことだな……」

零斗 side 終了

ある一室のホテル。ぶーんと四体の虫たちが飛んでいる中一人の女性天道 文子は声をかける。

「やめなさいカブトゼクター、ザビーゼクター、ドレイクゼクター、サソードゼクター」

四匹は文子の言葉を聞くと着地をしてピタッと止まる。すると彼女の電話がなり彼女は通話に出る。

「もしもし?」

『文子私よ?』

「あらサンちゃんどうしたの?」

彼女が呼ぶサンちゃんとはサンジエルマンのことであり文子は嬉しそうに話をしている。

『いいえあなたはいつ戻つてくるのかなと思つてね?』

「うーんもう少しかかるわよ。ちよつとした仕事をしてからそつちに

戻るからそれまではよろしく——

『わかりました。その・・・・・』

「ん？」

『・・・・・はやく戻ってきてねお姉ちゃん』

「ぐふあ!!」

文子が倒れているのを見て四匹のゼクターたちはお互いに見ているのであつた。そして二課では実験準備をしていた。二人はネフシユタンの鎧を見ている。

「弦十郎おじさんこれが・・・・・」

「そうだ完全聖遺物「ネフシユタンの鎧」ガングニールやアメノハバキリと違い欠片ではない完全なものだ」

「そして今回奏と翼の二人のフォニックゲインによつて起動する実験だ。」

弦十郎達は準備を進める中或歩と零斗は二人のステージを見るために客席の方へと歩いていく。

一方でスタジオ外では?

「えーーー未来来れないの!?」

『ごめん!!親戚のおばちゃんが倒れてそれで・・・・・』

「仕方がないさ響、未来だつて理由があるんだからさ」

「わかつたよ信一と一人で楽しむよ」

『本当にごめんね!!』

彼の名前は大神 信一、大神組の次期三代目と呼ばれているが本人は拒否をしている。そして彼の隣に立つ女の子は信一の幼馴染で立花 響である。

二人は未来に誘われてツヴァイウイングのコンサートを見に來たが小日向 未来は親戚のおばさんが倒れたので家族で遠くへ行つてしまい二人で入ることにした。

一方で天道 文子もこのコンサートへとやつてきていた。彼女も転生者のためどうにかするためにザビーゼクター、ドレイクゼクター、サソードゼクターを扉付近に潜ませて彼女はカブトゼクターと共に中へとに入る。

信一と響も中へと入り一人で席に座りツヴァイウイングのコンサートが始まるまで待機をしている。

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」】】】

ツヴァイヴインクの一人が姿を現したのを見て見に来た人たちは興奮状態になつていて、文子もふふと笑いながら本物を見れたわと思ひ見てゐる。

信一と響もツヴァイウイングのコンサートを見て興奮をしている。一方で地下室では一人のフオニックゲインが高まつていくが警報が鳴りだした。

「なんだと!!」

すると突然として爆発が発生をしてノイズが発生をしたすると扉が突然として破壊されてサソードゼクターたちが扉を破壊したのだ。

「皆さん!! 落ち着いて脱出をしてください!!」

零斗と或歩は皆を逃がす為にお客さんたちの避難誘導を行つてゐる。だがノイズがこけた子どもを狙つてゐる。

「ほら」と持

「ありがとうございます姉ちゃん!!」

或歩たちは避難誘導をし

て  
き  
た。

「零斗殿あとは私たちが!!」

「お願いをする！」

「九一七」

二人は中へと入り翼たちと共に戦う為に向かう中文子はカブトゼクターを持ちカブトに変身をして様子を見ることにした。

「エーで見せてもらいましようか？」

零斗はナイトに或歩はゼロワンに変身をして翼及び奏のところへと合流をする。

「大丈夫か？」

「ああ大丈夫だ!!」

「だがどうしてノイズが・・・・って今は考えている場合じゃないな」

アタツシユカリバーを構えてナイトはダークバイザーナイフを抜いて突撃をしてノイズを切り裂いていく。ゼロワンはアタツシユカリバーで次々に切つていき蹴りを入れる。

「はああああああああああああああ!!」

翼は蒼ノ一閃を放ちノイズ達を撃破するなか奏は槍を振り回して攻撃をすると瓦礫が動いたのを見る。

そこには二人の子どもがいたのに驚いている。

「な!! 子ども!!」

「どうして!!」

「くそ!!」

「奏!!」

奏は急いで駆けつけて槍でノイズを突き刺して撃破する。

「駆けだせ!!」

「響!!」

信一は一緒に走るために手をつなぐ。だが大型ノイズが攻撃をしてきた奏は守るためにガードをするがギアが破損をしてしまう。

「ちい!! ギアが破損!? 時限式はここまでかよ!!」

だがその破片が後ろにいた響に突き刺さってしまう。

信一 side

「響!! うぐ・・・・」

俺は響が血を流して倒れるのを見てしまう中頭が突然として割れるように痛い・・・・『いいかい君はある神様によつて殺されてしま

まつた。そして守つてほしい俺の変わりにだがおそらく君の特典はまだ不完全だと思う・・・・・・だが忘れないでほしいたとえ化け物といわれても・・・・・君は君のままだ』

君は君のままだ』

神工ボルトさんそうか・・・・・おれは!!俺は!!

そして俺は変わった

「な、なんだ!?」

全員が見ていると光が吸いついて、緑色をした単一が立っていました。

「エクシードギルス!?」

「だがなぜ!?

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

エクシードギルスは背部のギルスステインガーを発生させてノイズを次々に突き刺していく。響はうすらと目を開けてエクシードギルスを見ていた。

• • • • • • • •

大型ノイズを中心に集まっているのを見ていると光弾が飛んでき  
て全員が見ている仮面ライダーカブトがそこには立っていた。

ナイトはナイトサバイブ形態へと変身をして敵と戦っていた。力  
ブトは左手を上げるとハイパーゼクターが現れてそれを左腰にセッ  
トをする。

【ハイパーイヤストオフ】

するとカブトの装甲が増していきハイパー・カブトへと姿が変わる。

【エンジニアハイパーテール！】

「・・・・・翼、もし俺が倒れたら任せろ」

「え？」

ナイトは何かを決意をしてデッキからカードを抜く。燃え盛るカード烈火のカードだ。

「零斗…………何をするの？」

「…………」

するとダークバイザーツヴァイが変わり疾風のカードを入れたところに烈火を入れる。

【デュアルサバイブ！】

すると風と炎がナイトサバイブに当たり龍騎サバイブの鎧の一部がナイトサバイブに合体をした姿に変身をする。

ゼロワンは奏のところへと行き彼女のそばにいる。

「大丈夫か？」

「へへ悪い」

「気にするな」

「零斗おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

翼は叫ぶが彼は気にせずにダークソードとドラゴバイザーツヴァイの剣でノイズたちを次々に切り裂いていきカブトハイパーとエクシードギルスも参戦をしてノイズたちを次々に攻撃をして倒す。

「悪いが時間をかけるわけにはいかないからな…………蹴りをつけ るぞ！」

彼はファイナルカードベントを装填をする。

【ファイナルベント】

彼は一機に回転をして炎と風の竜巻を発生させていきノイズ達を次々に攻撃をして撃破していき大型のノイズも倒す。

エクシードギルスは響を抱えて脱出をしてカブトもいつの間にか撤退をしている。そしてナイトが着地をして翼は走る。

「零斗!!」

するとナイトの变身が強制解除されて彼は倒れる。

「零斗!!零斗!!しつかりして!!」

「…………」

「おい零斗は?」

「零斗!! 零斗!!」

「翼落ち着け!!」

「いやああああああああああああああああああああ!!」

或歩は零斗に近づいて息をしているのか確認をしてほつとしている。

「大丈夫だ。彼は寝ているだけだ。おそらくあの姿は強力な分体力などを使うんだろうな・・・」

「良かつた・・・良かつたよ・・・」

翼は涙を流しながらホツとしている中或歩はエクシードギルス及びカブトのことを考えていた。

（あの一人は一体・・・カブトは零斗が言っていたので間違いないがエクシードギルスの方は・・・）

とりあえず奏と零斗を運ぶために或歩たちは彼らを運ぶために病院へと向かうのであつた。

一方でカブトこと文子は？

「さーてそろそろ戻らないとね？ハイパークロックアップ！」

【ハイパークロックアップ!!】

その場所から姿を消して戻る。一方でエクシードギルスから変身を解除した信一は響を病院へと運んだあとその場から姿を消すのであつた。

## ダークドライブ現る。

「庄吉達は日本へと向かっていたが現在攻撃を受けていた。

「うわああああああああああああああああ!!」

「二人ともしつかりつかまつていろ!!」

リボルギヤリーを莊吉が運転をしてクリスと桜花は何かにつかまりながら攻撃に耐えていた。莊吉はスイッチを押して後部からガトリングが放たれて攻撃をする。リボルギヤリーを改造をしており武器なども内臓をされているタイプである。

画面を見るとネクストライドロンがこちらに攻撃をしているのがわかつたので彼は反転をして突撃をする。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「きやああああああああああああああ!!」

リボルギヤリーの体当たりがネクストライドロンに命中をして大回転をしてリボルギヤリーを止めて三人は降りたつ。

すると倒れているネクストライドロンの扉が開いて男が出てきた。

「て、てめえら!! 覚悟はできているだろうな!! 変身!!」

【ドライブ! タイプネクスト!】

ダークドライブに変身をしたのを見て三人はロストドライバーを装着をする。

【エターナル!】

【アームズ!】

【サイクロン!】

【変身!!】

【エターナル!】

【サイクロン!】

【アームズ!】

三人は仮面ライダーに変身をしてダークドライブはブレードガンナーを構えて弾丸を放ってきた。エターナルが前に立ちエターナルロープを使い攻撃をふさいでアームズが左手の装甲に武器を現せて

攻撃をしてダークドライブにダメージを与えるとサイクロンが飛びたち風を纏つた蹴りをお見舞いしてダメージを与える。

「ぐ!!」

ダークドライブはサイクロンに攻撃をしようとしたがアームズが右手を剣に変えてサイクロンに攻撃をしようとしていたダークドライブの攻撃をふさいだ。

「私の可愛い妹分に何をしようとしていやがる!!おらああああああああああああああ!!」

そのまま振りあげてダークドライブを吹き飛ばしてダメージを与える。エターナルはロープを外して空を見る。

「ならこのメモリを使うか。」

【バードマキシマムドライブ!!】

「はあああああ・・・・・・・・」

エターナル背部にウイングが形成されて空を飛び吹き飛ばされたダークドライブに近づいた。

「なに?!!」

「もう一つおまけだ!!」

【アイスエイジマキシマムドライブ!!】

「おらああああああああああああ!!」

右足に氷の蹴りをお見舞いさせてそのまま地上の方へと落下させてからメモリを変えて装填する。

【ホッパーマキシマムドライブ!!】

【ライダーキック!!】

仮面ライダー1号の必殺技を放つようになり勢いよく地面へと向かっていくのをサイクロンとアームズは見ていた。

「師匠!!」

「お父さん!!」

「このままじゃてめえも!!」

「悪いが俺はここまでだよ。じゃあね?」

【ゾーンマキシマムドライブ!!】

するとエターナルの姿が消えてサイクロンたちのところへと現れ

る。

「がああああああああああああああああ!!」

ダークドライブはそのまま地面に叩きつけられて爆発をして変身が解除される。エターナルはロープを纏い彼に近づいていき札を張り天界へと転送される。

ヤオヤオ · · · · · [

「アーラ・ジル・アーラ・ジル」

「そうですね。日本に着く前に休んでから行くとしよう」

3人はリボルギヤリーで

た。ホテルに泊まり莊吉はスマホでニュースを見ていた。

（原作はソロモンの二十九回で如き、ていてか  
か・・・・・）ちらも転生者達との戦いでなかなか日本に行くことが  
できなかつたからな・・・・・だがクリスが原作以上に強くなつて  
しまつたな・・・・・まあいか別に敵として現れるつてわけじゃ  
ないからな・・・・・）

庄吉はコーヒーを飲みながらお風呂に入つて、二人を見てやれやれといいながらクリスの溺愛ぶりを見ながら大丈夫かな?と思いつつため息をつく。

「師匠上がりましたよ——」

「おう」

二人が上がつたので莊吉もお風呂に入ることにした。  
場所が変わり・・・・・夜の海外にて。

赤い宝石の顔をした仮面ライダー、仮面ライダーウィザードが蹴りを入れて敵のライダー・・・・・仮面ライダーシグルドに蹴りを入れる。

# 「貴様!!」

ソニツクアローを放ちウイザードに攻撃をするが回避をしてウイザードガンで攻撃をして弾丸がシグルドのボディに次々に命中

をする。

「つたく少しば大人しくしやがれつてんだ!!」

彼はドライバーの向きを変えて音声が鳴る。

〔ルパツチ・マジック・タツチ・ゴー！アロー！プリーズ！〕

コモンウイザードリングで魔法を発動させてアローの魔法が発動をして魔法陣から矢が放たれてシグルドのボディに当たりダメージが与えられる。

「さあこれでファイナーレだ!!」

## 指輪を変えて—田バツケル

「アーリイイネ！ チツクス、ライカ！ サイロー！」

回転をして飛びあがりリストライクウェイザードがシグルドに命中をしてそのまま回転をして構える。

一  
絵本  
りた

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

シグルトは爆発をして変身が解除されてヴィサートは振り返り  
しゅつと札を投げるとシグルドに変身をしていた男性は天界へと転

ウイザードは変身を解除をすると魔法陣が展開されて一人の人物が現れる。

用事は終れたのかしら?」

「氣にしていいな。それこそ私は……」

「なんだ？」

「何でもない！」

「ならアートの続きをどうじやないか！俺のもつこりパワーが全開なのさ!!」

といつて いる人物の名前は正木 了。仮面ライダーウィザードに  
変身をする男性で年齢は若そうに見えて200歳以上である。

ルで眠っているが、莊吉は起きており街の方を見ていた。すると辺りが変わり驚いていると、一人の女性が現れる。

「なんだ君は？」

「左 莊吉くんね？さあ実験を始めましょう？」

【ラビット！タンク！ベストマッチ！ARE YOU READY?】

「変身」

【ラビットタンク！イエーイ！】

「ビルド!?」

彼はロストドライバーを装着をしてエターナルに変身をする。

(いつたい) いつは何者なんだ!?)

ドリルクラッシャーを構えて、ビルドは攻撃をしてきた。エターナルエッジでドリルクラッシャーを受け止めるが、ビルドは蹴りを入れてエターナルに吹き飛ばしてフルボトルを振つてドリルクラッシャーにセットをする。

【READY GO!! ボルティックブレイク!!】

「はああああああああああああああ!!」

「ぐうううううううう!!」

エターナルローブでガードをして攻撃をふさいだが、ビルドは「へえー」といしながらフルボトルを振り変身をする。

【インフィニティフルボトルグランド!】

インフィニティフルボトルグランドへと変身をしてエターナルは驚いている。

「ビルドにあんな姿があつたのか!?」

「さあいくわよ?」

【エグゼイド】

ガシャコンキースラッシャーを出してエターナルに攻撃をしてダメージを与える。エターナルはメモリを抜いてエターナルエッジに装填させる。

【エターナルマキシマムドライブ!】

「は!!」

青い刃が放たれてビルドに放たれるが、ビルドはガシャコンキース

ラッシャーでガードをする。

「いい攻撃をするじゃない。さすが左  
莊吉君ね？」

— . . . . .

すると彼はロストドライバーを外して変身を解除をする。

「・・・・・といつても本人じやないわ?」

彼女はベルトを外して変身を解除をする。彼女は神工ボルトが生み出した存在でなにかあつたら介入をするようになるとと言われてこの世界へと降りたつたそうだ。

「あなたの実力はわかっただけで私は神エボルト…………まあ自分に報告に行くわ。あなたたちが転生者たちを送つてくれているから…………でも気を付けて？神エボルトこと私曰くその世界に大きな闇が発生をしようとしていると…………」

一覽？

「そう罷……私もそれに対しても調べてある中最中のよ。あなたたちの武運を祈つてゐるわ」

そういうで彼女は次元の扇を開いて去り、辺りが夢れり、アの場所へと戻つてゐる。

大きな闇  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
か  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

神工ボルトは死にかかっていた。今回起こした事件があまりにも強大のためその処理に追わられて彼は机の上で倒れていた。

彼の中にいる美海たちも今回の彼が死にかかっているので何も言えない状態になる。そのためひそひそ声で話をしている。

(え? なんで戦兎死にかかるつているのよ)  
(まあ今回やらかした神の後始末に時間がかかるつているみたいです)

(だから天界に何日も籠つて いるんだよな・・・・・)

「がああああああああああああああああ全然終わらねええええええええええ

えええええ！」

と叫ぶのであつた。

## 第2章 動きだした物語

零斗 s i d e

## 【ファイナルベント】

飛翔斬を放ち俺はノイズ達を撃破した。この二年間・・・・・・ノイズの数は一向に減る気配を見せていない・・・・俺と翼、或歩と奏は出撃をしてはノイズを撃破している。

一零斗

俺はウイングランサーを地面に刺していると翼達が合流をしてきた。どうやら向こうは終わつたみたいだな？

—終わつたのか?—

「ああもちろんだ。だがこのところ数か増えていないか?」

「それは俺も思ってた。だから間に現れるエクシードギルア……………あ、今は戦った後すぐ消えて俺でも追跡は不可能だ」

「… そうか、ハズレにしてもノイズの数が増えた

実。疲れるばかりだよ。・・・・・

このところ転生者の襲撃はないけど…………そろそろ始まる  
か・・・・・原作が。

「零斗？」

「何でもないよ翼…………少し疲れているからなほらお前も明日は学校だろ？」

「む」

「仕方がないだろ？お前は芸能人としても忙しいからな……ほ  
らさつさと戻るぞ」

俺たちは墓地へと戻つていき弦十郎さんに報告をする、「そうか、苦労だつたな皆。今日は上がりて休んでくれ」

「了解だ」

俺達はそれぞれの家へと戻り休むことにした。

零斗 s i d e 終了

次の日の朝。

「ん？」

大神 信一は学校に通う途中で木の周りに人が集まっているのを見て何があつたんだろうと行くと上方から声が聞こえてくる。  
「いい子だから…………もうちょっとだよ!! つてうわ!!」

「ちい!!」

彼は走り落ちてきた女の子をキヤッチをする。そして助けた女の子を見てため息をつく。

「お前は相変わらずだな響…………」

「し、信一!? つて何やつているの!?」

そう現在お姫様抱っこ状態のため彼女は顔を赤くしている。彼ははあとため息をついていつたい何を助けたんだろうなど見ているとニヤーと猫がいたので彼は納得をしているがそういうば……と確認をする。

「そういうえば響、お前学校はいいのか?」

「え?」

彼は時計を見ると彼女の顔が真っ青になっていく。

「あああああああ!! 遅刻だああああああああああああああああああああ!!」

「つたくしようがないな、ほら乗れ」

「え?」

「送つてやるよりディアン音楽学園だろ?」

「いいの!!」

信一が運転をするバイクに乗りこんでヘルメットを渡して彼はアクセルを踏みリディアン音楽学園へと向かうのであった。

そしてリディアン音楽学園へと送つた後彼は自分の学校へと向かう。学校二到着後響が怒られて昼休憩の時に未来はため息をついていた。

「全く響は…………信一にも迷惑をかけて」

「ごめんなさい…………」

「もう謝るのは私だけじゃなくて信一にもでしょ？全く…………」「面目ないです…………」

未来は呆れながらもとりあえずご飯を食べないと行けないと思いつつ響も一緒に頼んで席に座りご飯を食べる。

「見て風鳴 翼さんよ」

「本当に綺麗だわ…………やつぱり恋人がいるって節は本当じゃないかしら？」

（うわーやつぱり翼さんは綺麗だな…………あんな人のようにわたしもなりたいな――――）

響は翼をじーと見てあんな人のようになりたいなと見て授業を頑張るのであつた。そして彼女は今日は楽しみにしているのはもう一つあつた。

それはツヴァイウイングの新曲が今日発売日のため彼女は授業が終わり買いに行くことを決めていたので彼女はウキウキしながらCDショップへと寄つてCDをゲットをして寮へと戻ろうとしたときにサイレンが鳴る。

「これってノイズ!?」

響は逃げようとしたが女の子がいたのを発見をして見捨てる事ができずに走りだしして女の子を抱えて一緒に逃げる。

信一は響が女の子を抱えて逃げるのを見つける。  
「あれは響？まさか!!」

響 side

「はあ…………はあ…………」

私たちは必死になつて逃げた。けれど壁際に追い込まれてしまう。このままじや私たちはノイズに…………

「お姉ちゃん…………私たち死んじやうの？」

「…………死なせない!!誰もあの時見たあの人たちのように!!絶対にあきらめたりするものか!!Balwi s yall N e s c e l l gun g n i r t r o n」

響 side 終了

一方で基地の方では反応が出ていたので朔也とあおいが調べてい

る。零斗と或歩も始まつたのだなと思い画面を見ている。

「こ、これは!!」

「どうした!!」

「高エネルギー反応の正体が特定!! ガングニールです!!」

「ガングニールだと!?」

「そんな馬鹿な!! あたしのガングニールはここにある・・・・・・」

「わからない以上俺達は現場に向かわないといけない」

四人は現場へと向かっていく中響は突然自身にまとまつた鎧に驚いている。

「何これええええええええええええ!!」

「お姉ちゃんスゴイ!!」

ノイズが襲い掛からうとしたときに鞭が貫通をしてノイズ達が消滅をする。

「な、何!?」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

吠えながらエクシードギルスが乱入をしてノイズ達を切り裂いていく。響達は驚いているとバイクの音が聞こえてきた。

「バイク?」

【アドベント】

『キィイイイイイ!!』

コウモリ型のモンスター・ダークウイングがノイズに突撃をして撃破すると奏と翼もギアを纏いバイクから飛びノイズに攻撃をする。

「ええええええええええええええ!!」

ナイトとゼロワンは近くに止めて響の方を見る。

「大丈夫かい?」

「君はここでその子を守るんだいいね?」

「はい」

ナイトはダークバイザーにカードを装填する。

【ストライクベント】

マグナホーンを装着をして構えてビームを放ち攻撃をする。ゼロワンの方はアタッショカリバーを構えて突撃をしてノイズを切つて

いく。エクシードギルスは伸びているギルスクロウで切りつけていきノイズを撃破する。

「アンノウン…………」

「翼、アンノウンは後だ。今はノイズを倒すぞ？」

「ああ!!」

彼はソードベントのカードを装填する。

「ソードベント」

ドラグセイバーを装備をするがそれを翼に渡す。

「いくぞ!!」

「ああ!!」

二刀流にしてナイトと共に剣を構えて突撃をする。ゼロワンは奏を援護するためにアタッシュユショットガンを出して援護をするために放つ。

大きなノイズが現れたがゼロワンとナイトはカードや必殺技を放つ。

「ファインアルベント！」

「ライジングインパクト！」

二人は走りだしてナイトは飛翔斬を、ゼロワンはライトニングインパクトを放ちノイズを貫通させて撃破する。

ノイズがいなくなつたのを確認をしてゼロワンたちは変身を解除をする。エクシードギルスは立ち去ろうとした。

「ま、待つてください!!」

「…………」

「ごめんなさい!! 私二年前…………あなたのことを化け物つてでもあなたがいなかつたら私は…………」

「俺もお前に謝らないといけないな響」

「え?」

エクシードギルスは変身を解除をして響は目を見開く。

「え? 信…………」

「あれがお前が言つていた化物の正体さ…………」

「そ、そんな…………私は信一を…………」

「気にしていないさ……」

(やはり彼も俺たちと同じ転生者つてことか……エクシードギルス……いやアギトの力が不完全な状態つてことか?)

彼はそう思いながら二人を二課へ連れていかないといけないと思い連れていく。

一方で海外。

「どあ!!」

「…………弱いな貴様」

ヘラクレスオオカブトの姿をした戦士仮面ライダー。ブレイドを相手にしているのは顔がハートになつている戦士仮面ライダーカリスだ。

「ふざけるな!!」

ブレイドはカードを出してスラッシュをしようとしたがカリスは一枚のカードを出してカリスアローに装着されたカリスライザーにスラッシュさせる。

【リモート】

するとカードが光りだししてブレイドが使おうとしたカードが光りだしして中からアンデットの封印が解かれる。

「どあ!!こいつら!!」

「…………」

カリスは二枚のカードを出してスラッシュさせる。

【バイオ!チョップ!】

カリスアローからツタが現れてブレイドの体を巻き付けてそのまま引き寄せて手刀をお見舞いさせてブレイドを吹き飛ばす。

「が!!」

まずは二体を封印をしてカードを奪う。

「てめえ!!俺のカードを!!」

そのままカリスはラウズする。

【キック!サンダー!ライトニングブラスト】

「は!!」

ライトニングブラストが命中をしてブレイドのカードなどが彼の

ところへと舞い降りる。

「よいしょつと回収つと」

「お、俺を返せ…………」

「悪いけど君は天界へと送るよ?」

札を張り天界へと送ると後ろから女の子が現れる。

「さすがね?」

「あなたは?」

「神エボルト…………まあ代理人つてところかしら?」

「代理人?」

「まあ彼から生まれたのは事実よ?あなたにプレゼントを持つてきたりのよ」

「プレゼント?」

彼女の手からベルトが2つ託される。

「これは…………」

「さつき倒したブレイド、以前転生者が使っていたギャレン…………プレゼントよ。ついでにラウズアブソーバーもあげる」

彼女から光出してラウズアブソーバーなどを手に入れる。

「じゃあ頑張つてね?相川 一真君」

彼女はそういう手を振り次元の扉を開いて去っていく。彼もまた歩きだして日本へと向かうのであった。彼には全てのラウズカードを手に入れたことになる。

## 連れていかれる一人

黒い車に乗せられる信一と響を連れて二課へと戻る零斗達、翼と奏はなぜ響がガングニールを纏えるのかわからぬため調べる必要があると思つてゐる中零斗と或歩は目を閉じて疲れを休んでいた。

転生者との戦いなどもあり彼らの体は疲れ切つていたので目を閉じて休むことにして到着をしたら起きることにした。

「ねえ信一私たちどこに連れて行かれるの!?」

「響落ち着け、別に怪しいところじゃないだろう・・・・てか抱き付くな」

「えーーーだつて怖いんだもーーん!!」

「てか俺の姿を見て怖くなかったのか?」

「いや信一だつてわかつたら安心をしてね (笑)」

「やれやれ・・・・」

翼と奏はその様子を見て自分の彼氏に話しかけようとしたが彼女達の彼氏は眠つており翼は蹴りを入れる。

「いつて!!何をするんだ翼!!」

「ふん!!」

「おら!!」

「ほぐうううううううううううううううううううう!!」

「え?」

突然として翼と奏が零斗と或歩に攻撃をしたので二人はキヨトンとした状態で驚いてしまう。そして車はどこかの場所に到着をするが響は驚いている。

「え?!こつてリディアン学園ですかよね!?

「リディアン音楽学園だな・・・・今日俺が送った記憶があるような・・・・」

二人は案内されてる中男性陣はボロボロの状態になつていた。

「お・・・俺達がいつないにをしたっていうんだ・・・・」

「ふん!!」

(おそらくかまつてくれなかつたのが原因だと思いますけどね?)

緒川はそう思いながら口には出さずに案内をして専用エレベーターに乗りこむ。

あ、何かつかまつていたほうがいいですよ？」

すると響は信一の手をつかんでいた。

男性陣も女性陣につかまつていたがあまりの力の強さに痛がつて  
いるため声が出なかつた。

「い、いたいよ零斗」

「なにをするんだよ或歩!!」

やかましいわ!!普段乗っているのになんで今田だけ手をつかむ!!」

と喧嘩をしている中緒川は先にどうぞといい二人は中へ入ると

「「「（“。 ダ。） ポカーン」」」

四人は開いた口が閉じれなくなり奏と翼は苦笑いをしている。

さて改めて俺の名前は風鳴弦十郎。この一課で司令官をしてい  
る。」

「えっと俺の名前は大神 信一です」

「私の名前は立花響です！」

自己紹介をしてから響の荷物などが回収されておりなぜ彼女がガングニールを纏えるのか調べることになり彼女はレントゲン写真を撮られることになり移動をする。

信一は彼女を心配をしていると零斗と或歩が近づいてきた。

「あなたたちは？」

「俺の名前は十六夜 零斗」

「不破 或歩だ。さて君に聞きたいことがある」

「なんでしょうか？」

「神エボルト」

「!!」

「やつぱりな・・・・・・」

「それではあなたたちも・・・・・・」

「そういうことだ」

お互に転生者つてことを明かしてから彼らは今日は解散となる。  
さてその一方で莊吉たちは？

「お父さん!! 日本ですよ日本!!」

やつと日本に到着をしていた。彼は白い帽子をかぶりながら辺りを見ていた。

「師匠これからどうするのですか？」

「そうだな・・・・・・」

彼らは日本に到着後辺りを見ながら歩いている。夜のためリボルギヤリーで寝ようとしたが・・・・・・弾丸が放たれたので彼らは動きを止める。

「まずはお客様に挨拶をするとしようか？」

現れたのはバーズがバースバスターを構えてクリスと桜花に放ったのだ。彼はスカルに変身をしてスカルマグナムで相殺をしてクリスはダブルドライバーを装着をする。

「いくよ!!」

「うん!!」

「ルナ!!」

「トリガー!!」

「変身!!」

「ルナ!! トリガー!!」

ルナトリガーに変身をしてトリガーマグナムから光弾が放たれて誘導弾がバースに放たれる。

彼はセルメダルをバースドライバーにセットをしてクロウズを起動させる。

【クレーンアーム！】

クレーンアームを装着をしてダブルが放った弾丸をふさいだ。スカルは接近をして蹴りを入れてバースに攻撃をするが右手のクレーンアームのアームがスカルのボディに当たり吹き飛ばされる。

「が!!」

「師匠!!」

『お姉ちゃん!!』

「うわ!!」

接近をしてショベルアームを発動させたバースの攻撃を受けてダブルは吹き飛ばされる。スカルは起き上がりスカルマグナムにメリリをセットをする。

【スカル マキシマムドライブ！】

「は!!」

スカルパニッシャーを放ちバースに命中をする。バースはドリルアームを発動させて攻撃をしてきたがスカルはすぐにメモリをマキシマムスロットにセットをする。

【ジュエルマキシマムドライブ！】

手を前にかざすとダイヤモンドが現れてドリルアームをふさいだ。【サイクロン！トリガー！トリガーマキシマムドライブ！】

【『トリガーストームボム!!』

バースの足元に弾丸を放ち巨大な竜巻を発生させて上空へ吹き飛ばしたのをみてスカルはスカルメモリをマキシマムスロットにセットをする。

「これで終わらせる」

【スカルマキシマムドライブ！】

「はあああああああああああああああああああああああああああああ!!」

上空へと飛びライダークリクがバースに命中をして着地をする。バースは変身が解除されて地面に倒れる。

「くそ・・・・クリスとイチャイチャが・・・・」

彼は無言で札を投げつけて転送される。彼らは変身を解除をしてリボルギヤリーへと戻る。

「さて、これからのこと話を話すとしようか?」

「これからのこと?」

次の日となり放課後に彼らは再び二課の基地へとやつてきて響がなぜガングニールを纏えるのかが判明をした。

「原因はこれね?これはおそらく奏ちゃんのギアの破片が刺さったからガングニールを纏うことができるようになつたのね……」  
そして響は弦十郎から協力をしてくれないかといわれてそれは信一も同じである。そして二人は同じ答えを出して二課のメンバーとなるが響はまずは訓練が必要だといわれて信一と共に弦十郎が鍛えることになる。

「つてことは親父にも手伝つてもらうかな?」

「え?!おじいさまですか?!」

「あー響……まあドンマイだな?」

「え?」

二人は何でドンマイだといわれたのかなと思い考えていると扉を開いておじいちゃんのような人が入ってきた。

「呼んだか弦十郎」

「来たか親父。紹介しよう……この二課の総司令と言つた方がいいだろうな……」

「風鳴 計堂じゃ!!よろしくな響君に信一君

「えつとよろしくお願ひします!!」

「ふむ元気な子どもたちだな弦十郎よ」

「ああその通りだが戦えない俺たちは何も言えないさ……」

「では始めるとしようかの?」

「え?」

二人は計堂に連れられて部屋を後にする。

「なーむ」

「……(親父が見つけたプラン、竜姫咆哮メツクヴァラヌス……)

シンフォギア装者と同等にノイズと戦うことができる。そして現在その候補生として三名か……」

弦十郎はもらつたプランの候補者名を見ている。

【安藤 創世】【板場 弓美】【寺島 詩織】と書かれている。

(いずれにしても考え方がないといけないな……親父はリディアン学園ではただの陽気なじじいという……)

弦十郎は苦笑いをしているときやあああああときやあああという声が聞こえてきた。

「始まつたみたいだな？」

「おじいさまはあれでも手加減をしているのだが……」

「最初に戦つたときはウイングランサーを受け取られたんだよな……」

「俺なんて滅で左手のアームを伸ばして攻撃をしたのにそれをキヤツチをして投げつけられたからな……」

「ああ怖かった……」

零斗と或歩は震えながら戦つたときのことを思いだしたようで奏たちは苦笑いをして彼死を見るのであった。

## 鬼と覚醒の竜姫

響と信一が仲間になつて一週間が立つた。二課の基地。

「／＼（＾＾）／オワタ」

二人は真っ白に燃えつきており訃堂もふーむと両手を組んで考えている。

「やはりージープの特訓はまずかつたかの？それとも滝を切れといわせて滝に入らせたのが原因か？」

「いや全部でしょ!!」

零斗と或歩はツッコミを入れる。弦十郎たちも苦笑いをして燃えつきている二人に同情をして真っ白に燃えつきる二人は何も答えられない状態にまで精神や体を鍛えられたらしい・・・・訃堂曰く現場に出ても大丈夫なよう一週間でできる限りのしたと・・・・だがその結果が真っ白に燃えつきるという症状になつてしているので翼と奏もさすが訃堂のおじいちゃんなど・・・・  
さて場所が変わり板場、安藤、寺島の三人は休日なつたので街に買い物をするためにやつてきていた。

「全く色々と買つたね？」

「いいじやん、せつかくの休みだし!!」

「でも立花さんと小日向さんが来れないのは残念ですね」

「そうだねー」

三人は歩いていると謎の異様の存在ことノイズが突然として現れる。

「あ、あれって!?」

「どうしてノイズが!!」

「逃げるよ!!」

三人は一目散にノイズから逃れるために走る。だがノイズ達はまるで彼女達を狙っているかのように追いかけてくる。

「どうして私たちに!!」

「わからないよ!!でも逃げないと!!」

一方で二課の方でもノイズの反応が出ていたので出撃をしようど

する。

「あ、あれは!!」

響は追いかけられているのが自身の友達だったので彼女自身も出撃をしたいとお願いをして信一も同じように頭を下げる。

「よし出撃だ!!」

「「「「はい!!」」」

六人は出撃をするために現場へと向かう。一方で三人はノイズによつて追い込まれていた。走ってきたが壁際まで追い込まれていたのだ。

「あ、あたしたちこんなところで死ぬの?」

「いや・・・・私はまだやることがたくさんあるのに!!」

「私だつて!!」

ノイズは彼女達を襲おうと攻撃をしようとしたときタカやオオカミ、ゴリラなどがノイズに攻撃をしている。

「「「え?」」」

彼女達は目を開けるとノイズ達がタカなどの機械的なもので攻撃を受けて消滅をしているのを見て驚いていると一人の男性が歩いてきた。

「大丈夫かいお嬢ちゃんたち。お疲れデイスクリアーナーたち」

攻撃をしていた動物たちは丸いディスクのように彼の手に戻つていく。だがノイズは次々に現れている。

「あらやつぱりこれじゃあだめか・・・・」

「つてどうするのよ!!」

「なーに心配するなつて」

彼は腰につけている音叉 音角を出してちーーーんとならして自

身の頭の近くに近づけると彼の体を紫の炎に包まれていく。

「ええええええええええ!!」

「ちょ!!」

「大丈夫ですか!!」

「はああああ・・・・・・は!!」

紫の炎を払うと彼の姿が変わり仮面ライダー響鬼に変身をしてい

る。

「さて一丁やりますか!!」

彼は腰に装着されている音激棒 烈火を取りクルクルとまわしてから走りノイズ達に攻撃をする。彼の放つ攻撃はノイズ達にヒットをして次々に消滅させていく。

7  
8

「あちやー数が多いね……音激打を使ってもこの数は……」  
三人を守りながら戦うのはいいが響鬼でも厳しいなと思つていて  
と彼女達はどうしたらいいのかと思つていると……

「え？」

## 【竜の力を】

音の元

「昌えら？」

【メツクヴァラヌステイクオフ】

「ねえ、人とも聞くんだ？」

卷之三

「どうゆる？」

「やつてみようよ!」

卷之三

三、立あゆびり豊鬼は見てゐる。

「君達一体何をするんだい？」

ええ聞こえてきたの!!

ここから何かの声か

「私たちにも戦う力があるのなら!!」

「「メツクヴァラヌステイクオフ!!」」

彼女達が持つている緑色の腕輪「ドラゴンブレス」が起動をして三人に装着されて詩織は黄色の外装が、創世は青色の外装が、弓美は赤色の外装が装着されていきそれが武器を構えてメツクヴァラヌスが起動をする。

基地ではメツクヴァラヌスが起動をしたのが確認される。

「司令!!メツクヴァラヌスが起動!!」

「なんだと!!」

「ふーむまさか彼女達自ら・・・・・・」

訃堂はメツクヴァラヌスが起動をしたので驚いている中現場では三人は自分たちに装着された姿を見て驚いている。

「これって・・・・・・」

「力がみなぎつてくる!!」

「これならいけますわ!!」

「わお・・・・・・ならおじさんも頑張りますかな!!」

四人は武器を構えていると上空から剣のエネルギーがたくさん発生をしてノイズたちを攻撃をして擊破して翼たちは着地をする。

「翼先輩!!」

「ええええええええええええええええ!!」

「つて皆!!」

「ビツキー!!」

「何よその格好!!」

「いやいや私からしたら三人の格好は何!!」

「話は後だ。あんたも後で話を聞かせてもらうぞ?」

「わかっているさ少年」

ナイトの言葉に響鬼はシユとしてから烈火弾を放ちバルカンはショットライザーを外して弾丸を放ち攻撃をする。詩織は発生をした槍で突き刺してノイズに攻撃をする。後ろからノイズが襲い掛かろうとした。

「させない!!」

弓美はエネルギーの矢を引いてノイズに攻撃をする。

「ありがとうございます!!」

「気にならない!!」

—おりやああああああああああ!!

創世はレイピアでノイズを次々に突き刺してノイズを撃破してナイトと翼も彼女に続いて攻撃をして撃破する。

のギルスクロウで切り裂いていきノイズを消滅させていき響は音激  
鼓を外して一体のノイズに張りつける。

## 一音激打 火炎連打の方!!

こんでいきそれがノイズ達の動きを止めていきそして最後は思いつ  
きり叩く。

「ああああああああああああああ！」

叩かれたノイズたちは爆散をして彼はくるつと回転させて烈火をしまう。辺りを見てノイズ達が撃破されたのを見てナイトたちも武器を収める。

「ビツキーその格好は何!?」

「あ、まあこれで聞こえはあそこまでいいやつ、いいやつ、ほんの、二ノ山言え

あれまあそれは関してはあたしたちには一いつてきてほしいとしか言ひ

奏は苦笑いをして響鬼も変身が解除をして彼は見ている。

「さてあなたは一体誰なんだい?」

「俺？俺の名前は・・・・・細川ヒビキさ」

(あ)この人も転生者たな………))

「えつとヒビキさんでしたつけ……ありがとうございます……」

「何君達が無事で何よりだよ」

驚いている。

「『？』」

そのあとエレベーターに乗りこみ勢いよく落ちたので。

一一六

「私も最初はあんなどつたよね？」

うんうん

「よう二三持異後害村策足助二裸々!!

「〔〔〔ゝゞ・〕〕」

ほほほほ

「さて機動二課へようこそ三人とも。どうやらわしが上げたメツクヴァラヌスが起動をしたみたいだな」

「うむノノフオギアノステムニ同等ニ對シ

じゃ・・・・・ その力は竜の力を解放させることができるシステム  
なのじやが・・・・・ まさかお主たちは声が聞こえたのか?」

「ルーラ」

ふーむ……………いすれにしても調べる必要があるが……………」

卷之三

「私たちも戦えるのですか!?」

そういや、そのジアテムはシンノアギアジアテムとは別の要領で作

「ヒビキ君つてなんか変な気分だな・・・」

「まあ響は一人もいますからね・・・・・・」

こうして二課は新たな仲間を四人加わりノイズに 対しての戦力を増すべし。

増やしていくのであつた。

# 現れたネフシユタンの鎧を着た人物と謎のライダーたち

響 side

はいどうも、立花 韶です。まさか寺島さんたちも二課に参加することになるとは思つてもいなかつたのですが・・・・最近未来を騙している感じなので本当に申し訳ないですはい・・・・板場さんたちもやはり未来を騙している感じなので苦笑いをして降ります。

それでも二課の人達は優しく、零斗さんや或歩さん達は私達に勉強などを教えてくれたり信一は違う学校だけど終わつたら私たちのところへ合流をして一緒にノイズを戦つたりするなど詠堂さんのあの特訓に比べたら・・・・今は弦十郎師匠に独学を学びながら奏さんや翼さん達に遅れないように頑張っています!!

「立花、あまり力を入れない方がいいわよ?」

「そうだな。」

「はあ・・・・・・」

翼さん達のアドバイスを聞きながら現在私たちはノイズが現れると聞いて全員で出撃をしております。

「はああああああああああああ!!」

私はアームドギアが発動ができぬ状態ですがとりあえず殴つてノイズを倒すことにしました。

「うおおおおおおおおおおお!!」

信一は背中から鞭が放つて攻撃をしているけどあれってどこまで伸びるのかな?

「とりあえずもう一体だしておくか」

【アドベント】

地面から何か機械的なものが出でてきたのですが?

「えっと零斗さんそれは?」

「俺のもう一体マグナギガ」

「お前・・・マグナギガ持っていたのかよ・・・・・・」

マグナギガってモンスター？でいいのかな右手をあげて砲撃を放つた。つて放つ！？

「「「ええええええええええええええええええええ！」」

「お、やるじゃないか少年」

「いや少年つて・・・・・・」

「俺からしたら少年さ・・・・・・」

ヒビキさんつて私も響だから違和感しかないんですけど!? いつた  
い何歳なんだろう？

「おつとあまり効かなほうがいいぞ少女よ」

「ふあ!?」

「い、いつのまに・・・・・・」

「お前ら!! 動いてノイズを倒せええええええええええええ!!」

「「「はいいいいいいいいいいいい!!」「」」

やっぱ!! 奏さんが怒っているじやん!! 私はノイズにとりあえず殴つて殴つて殴りまくつて擊破するけどどうしてノイズがこんなに集まっているんだろう？

「ふーむ誰かがノイズを操つているのか？」

「わからねえな或歩はどう思う？」

「翼が言つた通りじやないか？まるで俺達をおびき寄せるかのよう  
に・・・・・それはどうかはわからないがお客様みたいだな？」

或歩さんがアタッショカリバーを構えているのを見て私たちは構  
えていると地面から鞭が現れて私めがけてくる!?

「立花さん!!」

「させるかああああああああああ!!」

「信一!!」

信一がかばつてくれたけど彼は膝をついてしまう。いつたい誰が  
!?

「失敗ですか・・・・・・」

「そのようだね。」

「誰だ!!」

そこにいたのは白い鎧を着た人物となんだろう？赤い鎧を着た人物？でいいかな？

「俺の名前は武神鎧武…………そして隣にいるのは貴様達は知っているのだろう？」

「ああそのとおりだ」

「二年前盗まれた完全聖遺物「ネフシユタンの鎧」なるほどてめえらが盗んでいたんだな!!」

奏さんは槍を構えているのを見て私たちは構えるけど相手は人ですかね？隣の鎧を着た人は知りませんけど…………

「そこの一人に用はありません…………私たちの目的はそこの立花響ですから」

「わ、私!？」

「狙いは響ちゃんか…………」

「貴様たちには俺が用意をした怪人たちと遊んでいてもらおう!!」

鎧武者さんが出してきたのは怪人つて言つていましたけど私たち大丈夫かな!?

響 side 終了

武神鎧武が出した再生怪人たちがネフシユタンの鎧を着た女の子と共に襲撃をしてきた。敵の狙いは響だとわかりメツクヴァラヌスの三人は響を守るためにガードをする。

「であ!!」

再生怪人はナイトたちが引きうけて奏と翼はネフシユタンの鎧を来た人物と戦つていた。

「答えてもらおう!!その鎧を誰が盗んだのか!!」

「教えるわけありません…………」

「なら教えてもらおうだけだ!!」

奏は後ろから槍を振るうが彼女は回転をして鞭が二人に当たり吹き飛ばす。

「翼!!」

「奏!!」

「貴様たちよそ見をしている余裕があるのか?」

武神鎧武はブラッド大橙丸と無双セイバーを振るい二人のボディを切りつける。

「ぐ!!」

「あ!!」

「甘いわ!!」

烈火弾を放つが武神鎧武はそれをガードをして響鬼もこれは厄介だなど思いつつ烈火剣で対抗をする。

「多すぎるわよ!!」

「先輩たちが押されているね・・・・・・」

「私たちもかなりですけど・・・・・・」

響達は戦いながらノイズの数が減つていなることに気づいていた。エクシードギルスはネフシュタンの鎧を着た人物を見て右手に何かを持つてているのに気づいた。

「まさかあれでノイズを操っているのじゃないか?」

「え!?

「ほーうさすが仮面ライダーってところですね。いかにもこのソロモンの杖を使いノイズを出してしているのですよ。さあノイズ達彼女達を翻弄をしなさい!!」

彼女の周りからノイズが現れて翼たちも驚いている。

「どうする翼?」

「正直言えば苦労をするな・・・・・・」

「同意見だ・・・・・・だが絶唱を使えばおそらくあたしたちは戦線離脱だらうな・・・・・・」

「体のことを考えたらそうだろう・・・・・・だが絶唱を使わないとネフシュタンの鎧にダメージを与えることができない。」

「よしやるか!!」

二人は絶唱を使おうと決意を固めて構えていると突然としてミサ

イルがネフシュタンの鎧を着た人物に当たり吹き飛ばされる。

「何?」

すると武神鎧武の目の前に仮面ライダーが現れる。

「!!」

「遅い」

「ヒートマキシマムドライブ！」

燃え盛る拳が武神鎧武に当たり吹き飛ばす。響達の方はいつたい何があつたのだろうと見ていると白い戦士の隣に一人の女性が降りたつ。

一方で基地の方でも特定をしていた。

「こ、これは!! イチイバルです!!」

「イチイバルだと!?」

「ふーむイチイバルじやと・・・・・・」

訃堂は両手を組みいつたい誰がイチイバルをと思い画面を見ている。

さて現場の方では突然として現れた白い戦士と胸が大きい女性が立っている。彼女は赤い装甲のシンフォギアを纏い隣に立つ。

「なんだ貴様は・・・・・・」

「仮面ライダーエターナル・・・・・・」

「そしてあたしは師匠の弟子!! 雪音 クリストだ!!」

「さあお前たちの罪を数えろ!!」

翼と奏の隣に緑色の戦士が現れる。

「大丈夫ですか？ 今傷を治しますね？」

「ヒールマキシマムドライブ」

マキシマムドライブが発動をして二人の傷が治っていく。

「傷が・・・・・・」

「ヒールメモリの力です。私は仮面ライダーサイクロン・・・・・・」

現れた仮面ライダーサイクロンに傷を治してもらつた二人は響達を助けるために向かいエターナルとクリスはネフシュタンの鎧を着た人物を見ている。

「何者かは知りませんが邪魔をするならあなたたちを倒します!!」

ネフシュタンの鎧を着た女の子は鞭を振るい攻撃をしてきたがエターナルはメモリを出してエターナルエッジに装填する。

「ルナ マキシマムドライブ！」

エターナルエッジの刀身が鞭のようになりネフシュタンの鎧の鞭

をはじかせる。

「な!!」

「はああああああああああああああああああああああああ!!」

クリスは接近をして蹴りを入れてからガトリングを放ちネフシュタンの鎧の着た人物にダメージを与える。

「く!!」

「ちい!!」

「おつと行かせないよ?」

「!!」

響鬼は烈火剣で武神鎧武のボディを切りつけてナイトとゼロワンはダークバイザーとアタッショウカリバーで攻撃をして武神鎧武を吹き飛ばす。

「仕方がない・・・・・・」

彼は腰部のカツティングブレードを倒して必殺技を放つ。

【プラットオレンジスカツシユ!】

「ふん!!」

地面に放ち煙幕が発生をした。全員が探すがその間に二人は逃げてしまいノイズも消滅をしていく。

ナイトたちは変身を解除をしている中エターナルたちの方を見ている。

「お前達が特異災害機動二課か。」

「どうして私たちのことを?」

「なーに俺達は親友に呼ばれたから日本へ来たのさ。」

彼は腰のロストドライバーを外して変身が解除されると白い帽子をかぶりサイクロンも変身を解除、クリスはギアを解除をする。

三人を二課の基地の方へと連れていき白いハットをかぶった人物は周りを見ながらエレベーターに乗り地下室の方へと行き扉が開く。  
〔莊吉・・・・・〕

「久しぶりだな弦十郎、お前の依頼になかなか答えられなくてすまなかつたな」

「気にしていないさ・・・・そしてようこそきて諸君紹介をしよう。」

今回からここに参加することになる。」

「左 荘吉だ。探偵をしている・・・・・・」

「私は花咲 桜花といいます」

「私は雪音 クリス。イチイバルの装者及び仮面ライダーアームズに変身をする。」

挨拶をしてから莊吉たちは基地近くを買ってそこで過ごすことになり何かあつたら連絡をするようにと言い今日は解散となる。

莊吉 side

今俺達は弦十郎が用意をしてくれた場所に到着をして中々の広さを借りることができて地下のリボルギヤリーは鳴海探偵事務所のように地下室に待機をしており呼んだら来るようについて感じにしている。

「クリスはまあ学校に通つてもらうことになるがな?」

「え!?

「いや当たり前だろ?弦十郎に頼んでリデイアン音楽学園の二年生に転入をしてもらうからな?」

「まじですか・・・・じゃあ桜花は?」

「もちろん桜花も転入をしてもらうよ。響ちゃんたちと同じ年だからな」

そういうつて俺は準備をして寝ることにした。

莊吉 side 終了

## 「ここからは俺のステージだ!!

莊吉 side

次の日になり俺は朝食を作りクリスと桜花が起きてきた。二人ともなんだか緊張をしている感じなので俺はふふと笑ってしまう。

「どうした二人とも?」

「いや・・・・私学校なんて始めていくから・・・・」

「私もです。」

「最初だからなお前らのことだから友達とかすぐにできるはずさ・・・・ほらとりあえず朝ごはんを食べて学校に行つて来い」

「はーーい」

二人はリディアン学園の制服に着替えて莊吉は玄関で見送ることにした。彼は一応二人のチェックをしているが念のために確認をする。

「それじゃあ一人とも忘れ物などないな?何かあつたらまああの学校には響達もいるからな・・・・桜花は困らんかもしれないがクリスは・・・・」

「大丈夫だよ師匠、師匠に教わった探偵技術が役に立つよ」

「交渉の仕方とか?それとも相手にばれないような忍び足的な?」

「それそれ」

「あんまり学校で使うことないような・・・・とりあえず行つて来い!!」

「いってきまーす!!」

「行つてらっしゃい」

二人がいなくなつた後莊吉は両手を伸ばして地下ドックへと向かいハートギヤリーに乗りこんで街を探索することにした。彼はこの日本へ来たのは久しぶりという感じなのでバイクにまたがり今のうちにどこに病院やスーパーがあるのか確認をする。

「ふむ弦十郎が用意をしてくれただけあつて近くに病院やスーパーなどがたくさんあるな・・・・これなら買い物など困ることはな・・・」

彼はバイクに搭乗をしながらバットショットで写真を取り時間なども気にしながら移動をして丘に到着をするが彼はロストドライバーを装着をする。

「……………」

すると周りから現れたのは黒影トルーパーだった。彼はすぐにエターナルメモリを押す。

【エターナル】

【変身】

【エターナル】

仮面ライダーエターナルに変身をして黒影トルーパー達は影松を構えて攻撃をしてきた。エターナルは素早くかわしてエターナルエッジを使い黒影トルーパーたちに攻撃をしていく。

「数が多いな…………」

彼は攻撃をしているがあまりの多さに苦戦をしていた。だが他の彼等も学校などもあり忙しいだろうなと思い彼は連絡をしていないでいると

【アドベント】

『ぐおおおおおおおおおおおおおお!!』

【ドラグレッター?】

「水臭いですよ莊吉さん」

「君達は…………零斗君とヒビキ君に或歩君」

「そういうこつた。なーるほど黒影トルーパーたちか」

響鬼は音激棒烈火を構えて或歩は迅に変身をしてアタッシユアローを構えている。ナイトは今回は右腰に装着をしているマグナバイザーレイズを抜いてトリガーを引き発砲をする。

黒影トルーパーは響鬼に攻撃をするが彼は烈火で影松をはじかせた後に口部から紫の炎『鬼火』を放ちダメージを与えていき迅は背中の翼を開いて空からアタッシユアローを引っ張り攻撃をする。

エターナルはエターナルロープを脱いでメモリをセットをする。

【コッククローチマキシマムドライブ!】

彼のスピードが速くなり次々に黒影トルーパーたちは倒されて行

き彼は別のメモリを出してマキシマムスロットに装填する。パペティアーメモリである。

「ペペティアーマキシマムドライブ！」

一  
ば！

彼の手から糸が発生をして黒影トルーパー達を操り同士討ちをさせたりする。

二 うね———

「仕方があるまいこうこう仕様だからな……」

「何がおもいこころに仕様がかかる

彼はそういうながらノヘテノア一の力を解説をして別のノモリをスロットにいれる。

「ナスカマキシマムドライア！」  
ナスカブレードを手に持ち背中に翼を開いて上空に飛び空中にいる迅も技をかける。

「ああああああああああああああああ！」

二人は空中からライダー・キックを放

二人は空中からティターニックを放ち黒影トルーハーたちを撃破していき、ナイトの方もカードを装填する。

目の前にマクナギが現れて、鬼も音激棒烈火の先端に炎をためる。

「いくぞ少年」

マグナギ

マグナギがマグナバイザーモードを起動してエンドレスワールドを発動させて残っていた黒影トルーパーたちを撃破して彼らは黒影トルーパーたちを倒したがそれを見ている人物がいた。

「仮面ライダーナイト、響鬼、エターナル…………そして迅の戦闘データはとらせてもらつたよ。まあ黒影トルーパーたちはもつたいいことをしたけどね…………」

彼は笑いながらその場を去り、莊吉たちは黒影トルーパーたちがいなくなつたのを見て確認をする。

「大丈夫ですか？」

「ああ君達がいなかつたら俺はやられていたかもしれないな……」「だがなぜ黒影トルーパーがあんなにも？」

「…………うーむ」

「どうしたのですかヒビキさん？」

「奴らの目的が俺達の戦闘力を調べることだつたらまずいなと思つてな」

「「！」」

「いや俺もまだ確信を得たわけじゃない…………ただ…………あの数なども考えたらな…………」

四人は話をしている中外國では？二人の鎧武者が戦っていた。

「このこのこの！！」

射撃を放つが彼は持つている槍を振り回してガードをする。そして彼は接近をしてそのまま槍で突いてダメージを与える。

「くそくそくそ！！」

「悪いがお前をここで倒させてもらう」

彼は腰についているベルトを捜査をする。

【カモン！バナナスカッシュ！】

槍にエネルギーが纏わって行き彼は突撃をして相手に攻撃をして吹き飛ばす。

「ぐああああああああああああああああ！！」

相手が変身を解除をしたのを見て彼は札を張り天界へと転送させる。そして彼が落としたであろうブドウとキウイのを拾い懐に仕舞う。そして一枚の写真を取り見る。

「今日で日本へ帰るからな未来…………響と信一も元気にしているかな？」

彼の名前は葛葉 戒斗、零斗達と同じ転生者である。

## 完全聖遺物の護衛

黒影トルーパーたちを倒した莊吉たちはそれぞれの家へと戻つていき彼は用意された家へと戻つていくとクリスと桜花がもどつていた。

「あ、師匠おかえりなさい!!」

「お父さんお帰りなさい。あ、そういえば緒川さんから預かつてきましたよ?」

「預かつた?」

「はい」

桜花は預かつた手紙を莊吉に渡して彼は開けて中身を確認をする。彼はじ一つと見てから二人に声をかける。

「さて一人とも今のうちに眠つておけ。今回の依頼が来たみたいだ」

「依頼?」

「今夜一課はある完全聖遺物を護衛することになった。そこで俺達にも協力をしてほしいとな……」

「なるほど…………それで師匠私は?」

「お前はイチイバルを纏い桜花は念のためにリボルギヤリーで待機をしてくれ」

「わかりました。」

「了解だ師匠!!」

そして彼らは時間まで眠ることにして夜中、リデイアン学園前にて全員が集まっているが……

「「「ふああああああああ…………」」

響、詩織、弓美、創世の四人は欠伸をしているのを見て信一とかは苦笑いをしている。

「おいおい響眠つておけと言つたはずだろ?」

「だつて理由もないのに寝たら未来に怪しまれるから…………」

「そういえば未来はそういうところは鋭いからな…………」

「信一はそういうながら全員が弦十郎の話を聞く。」

「今回完全聖遺物「デュランダル」を護衛することになる。その理由

はノイズの発生などを考えて政府が決めたことになる」

「なるほどな、それで俺達に護衛を依頼をしたつてことか……」

「そうだすまない莊吉」

「気にするな」

そういうつて話をしていき戦士たちは車へと乗り莊吉たちの方はリボルギヤリーの方へと移動をする。

二課のメンバーでは翼と零斗はバイクに乗りそれぞれギアやライダーに変身、奏たちは車の中で待機をしている。

「変身!!」

ナイトへと変身をして翼はアメノハバキリを纏い愛用のバイクに乗りデュランダルを運ぶ任務は始まる。

莊吉はリボルギヤリーに乗りながら桜花はレーダーを見ている。

「今のところはノイズ反応はありません。」

「そうか…………クリス外の様子は?」

『今のところはありません。ですが…………』

「ああ何とも言えないな…………デュランダルを狙つて奴らは来る  
と…………」

『師匠!!ノイズが現れました!!しかもかなりの数です!!』

「そうか』

ナイトたちも気づいておりマグナバイザーを構えてトリガーアーを引き弾がノイズ達に当たる。

「ここは俺達に任せて進路変更を!!」

「了解よ!!さあしつかりつかまつていなさい!!」

了子が運転をする車に乗つている信一たちは後ろの方でつかまつてているがあまりのスピードに振り回されていた。

「おいおい』

後ろのリボルギヤリーの方でもそのスピードに驚いているが車は工場の方へと逃げ切るがノイズが現れて莊吉はエターナル、ヒビキさんは響鬼に或歩はゼロワン、信一はエクシードギルスに変身をする。

「いくぞ!!」

クリスはイチイバルを纏いギアをガトリングにしてノイズ達に発

砲をする。エターナルはエターナルエッジを振るいノイズを切つていく。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

エクシードギルスは背中のギルスステインガーを伸ばして次々にノイズたちを貫通させていく。

「数が多い・・・・・・」

「ああそのとおりだ少年」

ゼロワンと響鬼はアタッシュカーリバーと烈火で攻撃をしているが数が減らないので苦戦をしているとネフシュタンの鎧を来た人物と武神鎧武が現れる。

「またあいつらか!!」

「さていでよ怪人たちよ」

武神鎧武が言うと怪人たちも現れて襲い掛かってきた。エターナルたちは怪人たちを集中をするためにメツクヴァラヌスを装着をした彼女達とクリス、響が護衛をするがそこにネフシュタンの鎧を着た女性が接近をした。

「このおおおおおおおおおお!!」

創世はレイピアで攻撃をするが彼女は鞭ではじかせて吹き飛ばした。

「が!!」

「創世!!」

「この!!」

クリスはボウガンにして放つが彼女は鞭でクリスが放ったボウガンをガードをして鞭を振り回して八つ裂き光輪を放つ。

「「ぐ!!」」

一方でエターナルはエターナルロープを脱いでメタルメモリをマキシマムスロットに装填する。

「メタル! マキシマムドライブ!」

メタルシャフトが現れて彼は振り回して攻撃をする。武神鎧武はブラッド大橙丸と無双セイバーで彼が放つたメタルシャフトを受け止める。

「甘いな!!」

「それはどうかな？俺は一人で戦っているわけじゃないんだよね？」  
「何？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

エクシードギルスがエクシードギルスヒールクロウをお見舞いさせて武神鎧武にダメージを与える。

「ぐううう・・・・・・・・」

「!!」

ネフシユタンの鎧を着た人物は武神鎧武がダメージを受けたのを見て驚いていると歌が聞こえて全員がガタという音に気づいた。

「あ、あれは!!」

「デュランダルが起動をしている？」

「あれはもらいます!!」

「そうはさせらかああああああああああああああああああ!!」

「ビックキー!!」

響が飛びあがりデュランダルをキャッチをするが・・・する  
と彼女の体が黒くなつていくのを見て莊吉はまずいと思ひメモリを  
出す。

「ゾーン！マキシマムドライブ！」

するとメモリ達が集まつていきエターナルのマキシマムスロット  
にセットされて行く。そして彼はエターナルメモリを抜いてエターナルエッジにセットをする。

「エターナル！マキシマムドライブ！」

「ぐああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ!!」

「でああああああああああああああああああああああ!!」

エターナルはネバーエンディングヘルを発動させて響が振り下ろしたデュランダルを相殺をするために放つた。

だが強大な力のため彼が放ったネバーエンディングヘルが壊されようとしていた。爆発が起きて全員が吹き飛ばされる。

ナイトと翼は爆発が起こつた場所へと向かい現場に到着をする。

一  
零  
斗  
あれ  
!!

翼に言わせて見るとデュランダルが地面に突き刺さっているのを見た。そして周りには吹き飛ばされたのか瓦礫が崩れてエターナル達が出てきた。

一いへたい伺か

卷之三

小説の歴史

「生きていますよ

「し、死ぬかと思つたわ」

「……」

れる。

「氣絶をしているだけだ」  
「原因はデュランダルか・・・・・」

全員が刺さっているテニテンタルを見て今回の任務は失敗だなど判断をして二課の方に保管されることになる。

疲れました

一  
卷之二

「機密が漏れました」  
「この件は専門的な知識が必要な事

「もしかして響が暴走をしたのは……」

方がいいな・・・・・」

「お父さんですかあのテニスナルを狙っている敵は何か目的なの  
でしょうか？」

• • • • •

莊吉は考え方をしているが敵はフイーネなのかわからない状態で

ある。

「一方で天界では。

「…………これは!!」

戦鬼事エボルトはシンフォギア世界を見て目を見開く。

「なぜダークエグレイズがうみだした…………暗黒結晶があの世界にばらけているんだ…………いやこれは暗黒結晶じやない」

「そうだこれは暗黒結晶じやない」

「お前か…………一兎…………またお前の世界の何かかええ?」

彼はアイアンクローバーを発動させて一兎の頭を握りしめる。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「それで何が原因だ?」

「コイツはファイールドアース特有のエネルギーが秘めているアース結晶…………ファイールドアースしか取れない鉱物で一キロ何万もする代物さ。」

「こりやまたすごい代物だな…」

「だけどここ最近、そのアース結晶がファイールドアースの炭鉱場から盗まれている事件があつてな?スフィア天界の調査チームがファイールドアース全体を調べたところ……どうやらファイールドアースでは1日一回だけ邪悪なエネルギーを感じしているんだ。」

「1日一回!?

「それも今、調査中さ。」

「一キロ何万もする鉱物……アース結晶か……厄介なものがばらけたな

⋮

「お前はこの世界に降りることは出来ないのか?」

「転生者たちを片付けないといけないからな…………そのせいもあって今は彼らに任せているのさ。だが彼らでも立ち向かえないと判断をしたときは俺は介入をするさ。」

戦鬼事エボルトはそういうながら彼らを信じて世界を運命を彼らに定めると…………

## 再会

デュランダル護衛は失敗に終わりデュランダルは二課の基地に保管されることとなる。信一と響は未来と共に買い物をしていた。

「ごめんね信一、わざわざ買い物に付き合つてもらつて」

「気にするな未来（まあ響はまだ未来に話していないみたいだなってなんだ？）」

彼は何かの視線を感じて睨んでいるとネフシユタンの鎧を着た人物が現れた。

「やつと見つけました。さていい加減にしてあなたを連れていかないと怒られるのは私なんでね？悪いですけど・・・・」

彼女は鞭を操り攻撃をしてきた。信一はやむを得まいと変身をしてネフシユタンの鎧を受け止める。

「しん・・・・いち？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

彼はそのまま投げつけるとネフシユタンの鎧を着た人物はちつと舌打ちをして構え直す。

「・・・・ごめん未来」

響は聖歌を歌いガングニールを纏い構える。未来は響と信一が変わったのを見て驚いているが・・・・それよりも隠し事されたことに腹を立てていた。

響自身もそのことが言えなかつたので何も言えない状態のままネフシユタンの鎧を着た人物に立ち向かう。

一方で二課の方ではネフシユタンの鎧が現れたのを見て出動命令を下していた。

「くらいなさい!!」

ネフシユタンの鎧から放たれる攻撃が二人に襲い掛かる。二人は回避をしてエクシードギルスは走り両手のギルスクロウで攻撃をするが回避されて蹴りを受ける。

「ぐ!!」

「信一!!」

響は右手にエネルギーを集めてネフシュタンの鎧を着た人物に攻撃をして吹き飛ばした。彼女もまさかエネルギーをぶつけられるとは思つてもいなかつたので驚いている。

「まさか戦闘力が前より  
ん・・・・・・ページ!!」

彼女はネフシエタンの鎧を解除をすると彼女の体をアーマーが装着されて行き信一と響は驚いている。

な、なにあれ・・・・・」

「ロープアーム!!」

すると彼女の右

「うわ！」  
すると彼女の右手が變れりかぎ爪のようなものが發射されて彼女の体を巻き付ける。

「響!!」

エクシードギルスは向かおうとしたが彼女は左手にスコーピオンを構えてトリガーを引きエクシードギルスのボディにダメージを与える。

「ぐあ！」

「パワーーム!!」

左手がパワーアームへと変わりそのままエクシードギルスを殴り

「……」

「さて、これでどどめを刺してあげましょう」

彼女はノルノロコを構えてリスを口にし力が響か前に立つ。

「響！」

「やらせない!! 信一は絶対に死なせない!!」

その時不思議なことが起こつた!! 韶を守りたいというエクシードギルスの思いがベルトの形状などが変わつていき彼は走つていき姿が変わつていく!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「ぐうううううううううううううう!!」

彼女はエクシードギルスが姿が光つて剛腕を受けてガードをしたが姿が変わつたことに気づいた。

「あ、あの姿は・・・・アギト・・・・」

光が收まり信一の姿が仮面ライダー・アギトに変わつていた。信一自身も驚いており彼女はふふと笑つている。

「面白いわ・・・・フリー・ザ・ショットアーム!!」

彼女は右手が変わりフリー・ザ・ショットアームを放ち二人に攻撃をする。信一はエクシードギルスとは違ひギルスステインガーが使えないため右腰を押してフレイムセイバーが出てくる。

「は!!」

フレイムフォームへと変身をして彼女に切りかかる。フリー・ザ・ショットアームを解除をして右手にデストロイヤーを装着をして受け止める。

そこに響が接近をして彼女のおなかに拳を叩きつける。

「が!!」

吹き飛ばした二人は構えていると

「きやあああああああああああああ!!」

「未来!?」

声がした方を見てノイズが未来を襲い掛かろうとしたが斬撃刃が飛んできてノイズたちを消滅させる。

「大丈夫か未来!!」

「そ、その声つて・・・・戒斗?」

「戒斗!」

「まさか仮面ライダー鎧武まで・・・・」

彼女は驚いているとノイズが現れて驚いている。だが彼女はなるほどねと思いながらケルベロスをノイズたちに放ち撃破する。

「さて信一…………」

「話は後だ」

アギトは左腰を押してストームハルバードが出てきてアギトストームフォームへと変身をして構える。

鎧武へと変身をしている戒斗は無双セイバーと大橙丸を構えて突撃をして二人はノイズ達を次々に切り裂いて攻撃をする。

「フィーネ…………」

「やはり失敗をしたようだな？ 加古」

「…………」

加古と呼ばれた女性は無言で左手を変えてスイングアームを構えていると武神鎧武が現れる。

「…………」

お互いににらみ合っていると武神鎧武は無双セイバーを構えてフィーネに向けて放つた。

「貴様！」

「加古に手を出すなら貴様を殺す。」

彼はそのまま加古と呼ばれた女性のところへと行き構える。そこに弾丸などが飛んできてスカルやナイトたちが到着をする。

「あ、あれ？ どういう感じなんだ？」

「加古」

「ん」

彼女はスコーキオンにサラマンダーを装着をしてグレネードを放つかと思つたが上空へ放つた。

それが光りだして閃光弾で全員が目をつぶる。

「「「ぐ!!」」」

その間にフィーネもいなくなつており彼らは辺りを見て鎧武の姿がいたのと未来がいたのも見てさらに創世たちも苦笑いをしている。

「…………四人とも隠していたんだ…………私に内緒で」

「えつと小日向さんその…………」

「隠していたわけじゃないのよ…………その色々とあたしたちにも

あるのよ」

「そうそう」

「………………」

紘太は変身を解除したので全員がギアなどを解除をする。莊吉は白いハットをかぶりこれはひと悶着あるなどと思い黙つてみていることにした。

「師匠…………」

「これは彼女たちの問題だからな…………俺達が出る必要がない…………」

「そうですね…………」

（しかし彼女はいつたい…………まさか彼らも転生者なのか？）

莊吉はそう考えながら見ている。一方で撤退をした武神鎧武は変身を解除をした。

「大丈夫か加古？」

「ありがとう麗華」

彼女の名前は相田 麗華、武神鎧武に変身をする女性で相方である  
氷川 加古と共に転生をした人物であり、氷川 加古はG3-Xとラ  
イダーマンの力を混ぜたシンフォギア形態になつている。

二人は考えていると魔法陣が現れる。

「よう二人とも」

「了さん!？」

「どうしてここが？つてサンジエルマンさんまで」

「お前達を迎えて来たと言つた方がいいだろ？」

「そういうことだ。それでフイーネはやはり？」

「はいその通りです」

「ふーむ…………」

「了どうする？」

「今俺達は動くわけにはいかない。プレラーティ、キヤロルと連絡は

？」

「できているワケダ」

「そういえばキヤロルは切れかかっている？」

「切れかかっているわよ——勇介が旅をしてるせいで————」

「あ——————」

了は勇助という人物のことを知つておりキヤロルと共に旅をしているがその勇介は勝手に旅をするのでキヤロルのイライラが溜まつてゐるのである。

さてその勇助は？

「やつぱりいいね————」

彼の名前は五代 勇助、彼は転生者であり冒険者であるが、トラップで罠に引っかかりタライが落ちてきてそのまま石にぐしやつとつぶされたので、神エボルトはあまりの彼が可哀想となり転生をさせることにしたのだ。仮面ライダークウガの力を託して彼は転生をしてキヤロルとは恋人関係である。

それで現在彼は日本にいるが・・・・まさか了達も彼が日本にいるとは思つてもいないのであつた。

「さーて次の場所に・・・・と思つたけどお客様みたいだね？」

彼は振り返ると二人の男性がたつていた。

「転生者だな？」

「どいつたら？」

「お前をぶつ潰す!!」

「やれやれ・・・・・・」

彼らは変身をして仮面ライダーガイ、仮面ライダーシザースに変身をして勇助に襲い掛かる。

勇助は腰に手をかざすとアーフルが現れて構える。

「変身!!」

彼の姿が変わり赤いボディの戦士仮面ライダーカウガに変身する。ガイとシザースはストライクベントを発動させて攻撃をしてきた。

「は!!」

彼は回避をして鍊金術を使い剣を作りだす。

「超変身!!」

紫のボディタイタンフォームへと変身をして鍊金術で作った剣が

タイタンソードへと変わりシザースとガイに攻撃をする。

く。二人のボディをタイタンソードで切りつけてダメージを与えてい

一  
おのれ

彼は剣を振り下ろそうとしたが突然として攻撃を受けたので彼は姿が見えていないのでそうだと思いアーフルのベルトの色が緑になる。

一超變臭！」

婆が緑色の「アボリム」ハカラブ「アボリム」へと変れり外イタシソーリト  
ペゾチハボワズソハニミツノリ皮は堅ニ角ソニニツ用主ニテ架ソニニ。

ガサスボウガンを引く。

一九二〇年

る。

「ぐあ！」

仮面ライダーベルデが姿が現れて彼は一気に蹴りをつけるべく青い姿ドラゴンフォームへと変身をしてドラゴンロツドを突きたててベルデに命中をして変身が解除される。

「な!」

「そのまま続いて!!」

マイティファームへと戻り二人にマイティキックを叩きつけると  
二人にクウガの紋章が現れて爆発をする。

二十九

卷之三

卷之三

彼はそのまま札を張り天界へ転送される。一方で天界

神エボルトはマントを纏ひその世界を見

神エホルトはマントを纏いその世界を見ているアーブ結晶かその世界に流れているのに・・・・ならあの世界へ流したのはいつ

たい誰なんだ」と?

「…………いつたい誰があの世界にアース結晶を流したのかそれを

調べないと……む?」

光弾が飛んできて彼はエクスカリバーではじかせる。

「誰だ?」

「神エボルト抹殺抹殺」

「ヒューマギア・・・・・・変身」

「海賊海賊!ヤベーイ!パイレーツ!」

マギアに変身をした敵が仮面ライダービルドGODに襲い掛かるが彼は冷静に海賊サーベルで襲い掛けってきたマギアたちを切りつけてダメージを与えて肩部の砲塔から砲撃をしてマギアたちを撃破する。

彼はなぜこの天界にマギアが現れたのだろうかと考えるがとりあえず襲い掛かるマギアたちにレバーをまわす。

【READY GO!! 海賊海賊フイニッショ!!】

「はああああああああああああ!!」

飛びあがりライダークリックをお見舞いさせてマギアたちは爆発をする。

「レグリア!!」

「ミナコ・・・・・・」

「無事みたいね?」

「ああ・・・・・・ いつたいなんだ?」

「わからないわ・・・・・・ アース結晶が原因かわからないけど突然としてマギアが現れてなんとか撃破したけど・・・・・・」

「ふむ・・・・・・」

エボルトは考えていると自身が前に住んでいた世界に敵が現れたみたいで彼はミナコを見る。

「ミナコ悪いがこの世界を任せる。前世の世界へと飛び相手をしてくる」

「わかつたわ気を付けて」

エボルトは前世に現れた敵を倒す為に向かう。

## ファイーネ

莊吉 s.i.d.e

俺とクリス、桜花は家へと戻りファイーネが何をするのか考えている。今回の奴の目的はネフシユタンの鎧を装着をして彼女達に攻撃をしてきたこと……いずれにしてもファイーネが動きだした以上俺達は警戒をしないといけないな……俺は三つのメモリを出しているがブランク状態のメモリである。

「師匠どうしたのですか？あれ？ブランクのメモリ？」

「まだできていないメモリだ……まあ今はファイーネの奴が何が目的なのか考えないといけないな……」

「そうですねお父さん……」

三人で話をしているとピンポーンと音が鳴りクリスが見て来ますといい彼女は扉の方へといき俺達は中で待っているとクリスが連れてきたのは未来ちゃんだ。

雨が降っているのか彼女は濡れていたのでクリスにお風呂に入らせるように指示を出してから俺は桜花に話しかける。

「どう思う？」

「おそらく響ちゃんと喧嘩をしたのでしよう。お父さんおそらく未来ちゃんは自分に話してくれなかつた響ちゃんを許せないかと思ったのでしよう。それで家出を……」

「なるほどな……」

俺は桜花に暖かいものを用意をさせるように指示をしてから白いハットをかぶりお風呂から上がってきた未来ちゃんを座らせる。

「はいとりあえず暖かいものだ」

「ありがとうございます……」

「さて未来ちゃんがどうしてここにきたのかは大体わかつていてる。響ちゃんと喧嘩をしたのだろう？」

「はい……」

「まあ私たちも人のことは言えないけど……でも喧嘩したつてあなたたちは親友でしょ？」

「そうです……私……響が戦っているのに何も……」

「そんなことはないと思うよ？」

「クリス先輩……」

「あなたは戦えなくても響の帰る場所を守ればいいのよ……」

「響が帰れる場所……」

「そそ、私で言えばこの家が私の帰る場所でもある。なら響が帰る場所は？」

「…………」

「そういうこと……あなたがいる場所はあの子が帰る場所でもある。そこを守るのは戦うだけじゃないわ」

「クリス先輩……」

クリスがそんなこと言うとはな……本当に成長をしたな……ん？俺は考え事をしているとノイズの警報が鳴り俺達は立ちあがり現場の方へと行く。

「桜花、今回は俺たちで行くぞ？」

「はい！お父さん！」

俺はダブルドライバーを装着をしてジヨーカーメモリを構える。

【サイクロン！】

【ジヨーカー！】

【変身！】

【サイクロン！ジヨーカー！】

俺の姿が変わり仮面ライダーダブルへと変わり、クリスはロストドライバーを装着をしてアームズメモリを押す。

【アームズ！】

【へん……しん!!】

【アームズ！】

クリスはアームズへと変身をして俺達はノイズに攻撃をしていく。

「おら！」

風の蹴りをお見舞いさせて俺は攻撃をしようとしたが桜花側のサイドがメモリを持っている。

『お父さんここはこれで行こ？』

【ルナ!】

サイクロンメモリを変えてルナメモリへと変える。

【ルナ! ジョーカー!】

「おら!!」

伸びる手や足で攻撃をしていきアームズの方は右手の装甲をガトリングへと変えてノイズ達を倒していくと何かがこちらにやつてきた。

「よう」

「ヒビキ君か」

「あんたはダブルにもなれるみたいだな?」

「まあ普段はエターナルとかになるからね?」

『まあそうですね?お父さんここは?』

「ああわかつてているさ」

「メタル!」

「メモリを変えるぞ!!」

「ルナ! メタル!」

ルナメタルへと変えて伸びるメタルシャフトで次々にノイズ達を攻撃をしていく。

「おりやああああああああああああああああああああああ!!」

『響ちやんですね?』

「ああ」

「これで決める!!」

【アームズ! マキシマムドライブ!】

【アームズキヤノン!!】

「さてこちらもメモリブレイクじゃないが、必殺技といこうか?」

『はい!!』

俺はメタルメモリを外してメタルシャフトにセットをする。

【メタルマキシマムドライブ!】

【メタルリュージョン!!】

メタルシャフトを振り回してリング状を発生させてノイズ達に投げつけて撃破する。

「音激打爆裂強打の型！」

「おりやああああああああああああああああああああああああああ！」

あつちの方でも必殺技を決めてノイズ達を撃破した。響ちゃんは

こちらの方を見てから近づいてきた。

一  
あ  
の  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「だいたいは未来ちゃんから聞いている。まあ喧嘩をしても君達の仲が簡単に壊れるとは思わないよ」

「そこでされ」

「ありかと（）さん」があります。

俺は変身を解除をしてクリスの方も変身を解除をする。さて後は本人たちに任せるとしようか？まあ幸いうちの近くで発生をしたからな・・・・・しかしいつたい・・・・・

一方で一課の研究室

「ふつふつふこのアース結晶…………なんて素晴らしい力だ。これ

「何者だ？」

『櫻井了子・いいやフイリネよ貴様にこれを渡そう』

『なんだこれは？』

「貴様は!!」

『この世界を壊すものとだけ言っておく』

皮女はアーリス告語を見なが

彼女はアーリス結晶を見ながらふふふと笑いながら設言圖を見て、そこには何かの砲塔みたいなのがかかれている。

名前は【カ・テインギル】と。。。

場所が変わり了達がいる場所。ここはパヴァアリア公明総社の本部である。了はアダムと戦い、なんとか彼を追いだすこと成功をして、今は彼が管理をする組織へと変わっている。

「了、どうしたの？」

「サンジエルマンか・・・・・麗華と加古の二人は?」

「今は部屋で待機をさせているが？」

「…………まさか!!」

彼は走りだして部屋の方へと行くが彼女達の姿が見えない。彼は置いてある手紙を読む。

【了さん、勝手な行動をお許しください。ですがフリーネを許すことが私たちにはできません!!帰つてから罰は受けます…………すみません!! 加古】

「…………」

「了…………」

「あのバカ者達が…………」「どうする?」

「追いかけるわけにはいかん…………帰つてからの罰は考えるさ」  
了はそういうながら一人が無事に戻つてくることを祈る。

## ノイズ大量発生!!

莊吉は二課のメンバーたちと一緒にノイズを倒してきた。彼とクリス、桜花は街を歩いていると突然としてノイズが大量に発生をしていた。それを受けて二課の方では出動命令を出して全員が出動をする。

莊吉たちはすでに戦闘を開始をしておりサイクロンとエターナル、イチイバルを纏つたクリスはガトリングでノイズに攻撃をしている。「だがこの数は一体・・・・」

サイクロンは風の手刀で切り裂いていきエターナルはエターナルエッジを振り斬撃刃を放ちノイズ達を倒していく。

一方でメックヴァラヌスを装備をした三人と響鬼、響と信一はこちらもギアなどを纏いノイズと戦っていた。

「どうしてノイズがこんなに!?」

「わかりませんわ!!」

「だけどここで食い止めないと!!ヒーローは諦めたりしないわ!!」

弓美は弓を構えて矢を放ちノイズを貫通させる。響は走つてその拳で殴り信一は変身をしたアギトも同じく拳でノイズを倒していく。「やるじゃないか・・・・ならおじさんも頑張らないとね?」

音激棒烈火を構えて炎の剣烈火剣を作りそのまま振りおろしてノイズ達は燃えていく。別の場所でもナイトこと零斗と翼も交戦をして戦っていた。

「こいつらの数はいつたい・・・・」

ダークバイザード攻撃をして翼は大剣にして斬撃刃を放ちノイズを倒していく。だがそれでもノイズの数が減っていない。

さてこちらでも奏と或歩が変身をしたゼロワンが交戦をしている。彼はシャイニングホッパーに変身をしてラーニングをしてノイズ達を素早くオーソライズバスターで撃破していく。

「くそなんて数なんだよ!!」

「・・・・敵は俺達を外に出す為に・・・・基地が危ない!!」

「何!?」

だがその前にノイズがいて邪魔をされる。

「邪魔をするな!!」

【トルネード】

突然として風の矢が放たれて或歩たちの前のノイズが撃破されて戦士が着地をする。

「カリス!!」

「カリス?」

現れたのはハートのラウズカードで戦う戦士カリスである。すると彼はそのまま彼の傍に行き耳元で話す。

「俺だ啓人…………信也だ」

「信也!?お前もこの世界に…………」

「ああ神エボルトにお前たちをサポートするためにさつき日本に戻ってきたんだ。」

「なら直哉も喜ぶな」

「そうか…………よし俺も協力をする。今の名前は相川 一真だ。」

「俺は不破 或歩だ」

一方で翼と零斗も急いで基地の方へ戻ろうとするがノイズが現れて邪魔をして二人の体力を減らしていく。

「くそ!!」

「邪魔をするな!!」

大型ノイズが二人に攻撃をしようとしたが…………

「おりやああああああああああああああああああああああ!!」

後ろから赤い戦士が走りナイトの肩を踏みそのままキックを大型ノイズに当てて紋章が発動をして爆発をする。

「誰だ!!」

「待て翼…………」

現れたのは五代 勇助が変身をしたクウガである。彼は振り返りナイトの方に頭を下げる!!

「先輩久しぶりです!!」

「先輩?」

零斗はいきなり先輩お久しぶりといわれたので首をかしげている

と彼はあーそう言うことかといい話す。

「俺ですよ!!先輩の後輩で冒険をしていた。」

「いい!?優太なのか!?」

「はいっす!!まあ今は五代 勇助ですけど・・・・・・」

「お前も転生をしてきたのか・・・・・・」

「あははは・・・・りあえず先輩たちを助けるために俺も戦います!!」

三人は走つていきノイズを倒しながら基地の方へと戻る。一方で戒斗は未来と緒川と共に基地の方へと逃げていた。彼は未来を守るために一緒に基地の方へと行くがそこに一人の女性が歩いてるのを見つける。

「了子さん?」

「待つてくれ緒川さん・・・・・・」

彼は戦極ドライバーを装着をしてロツクシードを構える。

「バナナ!」

「変身!!」

「ロツクオン!カモン!バナナアームズ!ナイトオブスピアー!」

仮面ライダーバロンに変身をして了子にバナスピアをつきつける。

「お前は誰だ?」

「ふつはつはつは!!なるほどな気配だけで私を感じていたのか・・・・・・」

彼女は笑いながら後ろの方へと下がりネフシュタンの鎧を装着をした姿に変わる。彼はやっぱりかといい緒川さんの方を見る。

「緒川さん未来を頼みますよ!!」

「戒斗君!!」

「はあああああああああああああ!!」

彼はバナスピアをフイーネに放つが彼女はネフシュタンの鎧を鞭で彼が放つバナスピアをはじかせて彼のボディを切りつける。

「ぐあ!!」

「戒斗!!」

「いけません!!」

「どうした貴様の力はそんなものか?」

(くそこの場所は狭すぎて戦いづらい…………だが未来たちを守るために戦うしかない!!)

彼は再び攻撃をしようとしたときに天井が壊れて弦十郎が現れる。

「そこまでだ了子!!」

「まだその名前で呼ぶか貴様は……だがなぜ?」

「俺達もここまで馬鹿じやない、お前はおそらく装者や仮面ライダーたちがいなくなつたこの基地にデュランダルを取りに来ると思つてな」

「なるほど……あいつらをわざと出撃させたつてことか……なら死ね!!」

フイーネは鞭を弦十郎に放つが彼はかわしていきその剛腕を放つが彼女は回避をするがネフシユタンの鎧に鱗が入り彼女は驚いていりる。

だがすぐに反撃をして鞭に放つが彼は両手でキヤツチをしてそのまま引き寄せて彼女のお腹を殴り吹きとばす。

「つ……つええ……」

戒斗は弦十郎の強さを生で見て改めてOTONAつて強すぎだと思つて見ていると突然として弦十郎がこちらに吹き飛ばされたので彼はキヤツチをする。

「す、すまない戒斗君」

「大丈夫ですか?つて!!」

彼は扉の方を見ると破壊されて天井を突破をして脱出をしたのを見てまずいと思い急いで向かっていく。

一方で莊吉たちは響達を拾つてリボルギヤリーに乗り移動をする。

「ありがとうございます莊吉さん」

「気にするな、桜花次の戦いではダブルで行くぞ?」

「はい!!」

莊吉はそういう基地近くに行くと地震が発生をした。

「「「「うわうわうわうわうわ!!」」」

「師匠!! リディアン学園が!!」

• • • • • • • • • • • •

クリスたちはモニターを見てリディアン学園が破壊されて何かの砲塔が出てきたのを見て近くにとまり莊吉はダブルに変身をしてクリスはイチイバルを装着。響達も降りたつとそこに翼たちも合流をする。

一  
お  
し  
し

「形シ！大丈夫か！」

儀一かなんとかな……かがまでい」とはなつた

ライダードも・・・・・

あれは了子さん!?

いや違うな……… 櫻井 了子……………いいやアイーネと呼

んだほうかいいたるうな？」

「そのとおりだ。左近吉………そして見るかい!!」

「なんだよあの砲塔

いや零斗ねざとか?

(馬鹿(ハラフ)は知らないふりをしておいた方がいいだろ？)・・・・・

(お  
い  
お  
い  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
)

ナイトとゼロワンはこそそそと話しているがフイーネは何かを話  
しておりカ・デインギルと呼ばれる砲塔はチャージをしているよう  
だ。

「貴様たちはこれを壊されるわけにはいかないのでな！」お行くかいいノイズども!!」

フィーネが持つソロモンの杖からノイズが発生をして大量のノイズ達が発生をする。するとノイズに攻撃が放たれて撃破される。

何！？

「あれは・・・・・・」

『武神鎧武とこの間の人ですね?』

「何しに来た貴様たち」

「もちろん・・・・・・お前を倒す為に来た!!」

「その通りよ!! さあ覺悟はいいかしら?」

「ふん・・・・・・お前たち二人だけ来て何ができる。さあ行け!!」

「さてお前たち行くぞ?」

「はい師匠!!」

「『さあお前の罪を数えろ!!』」

フイーネが発生させたノイズにダブルたち仮面ライダーたちが先行をしてノイズに攻撃をしていく。

「は!!」

【ソードベント】

「せい!!」

ゼロワンはオーソラライズバスターを放ちガンモードを放ちノイズ達を倒してナイトはウイングランサーを刺していく。武神鎧武とG3-X改はフイーネに攻撃をする。

「ふん貴様たちのおかげで私はパワーアップをしたのだ!!」

「ぐ!!」

ダブルはルナトリガーヘと変わり変則な弾丸を放ちノイズ達に攻撃をしていく。

「くそ!!このままじゃカ・デインギルが!!」

「・・・・・・・・・・」

莊吉のほうは黙つて撃つてるので桜花は声をかける。

『お父さん先ほどから無言ですがどうしたのですか?』

「そろそろだな・・・・・・・・・・」

ダブルが何かを言つているがほかのメンバーはノイズ相手に戦つており撃破していくが二人が吹き飛ばされてダブルはルナサイドの手を伸ばして一人をキヤツチをする。

「ふつはつはつはつはつはつは!! 見るがいいカ・デインギルは最大までたまつた!! さああの忌々しい月を破壊をしてくれるわ!!」

だが突然としてカ・デインギルの溜まつていたエネルギーが出力が

落ちていきカ・デインギルは沈黙をした。

「力・デインギルの出力が……」

「落ちた？」

「どうなつてやがる!?」

「ば、馬鹿な…………なぜだ!!なぜカ・デインギルの出力が落ちたんだ!!」

「あつはつはつはつはつはつはつは!!」

突然としてダブルが笑いだしたので全員が彼の方を見る。

「左莊吉!!貴様の仕業か!!」

「ああその通りさ。」

「「「え!?」」

「あの地下基地に保管されているデュランダルは偽物さ!!」

「「「な、なんだつて!?」」

「に、偽物!?」

「ええええええええええええええええ!!」

全員が莊吉が言つた偽物という言葉に驚愕をしているが彼はそのまま話し続ける。

「デュランダル護衛が失敗を終わつた際、地面に突き刺さつたデュランダルを見て俺はあるメモリのマキシマムドライブを発動させた。それはこれだ」

彼はメモリを出して押す。

「ダミー！」

「こいつの力を使いデュランダルを複製、本物は別の場所へと隠していたのさ。だからこいつは本物に似せた偽物つてわけ。そして再現として起動をした時のエネルギーを纏わせたままになつていたのさ。そりやあ一こんな大きなものにエネルギー源として使えば最大出力で放つ前にエネルギーが落ちるわけさ…………ちなみに知つているのは弦十郎と計堂さんだけだ。欺くために味方から騙したというわけさ」

「おのれおのれおのれ!!」

「さあこれで終わりにしてやるさ…………」

彼はトリガーメモリを外してトリガーマグナムにセットをする。

## 【トリガーマキシマムドライブ！】

# 『トリガーフルバースト!!』

放たれたトリガーフルバーストがノイズたちに命中をして次々に撃破されて行き、残つたのはフイーネだけである。

— せあ後はあんただけよ?

武神鎧武は武器をつきつけてファイーネに構えるが、彼女は突然として笑いだした。

卷之三

「君の皮裏は云々」

一月の破壊はできなかつた。だが貴様たちを倒すことはできる!!」  
するとフイーネはアース結晶を出してそれを自分自身に当てた。

〔二二〕

くおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「おおおおおお」

彼女は光出してネフシュタンの鎧なども変化をしていきさらには、イズ達を吸收をしていき化け物へと変わる。

「なんだよあれ・・・・・」

『私の前かう消えるが、ハハ！』

『糸の前から消えるかしい！』

放たれた砲撃が全員を吹き飛ばして変身などを解消させるほどの威力を持つていた。

「レバ」

「……」

フイーネの方を見て莊吉も地面に倒れていた。響達もその場に倒

れておりファイーねはとどめを刺す為にエネルギーをためていく。

!!

砲撃が倒れている全員に向けて放たれる。全員が目を閉じたが誰かが彼らの前に現れてフイーネが放つた砲撃をふさいだ。

「な、何!？」

ボロボロの状態の全員が見るとマントを羽織つた一人の人物が彼らの前に立っていた。その人物こそ莊吉を始め戦士たちをこの世界へ送りこんだ人物神エボルト事如月 戰兎である。

「まさかアース結晶の効力がダークエグレイズが生み出した暗黒結晶みたいだとは思つてもいなかつたよ。」

彼は周りのみんながボロボロになつて倒れているのを見てアース結晶の力がこれほどとはなと思い上空に何かを投げつけると彼女達の体が回復をする。

「こ、これは・・・・・・

「俺の魔法の一つか。さて聞こえてくるよ歌が」

「歌?」

「こ、これってヒナの声?」

「この歌はリディアン学園の校歌です・・・・・・

「何だろう力が・・・・・・」

「力がみなぎつてくる!!」

「ああ・・・・・・」

全員が次々に立ちあがつていきフイーネは驚いている。

「ば、馬鹿な!!なぜだ!!なぜ奴らは立てる!!」

「彼女達を甘く見ていたつてことだよあんたは・・・・・さあ実験を

始めようか?」

「桜花!!エクストリームでいく!!

『はい!!』

「変身!!』

【エクストリーム!!】

【サバイブ!】

【メタルクラスタホッパー!!】

【響鬼装甲】

【変身!!】

【エボリューションキング!】

【極アームズ! 大大大大将軍!】

【【全ての力を超越をする力! マックスインフィニティー! ツヨーイ  
! なおおおおおおおおおおおおおおお! あつはつはつはつはつはつ  
は!!】】

「シンフォギアああああああああああああああああああああああ!!」

仮面ライダーブルゴールデンエクストリーム、ナイトサバイヴ、  
ゼロワンメタルクラスターホッパー、装甲響鬼、ライジングアルティ  
メットクウガ、極アームズ、さらに武神鎧武、G3-X改もパワーアップ  
をしてシンフォギア、メックヴァラヌスもパワーアップを果たす。

彼女達の姿を名付けるならエクスドライブモードと・・・・・  
そして神エボルト自身もマックスインフィニティへと変身をし  
て構える。

「勝利の法則は・・・・・決まった!!」

「さあフィーイネ」

「『さあお前の罪を数えろ!!』」

# ファイーネとの決戦!! 戦え戦士たち!!

ファイーネの砲撃でダメージを受けた戦士たちの前に現れたのはファイーネがアーク結晶を使つた力を感じて自身の世界の敵を倒してそのまま飛んできた神エボルト事如月 戦兔である。

彼らは再び立ちあがりシンフォギアとメツクヴァラヌスは新たな姿エクスドライブモードへと変わり仮面ライダーたちも最強形態へと姿を変えて今ファイーネとの最終決戦が行われようとする!!

「くらうがいい!!」

ファイーネは砲撃を放つが全員は回避をしてナイトはカードを装填する。

「シユートベント」

「くらえ!!」

ダークアローを放ちファイーネにダメージを与えるとメタルクラスタホッパーがログライズホッパーブレードをもちクラスターセルたちを飛ばしてファイーネにダメージを与えていく。

「おのれ!!」

「はああああああああ!!」

「おらああああああ!!」

そこに奏と翼が突撃をしてファイーネにダメージを与える。彼女は振り回して攻撃をするがそこに響、創世、詩織が接近をして装甲響鬼と鎧武も武器を持ちファイーネを殴つたりしていく。

「この!!」

ファイーネは鞭を振り回して五人を吹き飛ばすが、遠くで弓美とクリスが武器を構えてレーザーと矢が放たれてファイーネに当たる。

「ぐうううう!!だが!!」

受けた場所が再生をしていきブレイドたちは回復をしたのを見てネフシュタンの鎧の力かと思い構え直す。

「はああああああああああ!!」

ビルドマックスインフィニティーが接近をしてエターナルガンナーで攻撃をして切りつけていき彼は何かを見つけるかのように攻

撃をしている。

一  
櫻花  
！  
」

はい!!

【サイクロンマキシマムドライブ！】

## 〔ルナマキシマムドライブ!〕

トリガーマキシマムドライブ

『ビツカーフアイナルイリユージ

ビツカリシールドから強力なビームが放

ヒツカリ・シーバトから強力なヒームが放たれて、アーリネは当たるが彼女の体は再生をしていきダブルの方も苦戦をする。

どうしたらいいんだ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

アレイドはキンクテウサリ クウガは発火能力を発動させて攻撃をしているがフイーネはさらに力を込めて吹き飛ばした。

「マシンガンアーム!!」

イバーとブラット大橙丸を振り下ろして切りつけるがダメージは再

「ネフシュナンの體を消へ法へば、ハ」

「その手だ・・・・・」

ダブルはスタッフフォンを出してびびりと何かを呼びつけるとリボルギヤリーが現れた。

神工ボルトはあの中に何があるのかと考えていると信一が変身をしたアギトはトリニティフォームへと変わりライダーシュートを放つ。

「甘いわ！」

信一

「響ちゃん!!」

「莊吉さん!? それは!!」

「これこそ本物のデュランダルだ・・・・・これを奴にぶつければ

おそらく・・・・・・

「で、ですけど・・・・・・」

響はデュランダルを使つた際のことと思ひだしていた。だからこそ彼女は・・・・だが荘吉は声を出す。

「大丈夫だ!!お前には友や仲間がいる!!一人で抱えようとするな!!受け取れええええええええええ立花響いいいいいいいいいいいい!!」

ダブルはデュランダルを投げつけて響はキヤツチをする。だがデュランダルのエネルギーが彼女の体を黒く染まらせていく。だがそこに翼やクリス、奏に弓美、創世、詩織が駆けつける。

「負けるな立花!!」

「しつかりして響!!」

「ビックキーあたしたちがついているよ!!」

「そうよ!!」

「立花さん私たちと共に!!」

「しつかりするんだ!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

響の体が光りを取り戻してダブル達は先に先行をする。

「皆いくぞ!!」

「[[「おう!!」]]」

【ファイナルベント】

【エクストリームマキシマムドライブ!】

「鬼神覚醒!!」

【スペード10、J、Q、K、A ロイヤルストレートフラッシュ】

【極スカッシュ!!】

【ブラットオレンジスカッシュ】

「はああああああああああああ!!」

【メタルライジングインパクト!】

「おりやああああああああああああ!!」

【【READY GO!! マックスインフィニティーフィニッシュ!!】】

仮面ライダーたちは一気に飛びフィーネに蹴りや必殺技をお見舞

いさせる。

「おのれええええええええええええええ!!」

彼らは反転をして莊吉が振り返る。

一  
今  
だ  
！  
」

۱۰۷

響たちが振り下ろしたデュランタルが仮面ライダーたちの蹴りを受けたフリーネに振り下ろされる。

「せせるかあああああああああああああああ！」

フイーネは鞭やノイズなどを発生させて元エランタルを相殺しようとしたがデュランダルの大きいなる力がフイーネが放ったノイズや鞭を破壊をしてフイーネに命中をする。

ああ!!  
」

爆発が起きて仮面ライダーを始め全員が見てる。シンフォギア装者とメックヴァラヌスたちは着地をして響が持つててるデュランダルが粉々になり消滅をする。

「おそらくネフシュタンの鎧とぶつかった影響だろう……」

龍田やうましかれ？

全員が見ているとフイーネが立っていた。ビルドは胸部にある結晶を見る。

田を見る

あれみたいんだ。

アース結晶

「強烈な刀必用の三日三夜の苦悶」

この世界へと放つたんだ・・・・・・とりあえず】

彼は瞬間移動をしてファーネの前に立ち、彼女の胸部にあるアース結晶を取り封印を処置をする。

「…………封印成功」

「お、おのれ…………」

「お前の野望は終わった。彼女達にお前は負けた…………そうだろ？」

「…………」

「なら、これからは櫻井了子として生きていくがいい…………これは神さまとしてお前に与える罰と思え」

「神エボルト…………」

彼はそういう力・デインギルを見ている。

「とりあえずこいつは俺が引き取るよ。今回はアース結晶があつたら俺はこの世界へやつてきた。けれど俺は頻繁に来れるわけじやない。もし君達が何かあつて最後まで諦めないと俺は駆けつける。」

彼は次元の扉を開いて力・デインギルごと消した。

莊吉 said

あれからのこと話をそう。ファイーネこと櫻井了子は引き続いで二課で働くことになる。今回起こしたファイーネは死亡をしたことになり今回の事件は解決をした。

なお今回協力をしてくれたクウガ、武神鎧武、G3-X改は戦いの後どこかに消えてしまいブレイドこと相川一真は引き続いて俺達の仲間へとなってくれるようだ。

「…………」

それについても神エボルトが言っていたアース結晶とは…………

強力なものといつていたが…………あのファイーネがあれほどの力を出せるつてことはもしそれがウエルなどが手に入れたらどうなるのか…………いずれにしても次の時系列的に月は破壊されていなければG編となる。

だが原作みたいに月は破壊されていないし動いているわけじやない…………ならマリアたちはどうやって仲間になる？それがわからぬ…………だがまだ転生者たちは神エボルトがくれた紙にはありアーク結晶も手に入れないといけないからな大変だな…………「やれやれ…………」

「師匠———」

「お父さーーーん」

「どうした?」

「今日はパーティーをするから準備をしてくださいと言つたじやないですか!!」

「そうだつたな。」

俺達は準備をしてから移動をする。場所は風鳴家でやるらしいので外へ出ると車が来ており俺達は乗りこんでいく。

なおリディアン学園の方は政府などが新たな場所に学校を作るそ  
うで寮なども作るそうだ。

莊吉 side 終了

風鳴家に到着をして莊吉たちが到着をするとほかのメンバーたち  
はおり訃堂なども座っている。

「では諸君今回の事件お疲れ様つてことで遠慮なく食べててくれたま  
え」

「よし食べるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「もう響つたら」

信一と戒斗はその様子を見ながら変わらないなど見ながら二人も  
ご飯を食べている。翼と零斗は?

「あーん」

「おい翼・・・・・・・・」

「いいじやない恋人同士なんだから照れなくともいいじやないの」

「だからといつて」

或歩と奏も一緒に食べておりヒビキは仲良し三人組と一緒に食べ  
ており莊吉は桜花とクリスと共に食べたりお酒を飲んだりしている。  
もちろんクリスと桜花はジュースを飲んでいる中一真は一人の女性  
と話をしていた。

「久しぶりね一真君」

「そうだなあおい・・・・・・・・いつ以来だ?」

「高校卒業後以来かしら?まさかあなたがね・・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・・・・」

友里 あおいとは幼馴染の関係で二人はお酒を飲み乾杯をしてい  
る。

「しかし親父…………困ったことになつていてる」

「うむ…………二課の基地はカ・ディンギルで崩壊をしてしまい潛  
水艦を使うことになる。すまんな…………」

「いや気にしてることはないが…………ソロモンの杖をどうするかだ  
?」

「うむとりあえずは保管をすることになる。いずれにしてもそれさえ  
なければノイズどもは出てこないからな…………」

弦十郎と訃堂は話をしながらこれからの一課のことを考えている。  
さて場所が変わりアメリカ。

「待ちなさい!!」

黒いガンギニールを纏うマリアは追いかけていた。その前を三人  
の戦士が逃げている。

「全くしつこいな…………は!!」

銃を放ち攻撃をするがマリアはガンギニールの槍を振り回しては  
じかせると前の方にアギトが立っている。

「逃がさんぞ!!」

「前にもいるぞ?」

「だつたらこいつだ。」

〔サ・サ・サ・サイクロン!〕

「何!?」

「そーれ!!」

黄色い戦士が出撃させた緑色の装着をしてアギトに強力な竜巻を  
お見舞いさせる。

「うわ!!」

「ロビン!!」

「さーてまたねアデュー」

三人は戦闘機を射出させて乗りこんで撤退をした。

「くそまた逃げられた!!」

「素早いなあの怪盗達」

「一人が話しているとバイクに乗つて蓮子が到着をした。

「二人とも」

「蓮子姉さま」

「蓮子さん・・・・・」

「その様子だと逃げられたみたいね・・・・・」

「人が首を縦に振り蓮子はいつたい何者かしらと思い逃げていった空を見る。」

## 仮面ライダー対怪盗

蓮子 side

私はマリアとロビンを連れて家の方へと戻ってきた。怪盗達に逃げられてしまい彼らを追いかけるけど完全に見失ったのである。

『お帰り皆』

「お帰りなさい蓮子お姉ちゃん」

「ただいまベルトさんに霧子ちゃん。」

今迎えてくれたのは私たちの新しい仲間泊 霧子と相棒のベルトさん。彼女達も私たちと同じく転生者でドライブ、マツハ、チエイサーになることができるわ。さらに中ではゲームの音が聞こえてくるのでおそらく・・・・私は中へ入ると切歌、調、そして二人の人物が遊んでいる。

「よし勝つたぜ!!」

「負けたデース!!」

「ショック・・・・」

「俺とMがコンビを組んだら負けなしだぜ?」

そう遊んでいるのは仮野 永夢とその相棒のパラドである。この子も同じく転生者でエグゼイド関連に変身が可能である。

「お、蓮子ねえおかえり!!」

「ええ帰つたわ」

「その様子だと逃げられた感じだな?」

「正解よ・・・・」

私たちは座つているとセレナとマムが入ってきた。

「お帰りなさい三人とも・・・・しかし怪盗は何が目的なのでしょうか・・・・」

「わからないですね。」

そうね、あいつらがアメリカで動いているのは私たちがこちらに引っ越しをしてからね・・・・いずれにしてもあいつらを今度は逃がしたりしないわよ!!

蓮子 side 終了

さてここはある屋敷で三人がゲットをしたのを鑑定をしている。

「…………ハズレか」

「ざーんねん、ルパンコレクションじゃないってわけね?」

「まあしようがないさ…………それで見たか?」

「ああどうやらあいつらが転生者だろう…………アギトなんてシンフォギアにいない。」

「だよね——神エボルトさんが言っていたのは間違いないよ?」

「ならこつちで試してみるか?」

「あーそつち?」

「私たちの顔は知られてない…………なら試そうぜ?」

「いいね——」

彼女たちはルパンレンジャーとして活動をする三人組、レツドは夜野 永琳 ブルーは宵町 桃華 イエローは早見 麗華の三人組女性戦士である。

そして彼女達にはなんともう一つの姿を持つてているのだ。ふふと笑いながら永琳はトリガーマシンを出して仮面を付ける。

「さて行きましょうか?」

「ええ

「りょうかーい!!」

その様子を天界から見ている神エボルト事如月 戰兎は苦笑いをしている。

「やれやれあの子たち三人組はリアルの友達が事故で亡くなってしまった転生特典を見たらまさかのルパンレンジャー及びパトレンジャーのビーケル及びアイテムだからね…………彼女たちの目的はルパンコレクションといっているけど本当はアース結晶なんだよね…………厄介なことにアース結晶は姿を変えて潜んでいるみたいだからな…………それが厄介なことになっている。こういうクリスタルのような状態ならまだいいんだけど…………」

彼は封印をしたアース結晶を見ながら再び下界の方を見る。さて場所が変わりアメリカのある美術館に予告状が届いたと聞いて蓮子たちは出撃をしてみている。

「さて来るのかしら?」

「あ、あれを見るデース!!」

切歌が指をさした方角を見てグラайдラーで現れたようだが蓮子は向こうへ走りだす。

「蓮子お姉ちゃん?」

「どこに行くデース!!」

「あれは囮よ!! あいつらはすでに中に入っているわ!!」

「「「な、なんだって!!」」」

全員が走っている中、三人はふふと笑いながら見ている。

「間違いないわこれはアース結晶よ」

「やつたね!!」

「成功だな・・・・・・」

【バーストモード】

「おつと」

「やつぱりね・・・・・・」

「へえーわかつたんだね?」

「あれが囮だつてのはわかっていたわ・・・・・・」

セレナたちはギアを纏い四人は構える。

「行くよベルトさん!!」

『OK霧子!スタートユアエンジン!!』

【マイティアクションX!】

「ノーコンテニユーでクリアしてやるぜ!!」

【スタンディバイ】

「「「変身!!」」」

【ドライブ!タイプスピード!】

【ガチャーン! レベルアップ! マイティジヤンプ! マイティキック!】

【マイティマイティアクションX!】

【コンプリート】

ドライブ、エグゼイド、ファイズ、アギトに変身をして彼女達はふふと笑っている。

「なら私たちも変身をしようじゃない」

彼女達はＶＳチエンジヤーを構えてトリガーマシンを出す。

「「警察チエンジ!!」」

【二号!】

【三号!】

【三号!】

【パトライズ！警察チエンジ!!】

「「は!!」」

【パトレンジャー！】

彼女達の姿が変わりパトレンジャーヘと変わった。

「え!?」

『姿が変わった!?』

「なによあれ!!」

「パトレン一号！」

「パトレン二号」

「パトレン三号！」

「警察戦隊！」

「「パトレンジャー！」」

パトレンジャーヤを見て8人は驚いてると彼女達はＶＳチエンジヤーを構える。

「さーでドハデに行くわよ!!」

トリガーを引き弾を発射させて彼女達に攻撃を放つエグゼイドはガシャコンブレイカーを出してハンマーモードで彼女達が放つた弾丸をはじかせると接近をしてパトメガボーム構えて攻撃をする二号と一号にドライブとアギトが相手をする。

マリアたちシンフォギア装者たちは攻撃をしようとしたが一号はトリガーマシンバイカーをセットをする。

【バイカー！警察ブースト！】

「それ!!」

ヨーヨー型のエネルギーが発射されてマリアたちを吹き飛ばす。

「「「きやああああああああ!!」」

「マリア!!」

「余所見厳禁!!」

「どあ!!」

「ロビンさん!!」

『霧子来るぞ!!』

「わつと」

ドライブはかわしてドア銃を装備をして攻撃をする。

三号はエグゼイドとファイズと交戦をしていると一号も参戦をしてファイズと激突をする。

「あなたたちも転生者なの!?」

「ええその通りよ!!」

「ならなぜ怪盗みたいなことをしているのよ!!」

「この世界を守るためよ!!」

「どういう意味!?」

「教えるわけないでしょ?は!!」

「ぐ!!」

V S チエンジャーから放たれる弾を受けてファイズは後ろへ下がり三号も蹴りを入れてエグゼイドをさがらせる。

「さーてそろそろ撤退ね?」

三人はトリガーマシンを外してダイヤルファイターをセットする。

〔レッド! 0・1・0〕

〔ブルー! 2・6・0〕

〔イエロー! 1・1・6〕

〔「怪盗チエンジ!」〕

〔ルパンレンジャー!〕

姿が変わりルパンレンジャーへと変わる。

〔ルパンレッド〕

〔ルパンブルー〕

〔ルパンイエロー〕

〔怪盗戦隊〕

〔「ルパンレンジャー!!」〕

# 「姿がまた変わった!?」

『同じアイテムで二つの姿になれるってことか!!』

「可  
で  
す  
つ  
て  
？  
」

三人は先ほど変身に使つたダイヤルファイターをセットをする。

[[ゲットセット！レディ？飛べ！飛べ！飛べ！]]

四二

ブル・ブル・ブル・ブル!

〔イ・イ・イ・イエロー!〕

「小さいのが大きくなつた。」

三人は大きくなつたダイヤルファイターに乗り撤退をして8人は

逃かしてしまう

「あの大きさの戦闘機を見忽て

• • • • • • • • • •

一蓮子お姉ちゃん？

「何で、んな、つ……」

? ( )

彼女はアース結晶とはいつたいと考えながら全員で家に帰りお風

〔二〕

「目を覚ましたみたいだな乾蓮子」

「神工ボルト……………こゝは?」

（こ）は精神世界の中……今お前たち転生者に同じような夢を見せてやる。君二つから三つ三者は迷ひの心を覺めやう。

がそれとは別にその世界で問題が発生をして いる。」

一問題？

「アース結晶と呼ばれるものだ。」

「アース結晶……………そりゃあいつら三人組が言つていたのと一緒……」

蓮子はそう言つている中神エボルトは話を続ける。

「アース結晶は俺が管理をする世界とは別の世界のものだ。それが何者かによつてこの世界へと降り注いだ……しかもその結晶には強力な力を持つてゐる……もし悪の者が使えば強力な力を使い襲い掛かつてくるだろう……そして君達に新たな力を授ける。」

彼は右手を上げると光出して蓮子たちに当たる。彼女達は何があつたのかと触るが彼は笑う。

「心配することはない、これは君達にアース結晶を封印する魔法を授けただけだ。俺はある事情でこの世界へあまり来ることはできない。だから君達にアース結晶を集めてほしい……そしてこれを見ているのは正しい正義の君達だけしか見ていない……頼んだぞ」

光出して蓮子は起きる。辺りを見て自分の部屋だと確認をして両手を組む。

「アース結晶……………あいつらが集めていたのはそれが理由……………神エボルトさんが言つていた危険なものがアース結晶……………それが悪い奴らが拾えば大変なことになるといつっていたわね……………蓮子はそういうながら起き上がり服を着替えて欠伸をしながら一階へと降りていく。

「おはようございます蓮子姉さん」

「おはようセレナ、今日はどの予定かしら？」

「えっと蓮子姉さんは撮影になつていますね？」

そう蓮子もマリアと同じく女優として演技をしたり歌つたりしている。セレナはマネージャーとして動いておりロビンはマリアのマネージャー兼護衛である。

「大丈夫だ蓮子ねえは俺が守るぜ!!」

「ありがとう永夢、でも今日は霧子が担当じゃない?」

「あ……………」

「そういうことだから任せて!!」  
「ありがとう」

蓮子はお礼を言いふふと笑う。

## 了の二人に対して判決

ここはパヴァアリア公明結社の本部にある部屋。ここに二人の女性は入っていた。相田麗華と氷川加古である。二人は了に黙つて勝手な行動をしたつてことで現在はこの部屋で統制局長である正木 了が結果を出すまでここで待つよう言われていた。

「ごめん麗華、私のせいだ」

「ううんあんたのせいじゃないさ……」

扉が開いてサンジエルマンがやつてきた。

「一人とも出なさい局長がお呼びよ」

「…………」

二人は無言でサンジエルマンの後をついていき結果を聞くことにした。サンジエルマンは扉の前でコンコンと叩き入れと声が聞こえたので三人は入りサンジエルマンは了の方へと行く。

「さて一人とも…………勝手な行動をしてくれたね？まあ俺たちの存在がばれたわけじゃないからいいけどな…………」

「了さん!!罰を受けるなら私だけにしてください!!麗華は関係あります!!」

「何を言つているんだい!!あたしだつて同罪だ!!だから…………これを抜けることだつて覚悟はあります!!」

「ほう…………友のためにここを抜ける覚悟があると…………」

「…………」

二人の真剣なまなざしを見て了はふと笑い、椅子から立ちあがり二人の頭を撫てる。

「え?」

「心配することはないお前たちを追いだしたりしないさ。」

「了…………」

「了さん…………」

「お前たち二人の友情を試して悪かつた。だがお前たちはお互いをかばいあう姿を見させてもらつたよ。それに最初からお前たちを追いかだしたりするなんて考えていないよ。だが罰を与える。」

「・・・・・」

「二人は当面はサンジエルマンの補助をすることやプレラーティの手伝いなどをすることだ!!いいな!!」

「はい!!」

「では判決は終わりだ。二人とも部屋で休むようにな！」

「失礼します!!」

「二人は局長室を出ていきサンジエルマンが彼に話しかける。  
「よかつたのかあんな罰で」

「構わんさ。俺はそこまで罰を与えるつもりはないさ・・・・・・さー  
てとりあえず行つてくるさ」

「どこへだ?」

「なーにピンチな部下たちを助けに行くさ」

「なら私も行こう」

「おう助かるねーーー」

彼はウイザードドライバーを出して指輪をはめる。

【テレポートプリーズ】

二人はテレポートをしてピンチになっている部下の元へと行く。  
了 side

さて俺はウイザードガンをガンモードにしてテレポートをした場所から歩いていきロープを纏つていく。サンジエルマンもファウストロープを纏いお互いに走つていき苦戦をしている仲間を助けるためにトリガーを引き弾が怪物に命中をする。

「おい大丈夫か?」

「了局長!?

「おうよ!!頼れる男!!正木 了つてのは俺のことだ!!といいたいがおいドラゴン。」

【なんだ?】

「あいつから魔力は?」

【全然だ。】

「なら遠慮なくやらせてもらうか・・・・・・」

俺はウイザードリングをはめて変身をする。

「シャバドウビタツチヘンシーン！シャバドウビタツチヘンシーン！」

「変身！」

「フレイム！プリーズ！ヒーヒーヒーヒー！」

仮面ライダーウィザードに変身をした俺はウイザーソードガンを構えて相手をしている奴らに弾丸を放ち銃などを落とさせる。全く人の仲間たちにちょっとかいをかけているんじやねーよ。

「おら!!」

鍊金術を使い俺はモンスターたちを作り攻撃させる。

「お、おのれ!!」

「さーてサンジエルマン!!」

「はああああああああああああああ!!」

「どあ!!」

「おのれ!!ならば見せてやるよ!!」

「!!」

俺たち二人は敵が持っている何かを見ている。あれは・・・・神エボルトが言っていた・・・・アース結晶!?

「ぬおおおおおおおおおおおお!!」

「よせ!!」

「ぐ!!」

俺達は奴に言うがアース結晶を使い奴の体は変化して化け物ような姿になる。なんてことだ・・・・

「ぐふふふふ!!素晴らしいぞ!!アース結晶!!くらうがいい!!」

「ちい!!」

【ディフェンド！プリーズ！】

俺は炎の壁でガードをするが奴が放った攻撃が強力で吹き飛ばされてしまう。俺はすぐにリングを変えて変身をする。

【ウォーターパリーズ！スイースイースイー！】

ウォータースタイルへと変身をしてウイザーソードガンをソードモードへと切り替えて奴に攻撃をするが奴は俺が放った斬撃を受け止める。

「ぐ！」

「はああああああああああああ!!」

サンジエルマンが弾丸を放ち俺は蹴りを入れてバツクをする。相手はサンジエルマンの弾丸を受けたはずなのに効いている様子がない・・・俺は指輪を出して取り換える。

ノン!

ハリー形態のラントスタイルへと変身をして俺は走りウイザードガンのハンドシェイクを開く。

クード・ドードー】

一一

スラッシュユストライク相手に放つが相手は障壁を張り俺の攻撃をふさぎやがったのか・・・・・・・つてまずいな・・・・

一  
く  
ら  
う  
ワ  
ケ  
ダ  
!!  
」

ラーテイがいた。

「何言つてるのは!!!!」

【全く勝手に一人で行くなんて驚いているワケタ】

「ヤリてとりあえずあ

「そういうことだ。」

四庫全書

俺はブレイブドーンに変身をしてからニレクトを使いもあるもの

## [ドラゴタイマー!]

右手にドラゴタイマーをセットをしてスタートさせる。

【セツトアツアヌタート!】

俺は走りだしてウイザーソードガンで攻撃をして青いゲージに

なつたのでスタッフさせる。

【ウォータードラゴン！】

「は!!」

「おら!!」

緑のゲージになつたのでスタッフさせる。

【ハリケーンドラゴン！】

「何!?」

「まだ増えるぞ!!」

黄色ゲージになつたのでスタッフさせる。

【ランドドラゴン！】

「地面から参上!!」

「ぐお!?」

四人のドラゴン形態のウイザードが並び俺はドラゴタイマーを構える。

【ファイナルタイム！ドラゴンフォーメーション！】

「さーてこれで

「「「「ファイナーレだ!!」」」

ランドドラゴンの俺がドラゴンクロールで叩きあげてそこからハリケーンドラゴンの俺がドラゴウイングで素早く体当たりをしてからウォータードラゴンの俺がドラゴンテイルで叩きつけて止めは俺のドラゴンスカルの炎が放たれて相手に命中をする。

「ぐああああああああああああ!!」

「やつたのか?」

「「「「・・・・・・・・・・」」」

俺達はお互いを見てから三人がバインド魔法を使う。

【【バインドブリーズ！】】

「何!?」

さてとりあえず俺は近づいて相手のアース結晶をつかんでみるが  
なんて莫大な魔力をしている。

「封印!!」

俺は封印術を施すと奴の姿が普通に戻り俺の手にアース結晶が現

れる。これが封印状態の・・・・・とりあえずこいつらを縄で捕まえておいて俺達は立ち去る。

— 了それは  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「アース結晶……強力な力が秘められたものだ。だから封印をしておかないと大変なことになる。」

一ノ二  
カホ

カリオストロは封印されたアース結晶を見ているがこれが先ほど  
の奴が使っていたのと考へると本当に危険なものだな。とりあえ  
ず・・・・・「よつと!!」

「な！」

「どこにいったワケダ!?」

俺達は見ていると三人組のつてあれは!?

アース結晶……………確かにいただいていくわ？」

「貴様は！」

「何者なワケタ!!」

レ  
ン  
ブ  
レ  
ル

「ルパンイエロ！」

# 「怪盜戰隊！」

「「ルパンレンジヤー!!」」

やつぱりルパンレンジヤ

「まことに！  
やつぱりルパンレンジャーか。さて俺はウイザーソードカンを放つ  
が奴らは回避をしてダイヤルファイターに乗り逃げられてしまう。

「アーヴィン! あー、アーヴィング曲所をこじら、がんばれ! 」

「いやまさかあそこで現れるなんて誰も予想ができんな」ヤ・

とりあえず帰るとしよう

俺達は仲間が無事なのを確認をして撤退することにした。しかし

し・・・・・ルパンレンジャーたちも転生者なのか？いや転生者で

間違いないだろうな・・・・・うん。

### 第3章 シンフォギアG? 編 ツヴァイウイングと二人の歌姫

莊吉 s.i.d.e

【ルナ！トリガー！】

「は!!」

あれから三ヶ月がたち、俺達は現在ソロモンの杖を護衛をするために列車に乗っているが・・・・現在ノイズ達が現れて俺達は戦闘を行つてている。

今回護衛として俺達以外にはクリス、響ちゃん、信一君に一真くんとあおいさんだ。現在俺達はダブルに変身をしてルナトリガーに変身してトリガーマグナムを放ちノイズたちを倒している。

【数が多いな？】

『はいノイズが発生をしているのはわかりますが・・・・』

【はああああああああ!!】

【響!!先に急ぐな!!】

【ちよつと二人とも先行しそぎ!!】

『クリスお姉ちゃん頑張つて!!』

【よし!!私に続けええええええええええええええええええええ!!】

【「つておいおい!!」】

今度はクリスがダッショウをしてロストドライバーを装着?

【変身!!】

【アームズ!】

イチイバルを装着をしたまま仮面ライダーアームズへと変身をして仮面ライダーアームズだけど顔が出ているからな・・・・

【名付けるなら仮面ライダーアームズイチイバルフォームだな】

【それかいチイバルアームズフォーム?】

俺達はそう考えていると後ろからノイズが攻撃をしてきたが・・・・

【トルネード】

「さすが一真君」

「あの考えるのはいいですけど戦つてください」

「了解だよ」

【トリガーマキシマムドライブ！】

『トリガーフルバースト!!』

放たれた弾丸がノイズ達に命中をしていき数が減っていくがやはり多いな・・・・一真君は現在カリスに変身をしておりカリスマロードを放っている。

「荘吉さんこの数・・・・」

「ああまるでソロモンの杖を狙っている感じだね・・・・クリス!!これをつかえ!!」

俺はあるメモリを投げつける。彼女はキャッチをしてマキシマムスロットにセットをする。さて彼女になんのメモリを渡したのか?

【アクセル！マキシマムドライブ！】

「よっしゃ!!スピードアップだ!!」

彼女はアームズブレードを構えて突撃をしていき次々にノイズを切り裂いていく。

「ほえークリスちゃん速い!!」

「俺達も続くぞ!!」

信一君はストームフォームへと変身をしてストームハルバードを振り回してノイズ達を切つしていくのをみてこちらも姿を変える。

【ヒート！】

【メタル！】

【メモリチエンジだ!!】

【ヒート！メタル！】

ヒートメタルへと変身をしてメタルシャフトを振り回して炎を纏わせていくノイズを次々に攻撃をしていく。  
「さてなら俺もこのカードを使うかな?」

【バイオ！】

「触手をくらいな!!」

触手を出してノイズ達に攻撃をしていき俺は走りメモリをセット

をする。

「メタル！ マキシマムドライブ！」

『メタルブランディック！』

振り回して次々にノイズを倒していき俺達はやつとのことで到着をした。ウエル博士はお礼を言っているが・・・・確かにこの後にマリアたちが宣戦布告をするはずなのだが？俺はテレビを見ていると響ちやんたちが覗いている。

「あーいいなー未来たちは今頃見ているんだろうなーーーツヴァイウイングとダブル世界の歌姫コンビとのを」

「ほーう」

世界の歌姫コンビか・・・・・・マリア以外に誰だろうか？

莊吉 s i d e 終了

さて一方でここはツヴァイウイングと世界の歌姫コンビの二人が行われるコンサート、7人の人物は椅子に座り始まるのを待つている。

「つておじいちゃん、忙しいのにここにいて大丈夫なの？」

弓美が言っているおじいちゃん、風鳴 計堂がいるからである。彼は機動二課の総司令の身なのになぜかコンサート会場に入っている。しかも未来たちと同じように一般で・・・・

「何を言っているのだ弓美君、せっかく翼と奏君がコラボコンサートをするのじゃぞ？それを見逃すなどわしのプライドが許せんのじや！」

と言つてゐるので創世と詩織、戒斗と未来は苦笑いをしている中ヒビキは何かをしている。

「ヒビキさんは何をしているのですか？」

「ん？ ディスクアーマルたちを使って撮ろうかなつと」

「ええええええええええええ！」

「冗談だよ」

さて場所が変わり控室。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

零斗と或歩はマネージャー兼護衛として二人についている。奏は

準備をして翼はなぜかこそこそと何かをしようとしているので零斗が捕まえる。

「こら逃げようとするな」

「お願いだ零斗、私はもう駄目だ……だから家に帰させてくれ！」

# かりせんかい

嫌だああああああああああああああああ!!!

その二人の様子を見ながら奏と或歩は苦笑いをしている中コンコン  
ンと叩かれる。

「失礼するわ」

一七九

ある。

「あんたたちは……」

「マリア・カデンツアヴナ・イヴ

「ああそのつもりだぜ？」

「あー気にしないでくれ」

翼は蓮子とマリアの胸を見て自分のを見てからずーんと落ち込んでいた。それから二人は去つていき準備を進めていく。

蓮子 S i d e

霧子の二人とセレナがいる。

『お疲れ様どうだつたかい？』

「ええさすがシンフォギア装者つてことかしら?」

「ただ・・・・・翼ちゃんの方はなんでか落ち込んでいたんだけどね

?

なんか自分の胸を見てから落ち込んでいたけどそこまで大きいかな私つて……まあいざれにしてもナースターシャさんたちは二課の方へと向かっており私たちはここで普通にコンサートをすると

いう原作崩壊待ったなし（笑）

まあ月が壊れていなかつたからねーーーアメリカでは私たちが邪魔物になつてゐるからなんですか……そこで考えたのが二課にお世話にならうつてことである。

そのため現在切歌と調、ロビンはナースターシャさんと一緒に二課の方へといつてゐる。大丈夫であろうか？

蓮子 side 終了

さて一方で二課の方ではナースターシャが挨拶をしている。

「F I Sのナースターシャです。今回はありがとうございます」

「いいえこちらこそ。二課司令を務めています。風鳴 弦十郎です。本来でしたら総司令の訃堂が担当をすることになりますが……」「そういうえばその総司令殿は？」

「その……孫のコンサートを見るんじやといいまして一般応募で受かりまして今それについております」

「それつてうちのマリアと蓮子がやるコンサートですか？」

「その通りです。それで改めまして我々の組織につと

「はいその通りです。」

弦十郎はメンバーなどを確認をして仮面ライダーが四人もいるのに驚いてゐる。アメリカの方でも仮面ライダーがいるとはど……

「それで仮面ライダーのメンバーはそこにいる彼以外は現在？」

「蓮子はマリアと同じく合同コンサートの方ですね。」

「乾 蓮子……もしや今回の合同コンサートで一緒に歌う人物か……ではこちらのメンバーも提示をしておかないとですね」

ナースターシャは弦十郎からもらつたメンバーをみて確認をする。

「そちらの方にも仮面ライダーがいるのですね？」

「ええその通りです。彼らがいなかつたら今頃は……」

二人がその話をしている中待機をしているロビン、切歌と調は退屈にしている。

「暇デース!!」

「しようがないよ切ちゃん。今はマムが話をしているんだから私たち  
は入りこめないよ。」

「そのとおりだよ切ちゃん。それにしてもこの二課つてところは潜水  
艦なのか？」

「前のところが使えなくなつたつて聞いたけど…………」

彼女達は潜水艦の中を案内をしてもらつたがシユミレーション室  
に娯楽室、トレーニングルームがあるなどまるで移動をするホテルの  
ような感じなのだ。

場所が変わりコンサートではツヴァイウイングと世界の歌姫コン  
ビが始まり観客たちはテンションが上がっている。

「翼ああああああああああああああああああああああ!!」

「「「あはははは……」」

訃堂のテンションに彼女達は苦笑いをしてみているが確かに今回の  
コンサートはとてもすごく未来は響にも見せてあげたかつたなと  
思つてはいる。

一方で潜水艦の方では任務を終えた荘吉達が帰投をしてナスター  
シャたちとの話が丁度終わつたところであり挨拶をしている。

「へえーお前たちもシンフォギアを纏えるのか?」

「はい」

「すごいね!!」

「そうですか…………」

こうしてナスター・シャを始めマリアたちという新たな仲間を得る  
のであつた。

さて場所が変わりここは永琳たちが借りているホテル。

「さーて日本に着いたわね」

「だな」

「…………けれど…………」

永琳はV.S.エンジヤーを構えてほかの二人もその方角に構える。

「さて先ほどから私たちを見張つている人出できたらどうかしら?」

『ほーう俺の気配を感じていたのか?』

「ええそうね」

現れたのはブラットスタークであり彼はトランススチームガンを出して いるが彼は変身を解除をして笑う。

「イクト君何やっているのよ」

「何やつて いるって神様をして いるのだが?」

「全く驚いたわ。死んだと思つたら事故で亡くなつたはずのイクトを見る ことになるなんて」

そう彼女達は神エボルト事如月 戦兎がまだ紅 イクトとして生きて いたときの同級生たちである。

「それはこつちの台詞だ。いきなりお前らが転生の間に現れたときは驚くことばかりだよ。」

回想

『やれやれ、莊吉君たちを送つたけど・・・・・・あそこの世界は悪い転生者たちがいるからな・・・・・・ん?』

『いてててて・・・・・・』

『ここどこかしら?』

『うーーーーん』

『ふあ!?』

彼は彼女たちを見て驚いていたが神さまとしてここは見ないと行けないなど思い彼女達に声をかける。

『目を覚ましたみたいだな女の子たちよ』

『だ、誰!?!』

『私の名前は神エボルト・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・』

『あ、あれ?』

『どうしたの?』

『イクト君?』

『え!』

『な、何のことかな?』

『間違いないよ!!イクト君だ!!』

『本当だイクトだ』

『イクトくーーーん!! 何やっているの?』

『いや神さまとしてだな・・・・・つて人の話を聞いてくれ』

『『あ、はい』』

神エボルト説明中

『なるほどね? なら転生特典なんだけど・・・・・』

『なんだ?』

『ルパンレンジャー及びパトレンジャーの装備、ビーグル全部いただける?』

『ルパンレンジャー及びパトレンジャーの装備をね。それは構わないぞ?』

『やつた!! 本物になれるんだね!!』

そして彼女達にアース結晶を回収をするように指示をしたのも彼である。

回想終わり

「どれくら集まつたんだ?」

「ふふ色々と形を変えていつているから苦労したわ?」

永琳はアース結晶を出して神エボルトは受け取るがなぜか難しい顔をしている。

「イクトどうしたんだい?」

「実はアース結晶にはもう一つ秘密あつたんだ。」

「秘密?」

「俺はあるの後結晶を調べるために裏資料室へと入り調べていたんだ。元々結晶は二つで一つの大いなる結晶であると・・・・・」

「「大いなる結晶?」」

「名前はレインボー結晶と呼ばれるもので・・・・・だがある戦いにおいてその結晶は七つに別れてしまい世界へ散らばってしまったんだ・・・・・」

「それが結晶の意味なのね?」

「一つはダーク結晶つまりダーグエグレイズによつて改良された暗黒結晶・・・・・そしてフィールドアースに落ちたアース結晶・・・・・」

「まだ5つもあるんだね?」

「ああ・・・・・しかもその5つはまだ判明をしていないつてのが厄介だ。」

「厄介だね・・・・・」

「頼んだよ?三人とも」

「イクト君はもう行っちゃうの?」

「悪いな俺も自分の世界があるからな。また来るよ』

次元の扉を開いて神エボルトは元の世界へと戻るのであつた。

## 仮面ライダー対仮面ライダー

ここは二課の潜水艦の中にあるシユミレーション室。新たに仲間になつたマリア達を迎えて総司令官である訃堂は立ちあがる。

「諸君!! 我々特異災害機動二課は新たな名前と変わる!! 名前はS・O・N・Gという組織に変わる。我々は通常は日本でしか活動ができるなかつたが・・・・これにより海外にも参戦をすることが可能となつたのだ!! とまあ長い話はこれまでにしておこう異常である!!」

訃堂は説明を終えてから仮面ライダー達はシユミレーション室へとやつて来た。それはお互いの仮面ライダー同士の模擬戦を行うことになり、旧二課メンバーと旧F・I・Sメンバーで別れて行う事になつたのだ。

一回戦は

信一対ロビンのアギト同士の戦い。

二回戦は

零斗対霧子のナイト対ドライブの戦い

三回戦は

或歩対永夢のゼロワン対エグゼイド

最後は

莊吉対蓮子のエターナル対ファイズの模擬戦である。最初の戦いをする信一とロビンは入りお互にオルタリングを出す。

「変身!!」

アギトにお互いに変身をしてブザーが鳴り信一アギトは走りだしてロビンアギトに殴りかかる。

彼は旅芸人で鍛えたこともあり彼が放つ攻撃を交わしていき足蹴りをしてバランスを崩す。

「はああああああ!!」

倒れている信一アギトにロビンアギトは左手のストレートを放つが彼は足で彼の手を蹴り後ろへと起き上がり立たがる。

信一アギトは右腰を押してフレイムセイバーを持ちフレイム

フォームへと変身をする。ロビンアギトは左腰のを押すとフレイムセイバーが出てきてフレイムフォームへと変わる。

「な!!」

「俺は左利きでね？行くぞ」

ロビンアギトはフレイムセイバーを振るい攻撃をする。信一アギトは振るわれた攻撃をはじかせるがロビンアギトは右手にフレイムセイバーを作りだして二刀流で信一アギトのボディを切りつける。

「ぐ!!」

するとロビンアギトは逆手持ちに帰るとフレイムセイバーの刀身が短くなり走つて連続して攻撃をする。

「だつたら!!」

信一アギトは左腰を押してストームハルバードを出してアギトトリニティフォームへと変えてロビンアギトの二刀流のフレイムセイバーの攻撃をフレイムセイバーとストームハルバードではじかせる。ロビンアギトはフレイムセイバーを一本投げつけてきた。

「何!?」

信一アギトはフレイムセイバーをはじかせたがそこにストームハルバードが飛んできて持つていた武器をはじかれる。

「ぐ!!」

「遅い!!」

トリニティフォームになつているロビンアギトはキヤッチをしたストームハルバードで信一アギトのボディを切りつけていき左手に持つて いるフレイムセイバーをつきつける。

「・・・・・・・参つた」

『勝者！ロビン！』

一回戦はロビンアギトの勝利に終わり二回戦はナイト対ドライブである。

「いくよベルトさん」

『ああスタートユアエンジン！』

「変身!!』

『ドライブ！タイプスピード！』

ナイトとドライブに変身をしてナイトはダークバイザーをドライブはハンドル剣を構えてダッシュをして剣をふるう。ナイトの剣さばきにドライブは苦戦をしていた。

「は!!」

「く!!」

ナイトの斬撃がドライブのボディに命中をして後ろの方へと下がる。

『流石に強いな・・・・』

「うん、剣じゃ私は勝てない・・・・だから私はトリックキーで戦うよ！来てシャドー！」

シフトブレスを変えてタイヤ交換をする。

【タイヤコウカーン！ミッドナイトシャドー！】

タイヤを飛ばしてナイトはダークバイザーではじかせるとドライブの胸部にミッドナイトシャドーのタイヤが装着されてドライブはシフトアップをする。

【シャーシャシャシャドー！】

ドライブは分身をして手裏剣を投げつけてナイトにダメージを与える。ナイトはカードを装填させる。

「分身なら分身で対抗だ」

【トリックベント】

ナイトも分身をしてそのまま走りだして分身をしたドライブと激突をして本体のドライブはシフトテクニックをシフトブレスにセットをする。

【ドライブ！ターアイプテクニック！】

緑色のドライブ、タイプテクニックに変身をしてドア銃を装備をして攻撃をする。ナイトはダークバイザーではじかせるがテクニックの能力でナイトの動きを読んでいるかのように攻撃をしているのでナイトは苦戦をする。

「だつたらこれだ」

【ナスティイベント】

「ぐうううううううう！」

超音波を発生させてドライブにダメージを与えてからカードを装填する。

## 【ストライクベント】

ドライブを装着をしてドライブアイヤードを発動させてドライブを吹き飛ばしてダメージを与える。

二十一

— 1 —

ナイトは走ってターゲットマークとイングリッシュマークを「き」にた  
のでドライブは降参をしてナイトの勝利に終わる。

マードライバーを装着をしてプログライズキーとガシヤツトを構える。

二變身！」

〔二〕イシンクホツハリ!

[卷之三] 亂世之書

「ハヨノ三五（ハフリ）アシテおめざ!!」

二ゴジバホグノアコノグノカニニ

二ヶ所へ口はアシ・ニン・リ・アを出してゼロワンに攻撃をしてきた。ゼロワンは回避をしてアタツシュアローでハンマー mode の攻撃をはじかせる。

ゼロワンは離れてからアタッショニアローを引きエネルギーの矢を放つ。エグゼイドはそれを受けてダメージを受けるが彼の近くにメタルがあり彼は拾う。

# 「メダルゲット！」

[回復！]

一げ！！ありかよそれ！！

「ありなんだよな」

【カシャット！ キメラサ！ マイテイクリアイカルハイニッシ＝！】

「やめ！」

マイティクリティカルファイニッショ回避をした後にプログラミング

ズキーを出す。

「ハイパー・ジャンプ！」

シャイニングホッパーにアサルトグリップをセットをしてプログラムする。

「ハイブリットライズ！シャイニングアサルトホッパー！」

シャイニングアサルトホッパーに変身をしてオーソライズスターを連続して放ちエグゼイドにダメージを与えていく。

「うわ!! だつたら!!」

「マイティブラザーズダブルX！ダブルガシャット！」

「だーーーーーい変身!!」

「ガチャーン！レベルアップ！マイティブラザーズ！二人で一人！マイティブラザーズ一人でビクトリーX！」

ダブルアクションゲーマーレベルXに変身をしてさらにレバーをもう一度閉じる。

「だーーーーい変身!!」

「ガチャーン！ダブルアップ！マイティマイティブラザーズ！ダブルエックス！」

「な!! 一人になつた!?」

「いくぜM!!」

「おうき!!」

「ガシャコンキースラッシュヤーー！」

「ガシャコンブレイカー！」

「おら!!」

パラドが入っているRの方がガシャコンキースラッシュヤーでゼロ

ワンに攻撃をしてきた。彼は回避をすると後ろからLが攻撃をしてきたのでオーソライズスターをアックスモードへと変えて受け止める。

「おらおら!!」

「ズズズズキューン！」

「いてててて!!」

連携攻撃に苦戦をしていたが突然としてLが吹き飛ばされたので

パラドは驚いている。

いつて!!

さらにパラドが入るRの方も吹き飛ばされたのでゼロワンはシャインシステムを発動させて一人を吹き飛ばしたのだ。

「大丈夫か？」

「」

「一九〇九年二月」

「ああ  
!!

アサルト

〔アサルトチャーリー！ ジャイဉ�ングアートームインハグト！〕

卷之三

三人が一気に飛び蹴りが激突をしてお互に吹き飛ばされて変身  
が解除される。引き分けとなりいよいよ莊吉と蓮子の二人が戦うこと  
となる。

二人はシュミレーション室に入っている。今回荘吉はロストドライバーの方を選択をして蓮子はファイズギアを選択。

一さて始めるか？」

「エターナル！」

〔スタンディバイ!〕

お互いにベルトに装着やセットをして変身をする。

【エターナル!】

仮面ライダーエターナルとファイズがお互いに立つており、ファイズはファイズフォンを取りフォンブスターへと変えて攻撃をする。エターナルはエターナルロープで彼女が放つ弾丸をガードをしてエターネルエッジから斬撃刃を放ちファイズに攻撃をする。

だがファイズは走った後にステージの街を使いマリオが壁キックをするかのようにして交わした。彼はロープを脱いでメモリを使用

をすることにした。

【オーシャンマキシマムドライブ！】

「水のプレゼントだ!!」

両手から強烈な水流を放つてファイズを吹き飛ばす。

「ぐ!!」

水龍を受けたファイズは吹き飛ばされるがエターナルは突然としてタックルを受けたのでビルの方へと吹き飛ぶ。そこに立っていたのはオートバジンである。

「サンキュー」

ミッショントモリーを抜いてオートバジンの左側に刺す。

【レディ】

ファイズエッジを抜いて構えるとエターナルはビルのがれきから出てきた。

「まさかオートバジンを出すとは思つてもいなかつたよ。」

【アイスエイジマキシマムドライブ！】

「は!!」

エターナルエッジを地面に突き刺して氷が発生をするがファイズは回避をしてエターナルに切りかかる。氷の剣となつたエターナルエッジで受け止めてファイズは一旦は慣れてファイズフォンを開く。

【エクシードチャージ！】

「でああああああああああああああああ!!」

「まず!!」

彼はメモリを出して押してからマキシマムスロットにセットする。

【インビジブルマキシマムドライブ！】

姿が消えて彼女は振るつたファイズエッジが空を切る。彼女は辺りを見てどこにいるのか探している。

【トリガーマキシマムドライブ！】

「上!!」

「は!!」

上空からトリガーマグナムから弾丸を放つエターナルが現れて

ファイズエッジで放たれた弾丸を切り裂く。エターナルはすぐに次の攻撃をするためにメモリをセットをしようとしたが突然としてファイズの姿が消えたので彼は驚いている。

「まさか!! どあ!!」

エターナルは突然としてダメージを受けたので彼はアクセルフォームに変身をしたなど考えてマキシマムスロットにセットをする。

【アクセルマキシマムドライブ!】

アクセルのメモリの力を使いアクセルフォームのファイズを見つけて斬撃をお見舞いさせる。

「が!!」

【タイムアップ! リフォメーション!】

斬撃が決まりファイズはタイムアップをしてノーマルに戻りエターナルはメモリをセットをする。

【ゾーンマキシマムドライブ!】

するとT2メモリが飛んできたが・・・・がんがんとぶつかりあつて地面に落ちていく。莊吉もさすがに多すぎたなど反省をして意識を再び集中させてゾーンを再び使用。

【ゾーンマキシマムドライブ!】

今度は成功をして次々に刺さっていく残ったT2メモリ達は元の場所へと戻っていく。彼は構えていると蓮子の方が変身を解除する。

「やめよ」

「・・・・・・・・・・」

彼もメモリを外して変身を解除をする。結果は莊吉が勝つたがファイズブラスターを使わっていたらどうなつていたのかと莊吉は考える。

莊吉 side

それからシユミレーションが終わりここは左探偵事務所の地下ドッグ、俺達転生者が集まっている。

「さて蓮子君たちも神エボルトさんから言われてこの世界に来たんだ

ね？」

「はい、莊吉さん達もですか？」

「ああそのとおりだ。」

すると何かの光が発生をしたので俺達は変身ベルトを装着をしようとしましたがそこにいたのは女の子である。

「さて転生者のみんなそろつているわね？」

「あなたは？」

「彼女は神エボルトだよ？」

「「「「な!?」「」」」

「といつても彼から生み出されたのだけどね？あなた達のおかげで、この世界にいた悪い転生者達はほとんどが転送されたわ。感謝をするわね？」

「だけどまだまだいるのか？」

「…………残念ながらね。本体の方は死ぬ思いで頑張っているけどね？」

(((神エボルトさん頑張つてください!!)))

全員でそう言うしかないわ…………彼は元々この世界の担当じゃなくてやつてしまつた神の変わりをしているそうだ。

「なんか神エボルトさんも大変なのね？」

「ああ今も必死に後始末に追われてかれこれ自分の世界に戻れていな  
い。全く…………この神の野郎…………めんどいことを残  
していきやがつて…………」

女の子なのに男言葉になつてているのだが…………そういうえば彼女は生み出されたから彼そのものと言つた方がいいんだよね。

「とまあ話はそこまでにしておくわ。さて本題ね…………あなたたちのおかげでフロンティア事件等も起きていないからいいわ。まあ物語としては進めないけどね？」

「「「あーーーーー」「」」

確かにルナアタックの時も神エボルトさんが入つて俺がデュランダルをダミーに変えたからな…………だけどあなたが来るつてことは何かあつたのですね？

「莊吉君その通りよ。厄介な転生者たちが6人もいることが判明をしたのよ…………」

「何？」

「そいつ等の前世は最悪最低、本当だつたら転生などもさせないほどに・・・・・・だけどその資料が回る前にここの神様は転生をさせてしまつてね？だから私も必死になつているのよねーーーーまあある子の力を借りているけどね？」

いつたい誰なんだろうか？しかも最悪最低の前世を持つものか・・・・・

莊吉 s i d e 終了

さて天界

「アリアちゃん悪いね？わざわざ天界まで呼んでしまつて」「気にしないでください。学園祭の準備に邪魔にならない範囲でしますから。でも、どうして私なんですか？」

「俺の部下で冥府の関係のカズマ君にはその転生者達を探してもらうためにあの世界へ行つてもらつているからだよ。それに君の星の本棚の力を借りたいからね。そのために君をこの天界へと呼んだわけ。と言うか、こつちも探し物が多すぎるからね」

「そうですか・・・・・わかりました。力を貸します。その代わりに、手伝いの報酬に翠屋のシュークリームをお願いします。居候先のエヴァとか、幻想郷のお姉ちゃん達に食べさせたいほど美味しかったので」

「ありがとう。それとそれくらいならお安いご用だよ」

戦兎は何時になつたら自分の世界へ戻れるのかなと思いつつ仕事をするのであつた。

## 現れし謎の仮面ライダー

莊吉 side

二課の名前がS・O・N・Gに変わった……って速くないか？訃堂さん曰く日本政府に提出をして俺達の活動範囲を全世界に広げたそうだ。どうやらこの世界の訃堂さんはなんでか知らないが翼達のことを孫のように見ており高齢でありながらも元気である。

総司令と言う立場なのであまり表に動くことができないはずなのにヒビキさん曰く翼達の合同コンサートに行つたらしく。弦十郎が変わりにナスター・シャさんと話をしたと言つていたが……丈夫なのだろうか？

改めてS・O・N・Gへと変えた俺達は出動命令を受ける。ノイズが現れたということらしいがなぜノイズが？と思ひながらも俺達は出動をする。

「師匠どうしてノイズが……」

「わからぬけどな……いずれにしてもノイズが出現をした以上俺たちは行かないといけない。」

俺達はリボルギヤリーに搭乗をして現場に到着、俺はダブルドライバーを装着をして桜花がサイクロンメモリを出して俺はショーカーメモリを出す。

〔サイクロン！〕

〔ジョーカー！〕

〔変身!!〕

〔サイクロン！ジョーカー！〕

サイクロンジョーカーへと変身をして他のメンバーチー達も到着をして俺達は交戦をする。

莊吉 side 終了

〔全く多いわねファイアーアー〕

〔バーストモード〕

デルタに変身をした蓮子はデルタムーバーに音声入力をしてトリガーを引き弾が放たれて撃破する。

【タドルクエスト——】

「は!!」

永夢はブレイブに変身をしてガシャコンソードを使いノイズを燃える剣で攻撃をする。その横をマツハに変身をした霧子がゼンリンシユーターを持ち攻撃をしていく。さらにマツハドライバーを開いてシグナルバイクをセットをする。

【シグナル交換！トマーレ！】

「あんたたちは止まりなさい!!」

【急にトマーレ！】

放つた弾丸が命中をしてノイズ達は止まつた。そこに切歌と調が鎌と鋸を使い切り裂いていく。

「は!!」

サイクロンジヨーカー形態に変身をするダブルは風を纏わせた蹴りを入れていく。そこにクリスがガトリングを放ち着地をする。

「ふいー多いなーーー」

「多いが大した数じゃない」

【確かに!!】

別の場所ロビンアギトはグランドフォームのまま攻撃をしてノイズを倒していく隣をマリアがガンニングニールの槍で突き刺していく。

「やるじやんあいつら!!」

「俺達も負けてられないな!!」

シユーティングウルフのバルカンに変身をしてアタツシユショットガンでノイズに攻撃をして彼の肩を踏み奏は槍を投げつける。

「おら!!」

さらにアタツシユショットガンをバルカンが投げたのをキヤッチをしてバルカンはショットライザーナイフを抜いて二人はダブルで攻撃をする。

奏は突き刺さった槍を回収をしてアタツシユショットガンを投げる。

【サンキュー】

バルカンは返されたアタツシユショットガンをキヤッチをして回

転させる。ナイトはマグナバイザーを使いノイズに攻撃、翼は走りだして脚部のブレードを展開をして回転蹴りをお見舞いさせてノイズを切り裂く。

「大丈夫か？」

「問題ないよ零斗…………だけど…………」

「どうしてこんなにノイズが？」

【キック、サンダー、ライトニングブースト！】

一方で一真はヒビキやメツクヴァラヌスを纏つた詩織達と共にノイズと交戦をする。

「なんでノイズが!?」

「弓美、そんなこと言っている場合じゃないよ!!」

「わかっているわよ!!」

「お嬢ちゃんたち落ち着きなって」

烈火弾を放ちノイズを燃やしていく響鬼、その様子を見ている二人の仮面ライダーはそれぞれでカードを装填する。

【アドベント】

響と信一も戦っているが突然として黒い龍が信一に体当たりをして吹き飛ばす。

「がは!!」

「信一!?」

「なによあれ!!」

ヘビみたいなのが三人に毒液を放つ。三人は回避をするとその場所が溶けているのを見る。

「なによあれ!!」

莊吉はメモリを変える。

【サイクロン・トリガー!】

サイクロントリガーへと姿を変えてトリガーマグナムを放つ。すると二人のライダーは着地をする。

「あれって仮面ライダーファームとリュウガ?」

「…………」

二人のライダーは武器を構えたりしてこちらに向かつた走つてくる

る。二人の狙いは響である。

「え!?」

「響!!」

信一はトリニティフォームへと変身をしてフレイムセイバーとストームハルバードを使いファムとリュウガの攻撃を塞ごうとしたが二人の斬撃などをくらつてしまいダメージを受けてしまい吹き飛ばされる。

「が!!」

「変身!!」

ロビンアギトは両腰を押してバーニングフォームへと変身をして燃える拳でリュウガに攻撃、さらにデルタ、ダブルのダブル射撃がファムに攻撃をして吹き飛ばす。

「・・・・・・・・・・」

「さて、どうする?」

ナイトがダークバイザーを突き付けるがファムはすでにカードを装填をしていた。

【アドベント】

赤いエイ型のエビルダイバーがナイトに体当たりをしてその上に二人が乗り撤退をする。

ノイズが消滅をして莊吉ことダブルは撤退をするファムとリュウガを見て今回の敵の狙いがわからない状態になる。

(相手の狙いは響ちゃんつてことなのか?だがなぜ・・・・狙う理由が不明だ・・・・)

莊吉はそう考えながらなぜ彼女が狙われたいのか・・・・戒斗もなぜ響が狙われたのかわからない状態である。基地へと戻ったメンバーたち弦十郎と訃堂は何かを話している。

「親父、今回の敵の狙いは・・・・」

「わしもわからん。なぜ響君を狙つたのか・・・・了子君はどう思うかの?」

「そうね———響ちゃんは完全融合者第一号だととしてもそこまで存在を知られていないわ。けれど相手はまるで響ちゃんを知っているか

のように戦ってきたってことね。」

了子もそのように言い、三人はなぜ響が狙われているかわからない状態である。シユミレーション室では信一が変身をするアギトがノイズ相手に殴っている。もっと力がほしい彼はノイズと戦っていると光弾が飛んできてそれを受けてしまう。

「ぐあ!!」

「そこまでだ」

現れたのは仮面ライダースカルである莊吉である。

「莊吉さん・・・・・・」

「体は休ませたほうがいいぞ信一君、いくらなんでもやり過ぎだ」「す、すみません・・・・・・」

「何か悩みかい?」

「はい・・・・・・」

信一は今の状態で響を守れるのかとそれで更なる力を発揮をしたいということを・・・・・・莊吉は話を聞きながらも彼に話しかける。「今は言えることは一つ。無理やりな訓練は君の体を壊してしまうからね。特に君みたいな若者が一番に壊れてしまう。」

「・・・・・・・・・・・・」

「今はゆっくりと考えるといいさ若者よ」

そういつて莊吉は変身を解除をしてシユミレーション室を去る。信一も休憩をしてから部屋を出ていく。

# 襲い掛かるファムとリュウガ

永琳 s i d e

私たちはパトレンジャーに変身をしてある場所に侵入をしている。桃華は何かを見つけてシャットダウンさせる。

「（）の警備システムを落としたわ」

「流石桃華!!」

「さーてここからは怪盗の出番よ!!」

私達はダイヤルファイターをまわして変身する。

「「怪盗チエンジ!」「

「ルパンレンジャー!」

ルパンレンジャーへと変身をした私達は突撃をしていきシステム等がダウンをしているおかげでここに保管されている場所までやつてきた。

「さーて開けるわよ?」

【アドベント】

「!!」

【ぐおおおおおおおおおおおおおお!!】

「あれって!!」

「ドラグブラッカー···」

「なぜ?」

私達は考えているとリュウガがドラグセイバーを振るつて襲い掛かってきた。私達は回避をして構える。

「あんたは何者かしら? アース結晶を狙っている感じかしら?」

「···」

「無言か···」

「どうする?」

「決まっているわ···邪魔をするなら倒すだけ!!」

私達に喧嘩を売ったこと後悔させてあげるわ!!

永琳 s i d e 終了

ルパンレンジャーの三人はV S チエンジャーを構えてトリガーを

放つ。リュウガはカードをブラックドラグバイザーにセットをする。

【ガードベント】

ドラグシールドが現れて三人が放った攻撃をガードをする。そのままドラグセイバーを振るい彼女達は回避をしてトリガーマシンをセットをする。

「「「警察チエンジ！」」「」

【パトレンジャー！】

パトレーンジャーへと変身をしてパトメガホーを構えて攻撃をする。リュウガは三人の連携に苦戦をしてパトレーン一号の弾丸がリュウガのボディに命中をする。

そしてトリガーマシンをセットをして構える。

【警察ブースト！】

「は!!」

パトレーン二号がバイカーをセットをして放つた弾丸がリュウガに当たり彼女達は構えていると突然としてサイが現れて三人を吹き飛ばす。

「うご!!」

「痛い!!」

「あれはメタルグラス・・・・」

その隣をファムが立つており二人は鏡を使い撤退をする。

「逃げられたわね。」

「大変!!アース結晶が!!」

「しまった・・・・さつきの奴等が・・・・」

パトレーンジャー達はこのままじゃまずいと思い逃げることにした。

一方で現場に到着をした莊吉達は早速捜査を開始をする。

「ふむ・・・・・・」

「師匠どうしました?」

「セキリティーシステムがダウンをしているつてことは相手はハツキングをしてこここのシステムをダウンさせたのは間違いない。しかも瞬時にだな・・・・」

「では・・・・お父さん犯人は?」

「…………わからん。しかも厄介なことにここで戦闘をしたつてのは間違いない…………ほらこの辺をよく見てみろ」

「これは弾丸を放つた感じだな…………ここで戦闘が行われたってことがわかる…………だが誰が？」

莊吉は誰がここで暴れていたのかわからぬため犯人を絞ること  
ができなかつた。だがここで戦闘が行われてここに保存されていた  
何かがとられたのは確かである。

(だがいつたい誰がここで戦闘をしたんだろうか?切った後などもあるからな……だがそれだけを見ても犯人はいつたい……)

卷之三

一七 単只

フエイトは戦兎に声をかけるが彼は机にぐでーと倒れているのを見て全員が苦笑いをしている。

「世  
斬にい? いつたいどうしたんや?」

セシ姫が、もと備仕事しかくない。

卷之三

「今戦鬼が天界の仕事が今は大変なことになつていてね・・・・・厄

介なことをしてくれたのよ・・・・・それを戦兎が処理をしている  
けど・・・・・終わらなくてね」

「あーなるほど・・・・・・」

今現在は仕事を一段落をして彼は自分の世界へ戻つてきているが

「はあ

「戦鬼お兄ちゃん、私達にも手伝えることがあつたらいいつてよ」

「ありがとう。お兄ちゃん、今日はお仕事あることあるからいいって」  
「ありがとうよなのは達、だが今は大丈夫だ・・・・少し眠るよ」

戦兎は疲れている体を休めるために目を閉じる。

## 未来の決断 戒斗の答え

未来 side

「ただいま——」

「お帰り響」

今日も響は現れたノイズと戦い戻ってきた。私は響が帰つてこれるよう待つている……でも詩織ちゃんや創世ちゃん、弓美ちゃんも戦っているのに私はここで何をしているのかな？

「…………」

「未来？」

「何でもないよ響…………」

いけないいけない……でも本当にどうしたらいいんだろうか……： そうだ戒斗に相談をしてみよう。

未来 side 終了

一方で荘吉達は現れたノイズを倒す為に出動をしていた。荘吉はエターナルに変身をしてエターナルエッジを振るつていた。

今回はクリスがベースとなつておりダブルヘッド変身をしている。

「おらおらおら!!」

風を纏わせた蹴りがノイズ達を切り裂いていき倒していく。一方で戒斗の方もバロンヘッド変身をしてバナスピアーアーを使いノイズを撃破している。彼は腰の戦極ドライバーのカッティングブレードを三回倒す。

「カモン！ バナナスパーキング！」

「はああああああああああああああああああ！」

地面にバナスピアーアーを突き刺してバナナ型のエネルギーがノイズを貫通させて撃破する。

「ふん…………」

バナスピアーアーを肩に担いで彼はノイズがいなくなつたのを確認をする。他の場所ではメンバー達が当たつているのを知つてゐるため彼は援護をするために向かおうとしたが未来が何かから逃げているのを見つける。

「未来？なぜあいつが……」

一方で未来は何かから逃げていた。彼女は数分前まで寮にいたが、鏡から突然として黒い龍が現れて彼女に襲い掛かってきたのだ。

【ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!】

「ひい!!」

「せい!!」

「マンゴーアームズ！ファイトオブハンマー！」

ドラグブラッカーを殴り彼は未来の近くに着地をする。

「か……戒斗？」

「無事みたいだな未来……さて……」

バロンは前を向いてドラグブラッカーを見ているとリュウガが現れる。バロンはリュウガを見てこいつが未来を襲わせたのかと……だがリュウガはバロン相手は不利だと判断をして撤退をする。

「逃げたか……」

彼はロックシードを閉じて戦極ドライバーを外して変身を解除をする。未来の方へ向き直す。

「大丈夫かみ

彼は言う前に未来が抱き付いてきたので戒斗は顔を赤くなつてしまふ。だが彼女は涙を流していたので怖かつたのだろうと判断をして彼は抱きしめる。

数分後未来が落ち着いたので彼女は顔を赤くして彼から離れる。「えつと戒斗その……」

「気にするな……だがなぜ未来が襲われたのか俺には分からない。」

「戒斗……お願いがあるの」

「お願いだと？」

未来は真剣な目を見て彼は納得をする。おそらく彼女も戦いたいと……だが戒斗としては未来には戦つてほしくない……だが彼もいつも一緒にいるわけじゃないのでもし先ほどのように襲われている時に何もできないでは戦うことができない。

「お願い!! 私にも響達みたいに戦う力がほしいの!!」

「未来……」

「私……不安になるの……響が戻つてこなくなつたらつて思うと……」

戒斗は懐から戦極ドライバー及び何かのロツクシードを出した。それはリングのマークとブドウ、キウイのモチーフにしたロツクシードである。

「お前に戦う覚悟があるのならそれで戦うといい……」

「戒斗……ありがとう」

一方でナイトはファームと交戦をしていた。突然としてファームが襲い掛かってきてウイングランサーを使いファームのウイングスラッシュヤーの攻撃をはじかせている。

「お前は一体誰だ!! なぜ俺達を襲う!!」

ファームは無言でナイトに攻撃をして斬撃がナイトのボディを切りつける。

「ぐあ!」

「…………」

「スイングベント」

エビルウイップを装備をしてナイトに攻撃をするがそこに氷の弾が放たれてファームは回避をする。

「フリージングベアー!」

フリージングベアーフормのゼロワンが現れてナイトの隣に立つ。

「大丈夫か?」

「助かった。」

「だがなぜファームが?」

「わからない…………突然として襲われたからな…………」

ファームは二人相手には不利だと判断、鏡を使い撤退をする。二人は変身を解除をしてノイズがないのを確認をする。

荘吉達の方もノイズがいなくなつたのを確認をして変身を解除をする。翼や奏とマリア達は仕事をしていいたので駆けつけられなかつた。一方で信一と響はメックヴァラヌス達と響鬼と共にノイズと交戦

をしていた。

「おりやああああああああああああああああああああ!!」

響の攻撃がノイズを撃破していく。信一アギトはストームフォームへと変身をしてストームハルバードを振るい切りつけていく。

ほかの四人も攻撃をしていきノイズ達を攻撃をして撃破した。

「流石シンフォギア装者に仮面ライダー、そしてメックヴァラヌスを使う者たちか・・・・」

「誰ですか!?

そこに立っていたのは黒いスーツを着た人物で彼は彼らの方を見ながら笑っている。

「だが俺には勝てないさ・・・・」

「何?」

彼は謎のベルトを装着をして何かを出す。

【ジ・エンド】

「変身!」

【お前達の運命はここで終わりだ!仮面ライダージ・エンド!】

「俺の名前は仮面ライダージ・エンド・・・・お前達はここでジ・エンドだ!!」

ジ・エンドは六人に襲い掛かる。弓美は弓を構えてエネルギーの矢を放つ。ジ・エンドは片手ではじかせると響と詩織、創世の三人が接近をして攻撃をする。

「甘いわ!!」

ジ・エンドは剣のマークが入った丸い宝珠を右手に装着をする。右手の装甲が変わり剣となりそれを振り三人を吹き飛ばす。

「「「うわ!!」」

「響!!」

「ジ・エンドね・・・・」

響鬼は冷静に烈火弾を飛ばして攻撃をする。ジ・エンドは剣ではじかせていきそのまま胸の装甲が開いてミサイルが発射される。

「「「「「うわああああああああああああああああああああああああああああ!!」」」

六人は吹き飛ばされて響達はシンフオギアなどが解除されて響鬼と信一も変身が解除される。

ふん

ジ・エンドはつまんないのかそのまま歩いていき響の首をつかんでいる。

一あか・・・・カカカカ・・・・】

「俺は原作などどうでもいい……人を殺せればな……」

一響・・・を・・・離セ！」

信一は立ちあがりボロボロの状態でオーダルリングを出して変身をしてアギトになるがボロボロの状態のため彼はジ・エンドの蹴りを受けて吹き飛ばされる。

すると信一アギトは光りだしてシャイニングフォームへと変わり、さらにそこからエクシードギルスの要素が合体をした姿へと変わり、そのままダッシュをしてジ・エンドに蹴りを入れる。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああ!!」

シャイニングエクシードはジ・エンドを襲っているが今の彼は理性を失つており背中のギルスステインガーがジ・エンドを襲うが彼は剣の宝珠を外して剣のマークの宝珠へと変えて装着をする。右手の装甲が銃の形へと変わりそれを発砲。シャイニングエクシードはそのまま食らいながらもジ・エンドに攻撃をする。

そのまま蹴りを入れてジ・エンドはダメージを受けたのか笑つてい  
る。

「貴様の力は見させてもらつた……だが今の状況で俺には勝てない……」

【ファイナルジ・エンド!】

ジ・エンドの左足にエネルギーが纏われて行きシャイニングエクシードに蹴りが命中をして爆発をする。

「が・・・・あ・・・・・・・」

そのまま信一は前に倒れてジ・エンドはふんといいながら信一にとどめを刺そうとしたときに鞭が飛んできて彼の右手に絡ませる。

「ぬ・・・・・・・・・」

【ルナ！メタル！】

「お前はいつたい・・・・・・・・・」

「ほーう仮面ライダーがまだいるとはな・・・・・・・・・覚えておくがいい・・・・・・・・・我が名は仮面ライダージ・エンド・・・・・・・・・また会おう」

右手の銃を放ちダブルとエターナルは煙を消すがジ・エンドは消えていた。

「ジ・エンド・・・・・・・・・一体何者なんだ？」

ジ・エンド side

「・・・・・・・・これで良かつたのか？神工ボルト・・・・・・・いやイクト

ト」

そういうつて俺の前に現れたのは前世の友達である紅 イクトだ。まさか神様になつているとは思つてもいなかつたが・・・・・・・・・「サンキュー明人、まさかお前が死ぬなんて思つてもいなかつたけどな・・・・・・・・・

「俺からしたらまさか永琳達もこの世界にいるとは思つてもいなかつたがな？だがお前は俺を生き返らせてあいつらを鍛えてくれと頼まれたときは驚いたぞ？」

「明人・・・・・・俺は神さまとしてこの世界にあまり干渉をするわけにはいかないんだ。いずれにしても彼ら自身で勝つていかないといけないからね。」

なるほどなイクトらしいなその答えは・・・・・なら俺もお前の友として答えるさ。寺井 明人として俺が考えてくれた仮面ライダージ・エンドを具体化させてくれたことに感謝をして。

「それでイクト、お前が言つていた仲間はいつぐらい来るんだ？」

「来るよ？ほら

「ほら？」

イクトがほらと言つたら空からダイヤルファイターが三機来たん  
だけど?しゅたつとなんか女の子達三人が降りてきたつてえ!

「あらイクト君、私たちを呼んだのはいつたって明人!?」

「明人じやないか!!」

「本當だ明人君だああああああああああああああああああああ!!」

永琳は柳華に麗華いやないか まうかイクトお前が語っていた何間  
とは・・・・・」

「そうた彼女達のことだぞ？…………そして俺もそのメンバーとして入らせてもらう。ただし!!」

イクトは手を前に出すと魔法陣が現れて女の子が出てつと着地をした女の子は振り返りイクトの隣に立つ。

「性別が変わつてしまふけど俺（私）だからね？」

のイクトは見ている。

「どうしたの？」

いやイクト君なんだよね？」

ええその通りよ？彼自身でいいともおかしくないわよ】

「俺も同じだ。アリス達も元気にしてるのかが多分分かる。

「ええあつちでは前世・・・・・つまり私たちの

「またのよ

二〇〇〇年

俺達が驚いていた前世…………つまり俺達が住んでいた世界が

「さーて始めましょ？私たちファイブストリウムの活動よ」

「どう、どう、どうやね、?」  
「スティーブトーマスにて(笑)」

「サウズウェーブつてのも作つたのもイクト君だからね。」

「そうだったな。」

つて仮面ライダー二人にスーパー戦隊三人つてなんだか違う感じがするな・・・・・そういえばイクト。

「何？」

「その姿でもイクトつて呼べばいいのか？」

「……………そういうえば考えていなかつたわ。なら名前を変えるとするわ？皆私のことは如月 杏奈と呼んでほしいわ」

「「「杏奈・・・・・・」」

とりあえず俺達ファイブストリウムの活動目的はアース結晶の回収及びシンフォギア装者と関わる彼らの戦力拡大が目的ということだ。言えば強くさせるつてことらしい。

「さあ始めるわよ？ファイブストリウムの結成よ！」

さあランチタイムだ!!

杏奈がジ・エンド及びルパンレンジャー達と新たなファイブストリウムを結成させた頃、戒斗は未来と特訓をしていた。

「いくぞ」

「うん!!」

お互に戦極ドライバーを装着をしてロツクシードを構える。

【オレンジ】

【リング】

【ロツクオン!】

【変身】

【ソイヤ! オレンジアームズ花道オンステージ!】

【カモン! リングアームズ! デザイア・フォビドゥン・フルーツ!】

二人は仮面ライダー鎧武、仮面ライダーイドゥンに変身をして鎧武は大橙丸をイドゥンは専用の盾「アツブルデイフエンダー」から剣「ソードブリンガー」を抜いて構える。

「先行はお前に渡そう未来」

「なら遠慮なくはああああああああああああああああ!!」

イドゥンはソードブリンガーを構えて鎧武に襲い掛かる。彼は大橙丸で彼女がふるつた剣をガードをする。ガキンという音が響いてイドゥンは連続した攻撃を鎧武にしてくる。

鎧武は冷静に大橙丸で彼女が振るうソードブリンガーをガードをして腰に付けている無双セイバーを抜いて銃口から弾が放たれてイドゥンに放たれる。イドゥンはアップルディエンダーでガードをしてからいったん後ろの方へと下がり姿を変える。

【ブドウ! ロツクオン! カモン! ブドウアームズ! 龍・砲・ハツハツハ!】

仮面ライダーアイドゥンブドウアームズへと変身をして装備されたブドウ龍砲のトリガーを引き鎧武に攻撃をしてくる。

鎧武は二刀流でブドウ龍砲の弾をはじかせてからロツクシードを変える。

「イチゴ！ロックオン！ソイヤ！イチゴアームズシュシュツスパーク！」

イチゴアームズへと変身をしてイチゴクナイを投げつける。イドウンはブドウ龍砲で相殺をしようとするが鎧武は次々にイチゴクナイを投げつけてイドウンを翻弄させていく。

「く!!」

「ああああああああああああああ!!」

「ソイヤ！イチゴスカッショ！」

イチゴクナイを大量に投げつけた後そのまま走つていきイチゴクナイを二個持ちそのままイドウンのボディを切りつける。

「ぐあ!!」

イチゴクナイをつきつけた後変身を解除をする。イドウンの方も解除をして座りこんだ。

「ふう・・・・・・」

「お疲れだな」

「まあね響に内緒で戦うからね。」

「ばれたら一緒に謝つてやる」

「ありがとう戒斗」

戒斗に立ちあがらせてもらい未来はじやあ帰らないとといい寮の方へと帰っていく。彼女がいなくなつた後彼は振り返る。

「さて俺を見ていたんだろ？でてこいよ」

現れたのはファムである。戒斗は模擬戦をしている時から誰かがこちらの見ているのを感じていたので彼女を返したのである。

「何が目的か知らないが・・・・未来に手を出すつて言うなら俺は容赦はしない」

彼は戦極ドライバーではなくゲネシスドライバーを出して装着をする。

「レモンエナジー」

「変身」

「ロックオン！ソーダ！レモンエナジーアームズ】

仮面ライダーバロン レモンエナジーアームズへと変身をしてソ

ニックアローを構える。ファムも腰のブランバイザーを抜いて構える。

「…………

「無言か…………」

ファムはダッシュをしてブランバイザーを振り下ろして攻撃をする。バロンは冷静にソニックアローを使いブランバイザーの攻撃をふさぐ。

「なぜ未来を狙う。待てよこいつは…………リュウガも一緒だったな…………まずい!!」

戒斗は気づいたがファムはカードを装填させる。

【アドベント】

赤いエイ型のエビルダイバーがバロンに体当たりをして吹き飛ばして彼を行かせないようにしている。

一方で未来は寮の方へと帰ろうとしたがリュウガが目の前に現れた。リュウガの後ろにはドラッグラッカーがおり彼女を狙っているように構えている。

(どうしてここに…………)

リュウガは構えていると突然として光弾が飛んできて二人は飛んできた方角を見ると一人の女性が立っている。

「おーーー女の子を狙うなんて最低なことをしているわね!!」「えつと?」

「まあみなまで言うなってことよよいしょ!!」

彼女は着地をして未来の傍に行く。リュウガはカードを装填をして武器が現れる。

【ソードベント】

「ここは逃げてください!!」

「あー大丈夫大丈夫、私も戦えるからさ」

彼女は何かをするとドライバーが現れる。

【ドライバーオン!】

そして左手にリングをはめて構える。

「へーーーんしん!!」

そのまま腰部のベルトにリングを刺す。

【セット！オープニング・L・I・O・N ライオン！】

彼女の姿が変わり仮面ライダービーストへと変身をする。

「変わった！」

「さーてランチタイムよ!!」

ダイスサーベルを構えて突撃をしてリュウガに攻撃をする。リュウガはビーストが現れたことに動搖をしているのは彼女が振るうダイスサーベルの攻撃を受ける。

【ストライクベント】

リュウガは未来にターゲットを変えて彼女にドрагクローファイアーを放とうとした。

「させないわよ？」

ビーストは右手のリングをカメレオンがかかれているのに変えてベルトに装着させる。

【カメレオ！ゴー！カカツ、カツカカツ カメレオー！】

右手にカメレオマントを装着をして右肩のロープで未来を自分の方へと引っ張りドラグクローファイアーが外れる。

「うわ!!」

「よつとさーて今回の運勢はつと」

彼女はダイスサーベルをまわしてルーレットのようにまわしている。そしてカメレオリングをダイスサーベルにセットをする。

【5！セイバーストライク！】

「運勢いいわね!!そーれ!!」

五匹のカメレオン型のエネルギーが発生をしてリュウガに向かって飛んで行きそのまま突撃が命中をして爆発をしてリュウガが吹き飛ばされる。

「さーてどどめを刺すとしようかしら？」

リュウガは不利だと判断をして鏡の中へと消える。

「あー逃げられちゃった。」

ビーストは振り返り変身を解除をして未来の方へと歩く。

「大丈夫だつたかしら？」

「はい大丈夫です・・・・・・あなたは?」

「私は仁藤 恵子よ。それじゃあまた会う日までバイばーい」

【テレポート ゴー!】

「あ・・・・・・」

「未来!!」

「響・・・・・・」

「大丈夫ミックー!!」

「襲われたと聞いて駆けつけましたわ!!」

「えつと大丈夫だよ。仮面ライダーに助けてもらつたの」

「莊吉さん達かな?」

「ううん莊吉さんたちじやないよ・・・・・・えつと仁藤 恵子さんつて名乗つていたよ」

「仁藤 恵子さん?」

「誰なんだろう?」

四人はシンフォギア及びメックヴァラヌスを解除をして未来が無事だつたのでホツとする。

一方でテレポートをした恵子に弾丸が飛んできて彼女はミラー ジュマグナムで相殺をする。

「ふ・・・・・・」

「勝手な行動をするなつてあれほど言つただろうが・・・・・・さがしてたぞ? 恵子」

「あらあなたが来るとは思つてもいなかつたわよ了?」

彼女に攻撃をしたのは正木 了だつた。彼はよいしょといいながら着地をして彼女に近づいてキスをする。

「やれやれ・・・・・・まさかお前と再び再会をするとは思つてもいなかつたぞ? 麗子」

「それは私もよ政樹」

恵子と了の関係はかつては前世では夫婦だつた二人。だが二人は交通事故に巻き込まれて死亡・・・・・・神エボルト事如月 戰兎は目を見開いた。

「え?! 政樹さんに麗子さん!?」

「ん？」

「イクト君!？」

「そう神エボルトこと紅イクトと知り合いだつたのだ。

「まさかイクト君が神様になつているとはな驚いたぞ」

「それは俺の台詞です。まさかお二人が・・・・・だが・・・・・」

「どうしたの?」

「・・・・・お二人はシンフォギアつというアニメを知っていますか?」

「もちろん知つてゐるぞ?俺もよく見ていたからな」

「それがどうしたのかしら?」

「現在その世界に色々な転生者たちが転生されましてそれそれで色々なことをしようとしていることがわかつたんです。本当だつたら俺がその世界に行き転生者たちを転送をするはずだつたのですが・・・・・なにせこの神さまがやつてくれた後処理などをしないといけないので・・・・・」

「よしわかつた!!俺達がその転生者たちをやつちまえばいいんだな?」

「まあそなりますね・・・・・それじゃあとりあえずこのシートに何がいいのか勝いてもらえませんか?一応用意などはできますので」「おうありがとうよ!」

「ならどういうのにしようかしら?」

数分後

「できた!!」

「はい確認します」

エボルトは二人からもらつた紙を見てふむふむと頷いてから置いてOKサインを出す。

「それで麗子さんの方がビーストでウイザードリングをビーストのリング風に使えるようにしてくれつてことですね?まあそれぐらいならできますよ」

「ありがとうございますイクト君」

「それで正樹さんはウイザードで鍊金術も使えるようになつてこと

ですね

「おうよ!!」

そして二人は転生をしたのはいいが・・・・なんとだいぶ昔のほうに転生をしたのである。戦兎も忙しくて彼女達の転移場所の時間軸を間違えてしまつたのである。

そこから彼らはサンジエルマン達を助けたりして今に至る。

「それで何かわかつたか？」

「残念ながら答えはNO・・・・なぜリュウガが未来ちゃんを狙つたのかは不明よ？」

「そうか・・・・いずれにしても俺達はまだ表で動くわけにはつてお前は動いたんだつたな・・・・」

了は呆れながらも恵子を見ていると彼女は気づいているようなりでウイザードライバーを放つ。

「さて俺たちを見張つているのか知らないが誰だ?」

「へえー私たちのことわかる感じなんだね?」

五人の人物が降りたち了と恵子は構える。ビルの屋上にてにらみ合う五人。二人の人物はベルトを装着及び発生させて構える。

了と恵子もウイザードライバーとビーストライバーを出して変身がいつでもできるようにしている。

三人の人物は鏡に何かをセットをして五人は姿が変わる。

「変身!!」

「「警察チエンジ!!」

「パトレーンジャー!!」

「ラビットタンク! イエーイ!」

「仮面ライダージ・エンド!!」

「変身をしただと? なら俺達も!!」

「変身!!」

「フレーム!」

「L・I・O・N ライオン!!」

ウイザード及びビーストに変身をしてビル達の方を見る。ビルドはドリルクラッシャーを構えておりパトレーンジャーの三人は鏡を

ジ・エンドは拳を構える。

「さあシヨータイムだ!!」

ウイザードは走りビーストはダイスサーベルを構えてビルドに襲い掛かる。ビルドはドリルクラッシャーでガードをすると左からジ・エンドが攻撃をしようとしたが弾丸が飛んできて命中をする。

「!!」

パトレンジャーの三人は1号がパトメガホーを構えてほかの二人はV.S.チエンジャーを使い攻撃をしてきた。

【ディフェンドプリーズ!】

炎の壁を発生させて2号と3号が放つた弾丸をガードをしてさらに指輪を変えて立つちさせる。

【ビッグプリーズ!】

魔法陣に手を伸ばすと手が大きくなり3人を吹き飛ばす。

「「きやああああああああ!!」」

「!!」

ジ・エンドは3人を援護するために足部に弾をセットをする。

【マッハ!】

「私を無視をするなんていい度胸じゃない!!」

ビーストは指輪を変えてセットをする。

【バインド!ゴー!】

だがその前にビルドが姿が変わる。

【キードラゴン!イエーイ!】

左手のロツクハーフボディから鎖が発生をしてビーストが放とうとしたバインドをガードをする。

ウイザードはフレームドラゴン形態へと変身をしてコピーを使いウイザードガンをコピーしてパトレンジャー3人に攻撃をしているとジ・エンドが入りこんでボディに拳が当たり吹き飛ばされる。「ぐ!!」

パトレンジャーの3人は構えていると上空から弾丸が放たれて3人は回避をする。

「そーれ!!」

光弾が放たれてジ・エンドにダメージを与える。

「無事だな」

「お前らどうしてここが？」

「あーらー？ 私たちを愛する人がどこにいるのかわかつて当然じやない」

カリオストロの言葉にサンジエルマンが頷いている。プレラー  
ティのけん玉がビルドに当たりビーストは驚く。

「あらプレラーティじやない」

「大丈夫なワケダ」

「ジ・エンドショット！」

ジ・エンドの右手に銃が発生をして高エネルギー弾を放つた。ウイ  
ザードは立ちあがりスラッシュユストライクを発動させるためにソーサーを開く。

「スラッシュユストライク！」

十字にしてジ・エンドが放つた攻撃をガードをする。ビルドの方は  
青い炎を放ちビーストが斬りその間に爆発がして煙が辺りに発生す  
る。

「しまった!!」

煙がはれたがすでに5人の姿は消えており了達は撤退をすること  
にした。一方で撤退をした5人は変身を解除をする。

「いたいた・・・・・・」

「あのおっさん強すぎます!!」

「杏奈お前は知っているのか？」

「ええ知っているわよ・・・・・なーにせ前世で言えばあの人私たち  
の先生をしていた人よ?」

「「「先生・・・・・・」」

「中島 政樹先生だよ」

「「「政樹先生!」」

4人は驚いている。政樹という単語を聞いて・・・・・・

「ま、まさか政樹先生まで転生をしているなんてよ・・・・・・・・

「あれが政樹先生なの!?」

「そういうこと私もさつき本体から連絡を受けて驚いているのよ」「ふーむ・・・・・」

「どうやらあつちもファムとリュウガが何をするのか調べている感じね？さて私はこれをいつ渡そうかしら？」

「それってシンフォギアの？」

「そう神鏡獣よ・・・・・忘れていると思うけど響ちゃんのギアは通常とは違うってこと忘れていない？」

「あーーーそうだつた!!」

「そういうことよ・・・・・だからこれを渡さないとまずいことになるわよ」

杏奈はそういうながらファムとリュウガに気を付けないとねと思いつつ見ていくのであつた。

## 莊吉に襲い掛かるジ・エンド

莊吉 s i d e

俺は朝早く起きていつも通りに動きやすい格好をして外へと出る。ロストドライバーも念のために持つており家を出て走りこむ。走りながらも原作のことを考えているが……この世界は原作とかないからな……シンフォギアの世界だがマリア達がテロをしていないのを考えたら……今考えることは響ちゃんだ。

彼女はギアを纏っている以上ほかのみんなとは違いペンドントがないからな。このまま戦い続けたら……と考えていると俺はロストドライバーを装着をして誰かが現れたので警戒をする。

「…………」

「お前は…………」

「ジ・エンドだ。左 莊吉だな？」

俺の名前を知っている……俺はスカルメモリを出してロストドライバーに装着をする。

「変身」

「スカル！」

スカルに変身をしてスカルマグナムを構える。

「さあお前の罪を数えろ」

莊吉 s i d e 終了

スカルに変身をした莊吉の前に現れたジ・エンドは丸い弾を右手にセットをする。

〔ガン〕

右手の装甲に銃が生成されて行き構えて発砲をする。

「！」

スカルは回避をしてスカルマグナムを放ち攻撃をする。ジ・エンドは後ろの方へと下がり構えた銃から弾を発砲をしてお互に射撃攻撃で相殺をしていく。スカルはこのまではきりがないなど走つていき接近をする。

ジ・エンドは銃を解除してスカルの蹴りを両手でガードをする。そ

のままスカルは追撃をしようとしたがジ・エンドは加速装置を使いスカルマグナムの弾を回避をする。

一 消えた？ どあ！！

加速装置で素早くなったジ・エンドの攻撃をスカルは受けてダメージが与えられる。彼はメモリを出してマキシマムスロットにセットをする。

【アケセル マギシマムトテイア!!】

アクセルのマキシマムドライブを発動させて加速装置をしているジ・エンドのスピードに対抗をする。

二十一

スカルマグナムを放ちジ・エンドのボディに弾丸が命中をする。スカルはそのまま追撃をしようとした時に光弾がスカルのボディに命中をする。

卷之三

【ホークホーク！ヤベーイ！ビューン！】

現れたのはビルドであるが莊吉の記憶にホークホークというフォームは聞いたことがない。ホークホークのビルドは右手に持つ

スカルは回避をして構えたがジ・エンドが前から攻撃をしてきたので二対一の戦いをしていると弾丸がホークホークに当たり見て『なんとか間に合つたみたいだな?』

ア銃で攻撃をしたのだ。 ドライブに変身をする泊 霧子である。 ドライブに変身をしてド

「大丈夫ですか？」

「ありがとう助かつたよ。ビルドの方は任せてもいいかな？」

「ジヨーカー！」

「變身!!」

【ジョーカー!】

仮面ライダージョーカーへと変身をしてジ・エンドに突撃をする。一方でビルドと戦うドライブはハンドル剣とドア銃を持ち攻撃をする。

ビルドは回避をして空を飛び攻撃をする。

「空に飛ばれると厄介だわ」

『だがこちらは空を飛ぶことができない・・・・』

ビルドはそのまま攻撃をしようとした時に槍が放たれてビルドに命中をする。

「?」

【フライングインパクト!!】

「はああああああああああああああああああああ!!」

ゼロワンがフライングインパクトを放つてきたがビルドは回避をして攻撃をする。

「ぐあ!!」

「大丈夫か或歩!!」

「なんとかね。」

一方でジョーカーは攻撃をしてジ・エンドに連続したパンチをお見舞いさせていた。

「流石と言つた方がいいな・・・・」

「さーてお前たちはいつたい何者なのか答えてもらおうか?」

「答えるものなどない!!」

だがそこにビルドが着地をしてジ・エンドはビルドを見る。するとビルドは何かをジョーカーに投げつける。彼はキャッチをするとビルドはジ・エンドと共に撤退をする。

「これは?」

彼はビルドが投げたのをキャッチをしてドライブ達が駆け寄る。

「大丈夫ですか?」

「ああ助かつた」

お互に変身を解除をして莊吉はキャッチしたものを見ている。「それってあたしたちが使用をするシンフォギアのペンダントじゃな

いか?」

「これがシンフォギアの…………だがなぜ?」

莊吉はビルド達はいつたい自分たちの味方なのかそれとも敵のかがわからない状態になつていた。

一方で変身を解除したビルドとジ・エンドはふふと笑つてゐる。

「第一目標であるシンフォギアを渡すは成功をしたわ。」

「だな、永琳達の方は大丈夫だろうか?」

「心配いらないわよ。上手く接触をしてくれてゐるはずよ?」

その永琳達はある場所に來てゐる。そこは了達鍊金術師達が拠点としている城である。

「ここみたいね?」

「ええ」

「なんというか…………囮まれていない?」

三人は現在サンジエルマン達を始め鍊金術師たちに囮まれていた。

「お前たちここに何の用で來た?」

「言わないと少しだけ痛い目に合つてもうわよ——?」

「痛い目にね…………」

彼女達はV.S.チエンジャーを出したのを見てプレラーテイはあれはというと彼女達はダイヤルファイターをセットをする。

「「怪盗チエンジ!」」

「ルパンレンジャー!」

ルパンレンジャーに変身をした三人を見てサンジエルマン達はファウストローブを纏う。

「お前たちはあの時の怪盗か…………」

「なら余計に逃がすわけにはいかないワケダ!!」

三人は構えていると了と恵子が現れる。

「なーにやつてゐる!!」

「了!!こいつらこの間の怪盗よ——!!」

「怪盗だ?確かに…………だがお前らなんでここに來た?」

「簡単よ正木了、あなたと同盟を組みたくて來たのよ?」

「同盟だと…………わかつた話を聞こう」

「「「了!」」

「だがまでは変身を解除をしてもらおう?」

「わかつたわ」

三人はルパンレンジャーを解除をしたのを見て了は武器を降ろす  
ように指示をしてサンジェルマン達もファウストローブを解除をする。

了はルパンレンジャーの三人と話をするために恵子だけを中心いて結界を張る。

「さてそろそろお面を剥がしてもらつてもいいか?」

三人は仮面を外して二人は目を見開いた。

「お、お前達!?

「嘘・・・・・・・・」

「お久しぶりです政樹先生」

「お前たちだつたのか・・・・・ルパンレンジャーに変身をしていた  
のは・・・・・・・・・・・・・・」

「はい政樹先生」

「まさか政樹先生まで転生をしているなんて思つてもいませんでした。」

「それは俺達の台詞だ。生徒だつたお前たちが俺達より先に死んでいるなんて思つてもいないさ・・・・・まあイクトに関しては俺も信じられなかつたが・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

「さて改めて俺達に用があるのはなんだ?」

「先生・・・・・・・・」

永琳は何かを了に渡す。彼は確認をして中身を見る。

「・・・・・・・これはイクトからか?」

「はい、私たちはあなたたちと同盟を組みたくてやつてきました。」「なるほどな、お前たちもあの結晶を集めているが拠点などを転々としているつてことが・・・・・・いいだろう元お前たちの先生として付き合つてやる!!いいだろ?」

「全く決めるのはあなたよ?私はあなたについていくだけ」

「ありがとうございます先生」

「言つておくが、ここで先生は言うなよ？今の俺の名前は正木 了つて名前なんだからよ」

「わかりました」

「了解っす！」

了は結界を解除をして彼女達が帰った後に同盟を組んだ話をする。

今回の結晶のこともありサンジエルマンたちも納得をする。

一方でカズマは？

「レーザースナイパー！！」

ファムとリュウガ二人に攻撃をしているが二人は回避をする。

「お前たち一人を逃がすわけにはいかない！！ここでけりをつける！！ツインブレード！！」

ツインブレードを出して二人に切りかかる。ファムとリュウガはブランバイザーとドラグセイバーで攻撃をするが戦兎と同様に戦い続けてきたカズマにとつて二人のライダーの剣技は見得るも当然で二人の武器をはじかせてとどめを刺そうとした時に衝撃を受けて吹き飛ばされる。

「ぐあ！」

カズマはいつたい誰が吹き飛ばしたと見ると右手を構えている人物がいた。カズマは突然として自分に襲い掛かつてきた謎のライダーと交戦をする。

そのライダー？みたいな敵はカズマが放つツインブレードの攻撃を交わしてそのままお腹に剛腕をお見舞いさせる。

「がは！！」

「…………」

敵はファムとリュウガに逃げろと指示を出して二人は逃げだす。彼はカズマにとどめを刺そうとした時キックが放たれる。

「ああああああああああああああああああ！！」

「！」

蹴りを左手で受け止めて放つた敵をはじかせる。その相手は着地をしてカズマの隣に立つ。

〔ラビットタンクスパークリング！ イエ—イイエ—イ！〕

「エボルトさま・・・・・・」

「大丈夫かいカズマ君。さて俺の部下に手を出したのはお前だな？ 悪いが覺悟はできているな？」

ドリルクラッシャーを出して構えているが、相手は本を出して何かを書きだすと現れたのはゼロノスとイクサの二人が現れる。

「何？」

敵はそのままホールを開いて撤退をして戦兎は構える。カズマも立ちあがりゼロノスとイクサを見ている。

「さてカズマ君はゼロノスを頼む、俺はイクサを叩く」

「了解です」

二人は突撃をしてイクサとゼロノスに攻撃をする。イクサはイクサカリバーを使いビルドに襲い掛かるが彼はドリルクラッシャーで受け止める。

（あの敵は一体何者なんだ？ 本からイクサとゼロノスが現れて……だがまずは目の前の敵を倒すのみ!!）「ナハト!!」

「は!!」

彼の合図にナハトが現れてパイルバンカーでイクサを殴り吹きとばす。その間にビルドはコズミックカリバーを出してそのまま切りつける。

そしてフルフルと剣フルボトルを挿入をして構える。

〔R e a d y G O ! ボルティックフラッシュ!!〕

「はああああああああああああああ!!」

放たれた攻撃がイクサに命中をして爆発をする。一方でカズマの方はゼロノスがボウガンモードへと変えて攻撃をしてきた。彼はツインブレードではじかせてレーザースナイパーで攻撃をする。

「許さん!!」

カズマの怒りが爆発をして構える。

「ツインブレード!!」

そのままブレードの刀身が伸びてゼロノスを突き刺してそのまま走り抜いてから必殺技を放つ。

「アーケインパルス!!」

アーケインパルスが命中をしてゼロノスが爆発をする。二人は敵がいなくなつた後解除をする。

「申し訳ありませんエボルトさま、奴らに逃げられてしまいました・・・・」

「いや気にはしないよカズマ君、だがあの敵はいつたい何者なんだ？本を出したと思ったら仮面ライダーが出てきたしそれに次元ホールを開けて逃げるか・・・・」

戦兎は先ほど交戦をした敵を思いながら引き続いてカズマは彼らを探すといって去つていったあと彼は次元の扉を開いて天界へと戻る。

## ファムとリュウガの正体

エボルトとカズマがファムとリュウガを助けた相手が出したゼロノス及びイクサを倒した頃、SONGはノイズが出現をしたといつて出撃をする中両手を組んで何かを考えている訃堂を見て弦十郎は声をかける。

「どうしたんだ親父両手を組んで」

「…………いや何か嫌な予感がしての…………ほれ」

訃堂は自身の履いている下駄の紐がちぎれているのを見せる。弦十郎はまさかとモニターの方を見ている。

「何事もなければよいが…………」

その現場ではリボルギヤリーに全員が搭乗をして現場に到着、クリスと桜花はダブルに変身をして彼自身はスカルに変身。

零斗はナイト、或歩はゼロワン、響鬼にカリス、ダブルアギトにファイズ、ドライブにエグゼイドと仮面ライダー集結をしておりノイズを倒していく。

響はダッショウをしてノイズに対して剛腕をぶつける。未来が変身をした仮面ライダードウンに変身をして響の隣に立つ。

「未来ごめん」

「気にしないの…………とりあえずこの数はいつたい？」

一方でダブルはルナトリガーへと変身をしてスカルのスカルマグナムと共に発砲をして撃破する。

翼たちもこのノイズの数に驚きながら戦う中大きな白鳥が襲い掛かる。

「「うわ!!」」

メックヴァラヌスを纏う三人に白鳥が体当たりをして吹き飛ばした。プランウイングが現れたと思つたらベノスネーカーにエビルダイベー、メタルゲラスにドラグブラッカーまで現れて二人のライダーが現れる。

「あいつらは…………」

ファムたちは襲い掛かり響に攻撃をしてきた。スカルたちは彼女

を守るために仮面ライダーと交戦をする。

一方でその様子を見ている杏奈たちファイブストリウム。

「あれって」

「私の本体が追いかけている奴らで間違いないわね・・・・まあ今回は私達は参戦をせずに様子を見ましよう」

杏奈たちは上から様子を見ている。ファームと戦うのはスカル、ダブル、ゼロワン、ナイト、アギト（信一）のメンバーである。

「は!!」

スカルマグナムから弾が放たれてファームはプランバイザーではじかせるとゼロワンとナイトがダークバイザー及びアタツシユカリバーで切りかかる。

【クリアーベント】

「何!?」

ファームが消えて彼らは辺りを見ていると突然として斬撃を受けて二人は吹き飛ばされる。

「はああああああああああああ!!」

ストームフォームへと変身をしてストームハルバードを使い風を発生させる。ダブルはヒートメタルへと変身をして炎の纏わせて弾のようにして飛ばしてファームに命中をする。

リュウガの方はファイズ、エグゼイド、ドライブ、アギト（ロビン）カリス、バロン、響鬼が当たる。

リュウガはドラグブラッカーを使いエグゼイド、ドライブを吹き飛ばした。

アギト（ロビン）はフレイムフォームへと変身をして二刀流で切りかかる。リュウガはドラグシールドでガードをするとファイズ、カリスがファイズフォンとカリスアローを構えてリュウガのボディにダメージを与えた後響鬼が音撃鼓をセットをして音激棒烈火を構える。

【さーて音激打 爆裂強打の型!!】

一気に叩いてリュウガを吹き飛ばした。一方でファームの方もスカルがスカルメモリをマキシマムスロットにセットをする。

【スカルマキシマムドライブ!!】

「であ!!」

骸骨型のエネルギーをファムにぶつけてファムも吹き飛ばして一人の変身が解除される。

卷之三

「おの子たちは！」

卷之三

卷之三

「くそ!! ばれた!!

スカルたちよ夢

女達のことも調べている。

「…………そういうことが、この子たちはあの事件の際に響ちゃん

「ノルマニシス」

信一は彼女達を殴ろうとしたがその時に次元ホールが開いて謎の

假面之歌

• •

彼は本を出して何かをすると本が光りだ

彼は本を出して何かをすると本が光りだして現れた仮面ライダーはライアにガイが現れる。その間に二人は回収されて次元ホールに消える。

—  
くそ  
！

今はあいこらをどうにかしないと！

再び夢見をし、おとしが時に「かに雷鳴が発生」をしてアーティ

「なんだ？」

杏奈たちも、一体何があつたと上空を見ると杏奈は驚いている。

・・・・・あれはグレートマジンガー?なぜ?

グレートマジンガーは上空から着地をする。ガイとライアはグレートマジンガーに驚きながらもダッシュを以てメタルホーンとエビルウイップで攻撃をしようとしたがグレートマジンガーのボディ

には効かずに二人の武器が折れる。

グレートマジンガーは両手を前につきだすと両手が発射される。グレートマジンガーの武器の一つアトミックパンチである。

アトミックパンチは二人に命中をしてそのままグレートマジンガーに戻り胸部の放熱板が光りだす。

「あの技は……」

放熱板から強烈な熱光線「ブレストバーン」が放たれて二人のライダーは爆発をする。グレートマジンガーは彼らの方を見てからスクランブルダッシュを出して空へと消える。

「…………グレートマジンガー…………」

「響!!しつかりして響!!」

「あああ…………あああああ…………」

響が先ほどから震えている。弓美たちも声をかけているが響は震えが止まらない。莊吉は響に手刀をして気絶させる。

「師匠…………」

「トラウマなんだろうな…………彼女にとつてあの二人は…………」

一方で正体がばれた二人は謎のライダーの前に座っている。

「ちいあいつらにばれてしまつたわね」

「ああだがどうする?」

「決まつているじゃない…………また行くのよ…………あいつが幸せなのは許せないじやない?」

「そうね…………」

すると謎のホールが開いて彼女達を助けたライダーが現れる。

「またあんた?」

「………………………………」

「何よう!!」

突然として謎のライダーはファムに変身をしていた人物の首を絞め始める。そのまま投げ飛ばすとリュウガに変身をしている女性を蹴り飛ばした。

「がは!!」

「……………………」

「てめえ!!」

「変身!!」

ファームとリュウガに変身をして謎のライダーはホールを出現させて武器を出す。彼はそのリボルバーである。彼は発砲をしてリュウガとファームのボディに命中させてダメージを与える。

「…………」

「てめえ!!」

謎のライダーは回避をした後ホールを出して二人の前から消える。果たして二人を助けて攻撃をするライダーは何者なのか？そして現れたグレートマジンガーの正体は!!

## 響のトラウマ

謎のライダーの妨害などもあり荘吉達はSONG基地へと帰還をするが響はずっと硬直状態のままである。基地へと戻った後彼女はベットへと寝かされて信一がそばにいる。

未来はその間にほかの皆にあの子たちの話をしている。

「あのライブ事件のことなんです。あの子たちは響をいじめていたんですけど……容赦ない攻撃は響の心や身体にダメージを負わせていました」

「くそ!! あたしたちのせいです……」

「…………」

奏と翼は拳を握りしめていた。自分たちのあのライブが原因で響の心などを傷つけていたことを……弦十郎や訃堂も同じく拳を握りしめていた。

ほかのメンバー達もその話を聞いて荘吉はもしや彼女達は前世のこともあると判断をして独自に調査することにした。

一方で戦兎とカズマの方もこの世界へと降りたち調査をしている。「やはりこの世界も……色んな影響が受けているな……」

『ですね…………』

二人は辺りを見ながら確認などをしているとホールが開いた。カズマは結晶をしようとしたが……戦兎はインフィニティードライバーを装着をしていない。

『エボルトさま?』

そして現れたのは戦兎たちの前に現れてゼロノス及びイクサをしてきた人物である。カズマは無言で構えていたが……戦兎は構えようとしていない。

「さて君は何者だい? しかも俺達の前に現れたつてことは……俺を殺す気かい?」

戦兎は神の気を発して脅しているが謎のライダーは変身を解除をする。女人だつたので二人は驚いている。

「神エボルトさまこの間は申し訳ありませんでした。私の名前はレイ

メリ亞と申します……あなたの方の力をお試す形で攻撃をさせてもらいました。」

「レイメリ亞？…………もしやお前は俺が断罪をした神の…………元部下になります…………あの方はこの世界を遊びといつておりました。部下である私にこの仮面ライダーホールの力を託して転生者たちを色々として来いといわれまして…………」

「なるほど、あの時助けたのはまだ君の上司が死んだことを知らない時だね？」

「はいその通りです。ですから…………お願ひがあります…………私を殺してください」

『な!!』

「…………」

「知らなかつたとはいえ私の罪は重いです…………だからせめてあなたの手で私を殺してください。」

『だが!! 「わかつた」 エボルトさま!?』

戦兎はクロスボーンガンダムを纏いビームサンパーを抜いてレイメリアは目を閉じる。彼はそのまま接近をして彼女を…………切らなかつた。

「え?」

彼女は目を開けると横をビームサンパーが突き刺さつており彼は抜いて腰に装着をする。

「これでレイメリアという女性は死んだ。今日からお前は俺の部下だ

「で、ですが!!」

「あーはい決定ね!!それで名前の方だが…………お前は今日からアシリールだ」

「アイリール」

「いくぞカズマ君にアイリール、俺達の任務はまだ終わっていないからな…………」

扉を開いて戦兎たちは移動をする。一方で病室では響が目を覚ます。

信一？

「ああ大丈夫か響・・・・・」

「あ、いつが髪を……」

「うんそうだね。中学一年生の時

殴つたり蹴りを入れたり

「し、信一!?」

ごめん響お前がそんなになつていたのに俺は

「なんぞ?」

「好き・・・・・異性として好きだよ」

「俺もお前のことが好きだ」

響と信一は手をしてもういいに気がついて、それがやがてホツニして、いふ。外では未来こ成子が聞けて、ハ。

「響」

一良かつたな」

「俺は河元の一族だぞ」

「そうだね・・・・・私も許せないわね」

一方で二人はソロモンの杖を持ちながら考えている。

「決まつて、」

「フロンティアかしら？」

「賛成よ」

二人はニヤリとしながら準備をすすめていく。だが二人は知らないかつた・・・・・ネフイリムの心臓は自分たちのところにあると思つているが・・・・。

「なぜないの!?」

「どこにいったのよ!!」

「あなたたちが探しているのはネフイリムの心臓かしら?」

「な!!」

そこに五人の人物たちが現れる。赤い仮面をした人物が持つているのはネフイリムの心臓である。

「それを返せ!!」

「変身!!」

リュウガとファムに変身をして五人に襲い掛かるが三人はダイヤルフアイターをまわして大きくさせる。

「それじゃあアデュー！」

五人は乗りその場所から去っていく。二人は舌打ちをしてネフイリムの心臓をとられたことに悔しがる。

## 二人の企み

ネフイリムの心臓をとられてしまつた彼女達、残されているのはソロモンの杖のみである。

「おいどうするんだよ!!」

「ちい、ソロモンの杖があるからノイズを大量に呼びだして奴らをおびき寄せて戦うだけよ!!そして立花 韶を殺す!!」

二人は準備を整えて街へと行きノイズを呼びだして人々に襲わされる。その中には子どもも含まれていて次々にノイズによつて消滅されて行く。訃堂はすぐに全員に出動命令を下して全員が出動をする。

莊吉はリボルギヤリーに乗りロストドライバーを装着をして暴れている輩を見ながら手を握りしめている。

「許せないな・・・・俺達をおびき寄せるために無関係な人たちを襲うとはな・・・・絶対に許すわけにはいかない」

「私もです!!」

現場に到着をしてそれぞれがギアや仮面ライダーに変身をして攻撃を開始する。莊吉はスカルに変身をしてノイズに対してスカルマグナムを発砲をしてノイズを次々に撃破していく。ナイトと翼はアームドギアとダークバイザーを使い攻撃をしてゼロワンはフライングファルコンに姿を変えて奏を支えて上空からアームドギアの槍を投げつけて分裂をしてノイズを次々に撃破していく。

「これでもくらつてください!!」

クリスはアームドギアをボウガンに変えてビームの矢をノイズに発砲をして撃破していく仮面ライダーサイクロンがメモリを抜いてマキシマムスロットにセットをする。

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

「サイクロンスラッシュ！」

風を纏つた手刀をお見舞いさせてノイズを撃破する。ファイズとドライブ、エグゼイド、アギト、調、切歌、マリア、セレナと共にノイズを撃破していく。響も未来が変身をしたイドゥン、バロン、信一

が変身をしたアギト共にノイズと戦つているとドラグブラッカーが響に体当たりをして吹き飛ばす。

「がは!!」

ファムはブランバイザーを使い響に攻撃をしようとしたが信一が

前に入りガードをする。

「信一！」

!!」  
「させるか……響を俺の大好きな人をこれ以上傷つけてたまるか

「わね。さーて私は撤退をしようかな?」

リュウガはファムが一人で飛びだしていきあの数一人で戦えるわけないじやないと判断をして逃げようとしたがビームがリュウガのボディに当たる。

「が！」

「やつと追いついたよ。随分と暴れてくれたね・・・・・・全くオーブの世界が落ち着いたと思つたら今度は別の神の世界がやらしてくれたことを処理することになるなんてね——」

「何だ貴様は!!」

リュウガは戦兎に攻撃をしようとしたがその前にレーザーブレー  
ドがドラグセイバーを受け止めて蹴りを入れる。リュウガは一体誰  
がと見ているとスピルバンが現れて彼の前に立つ。

「ヤ一て始めるかな?」

ジオウビルド！グランジオウ！

ジクウドライバーインフィニティーに一つのライドウォツチが  
ツツヽざれて彼は360度回転させる。

## 「變身！」

【ライダータイム！仮面ライダージオウビルド！グランドタイム！】

グ・ラン・ドジオーウ！」

ジオウビルドグランドジオウ形態へと姿を変えて結界を張りリュウガを逃がさないようにする。リュウガはストライクベントカードをブラックドラッグバイザーにセットをして構える。

「くらえ！」

ドラッグクローファイアードを放つがジオウビルドは冷静に龍騎の押す。

【龍騎】

ドラッグシールドが現れてドラッグクローファイアードをガードをする。そこにスピルバンがレーザースナイパーを放ちリュウガのボディに命中させてジオウビルドはダブルのボタンを押す。

【ダブル】

2010年の扉が開いてジョーカーエクストリームを放つダブルが現れてリュウガに当たる。一方で地上ではファムがアドベントカードを装填させてブランウイング以外にもベノスネーカー、エビルダイバー、メタルゲラスが現れて全員に襲い掛かる。  
「さあこいつらを纏めて殺してやるわ!!」

【ユナイトベント】

ベノスネーカー達が合体をして超獣帝ディストサンダーが完成をして背中の翼を開いて羽型を発射させてライダーたちやシンフォギア装者たちにダメージを与えてファムはファイナルカードを装填させる。

【ファイナルベント】

ディストサンダーの腹部が開いてブラックホールが発生をしてファムは響をつかんだ。

「あははははあんたさえ死んでしまえば終わりなのよ!!」

「響!!」

ジオウビルドの方もそれに気づいてリュウガはスピルバンに任せて降りたつ。ファムは響を投げ飛ばすがその射線上にジオウビルドグランドジオウ形態が立ち響をキヤツチをする。  
「な!!」

「あれは・・・・・ジオウ?」

全員が驚いているとグランドジオウビルドは後ろを振り返り「ディ  
ストサンダーに近づいて頭を撫でる。

「可愛そうに、お前らも奴に利用をされているのだな？だが安心をしろこれで終わらせるからよ」

「なんだお前に！」

[ 5 ]

グランドシオウビルドはアームの方を見てソロモンの杖を持ていいのを確認をしてノイズ達がほかのメンバーたちを攻撃をしている。だが彼は響を降ろすとスカルに新たなメモリを託す。

「それを君に託すよ莊吉君。」

「ああそシカよ、これは御の新しい姿シアハトシ・・・・・・」

を知つてゐるため怒りが頂点に立つ。

一 許さん!

その時不思議なことが起つた、スピルバンことがズマはリュウガの前世のことを聞いているため彼女が今までしてきたことに対する怒りがマックスに頂点となる。

ツインフレード!!

リユウガはカードを装填をして構える。

〔ファイナルベント!〕

リュウガはドランクを放つがスビルバンはそのまま上空へとびリュウガの胴体に突き刺す。

一  
か  
！

そのままレーザーブレードを抜いてから一気に決める。

空中で放ったアーケインパルスがリュウガに命中をして着地をする。

「そんなんああああああああああああああ!!あたしはああああああああああああああああ!!」

「お前は地獄行きだ。二度と日が挙めないほどの罰が地獄で待つてい  
る……爆!!」

る・・・・・爆!!

一  
た  
!]

すると光弾が飛んてきてアームに命中をして吹き飛ばされる

お前の罪を数えろ!!

「何を言つていやがる!」

ほかの戦士たちも構えているとクランドシボウビルトはティターンのボタンを押して武器が発生をする。数々の武器が発生をして全員がキヤツチをする。

「フレゼントだ。えへと、こういうときの台詞って確かに……神のアリバニタを受取るの?」

「「「「「いや絶対に違うそれ!!」「「「「

知つて いるメンバ ーはエボルトにツツコ ミを入れる中フアムはブ

ランバイザーで攻撃をしようとしたが信一アギトが変身したトリニティフォームとロビンが変身をしたシャイニングフォームの二人が前に入りシャイニングカリバーとフレイムセイバーとストームハルバードでファムのボディを攻撃をする。そこにストームハルバードを持った奏がファムのボディを切りつけて翼とナイトが走りファムのボディを切りつける。

「月は破壊されず・・・・ソロモンの杖はどうなるのかと思つてい  
たけど・・・・・ネフイリムの心臓は彼女達が持つていつたから  
ね・・・・まさか一期のフイーネのようになるとはね・・・・」  
『死ネ死ネシネシネシネ死ネ!!死ねええええええええええええ

ええええええ!!この世界をも壊してくれる!!そして私が世界の神として立つ!!】

「あんたが神？冗談でもいつてくれちゃうわね!!」

「ああそのとおりだ。神はそこにいるけど……この世界は俺達が守つて見せる!!」

ええその通りよ!!

超強力フレイでみんなでクリアしてやるぜ!!!

# 一桜花とクリス 変身だ!!

「ああ！」

「ヤ」  
て  
」

「が、俺もジバ。」

全員が最強形態

全員が最強形態へと変身をする。ブラスター・フォーム。タイプトライドロン、ハイパー・ムテキ、ワイルドカリス、ロードバロン、ナイトサバイブ、ゼロツー、シャイニングフォーム、トリニティ・フォーム、サイクロンジヨーカー・エクストリームへと姿を変えてシンフォギア装者たちも構えようとしたがエボルトは何かを思いだしたのかビルドのボタンを押して大きな盾を構えている。響に対しても……。

# 「ファイナルエミシオン!!」

放された光線が響に命中をしてギアが解除される。

どうして!?

グランドジオウビルドは近づいて欠片を握りしめるとそれがギアのペンドントへと変えて左手に電撃を響に浴びさせた。

電撃を浴びされた響は目を開けて辺りを見てキヨロキヨロする。

「あ、あれ!? 私は・・・・・・・・」

「君の中にあつたギャングニールの破片、それを取り除かせてもらつたよ。本当はシエンショウジンをそつちに渡したんだけど忘れている感じだね———」

「「「「「あ・・・・・・・・」」」」

全員がシェンショウジンのことをすっかり忘れており苦笑いをしている中化け物になつたファムは剛腕をふるいシンフォギア装者や仮面ライダーたちを吹き飛ばす。グランドジオウビルドは響を抱えて回避をして響は再びギアを纏い全員も立ちあがり構える。

「さーて神のプレゼントを受け取つてね!!」

グランドジオウビルドは右手を上空に上げるとそれがシンフォギア装者たちに当たり全員が一体何事かと見ているとシンフォギアの出力などが上がりつていきエクスドライブモードに変身をする。

だがグランドジオウビルドは変身が解除をされてマントを装備をしている姿になる。

「あーやっぱり70億人分の絶唱を使うために神の力使う過ぎたかな？」

「エボルトさま!!」

スピルバンが降りてきて彼の護衛に入る。

『おのれええええええええええええ!!』

『私は止めて見せる!!皆で!!行きましょう皆!!』

『「「「「おう!!」」」』

『来い!!シンフォギアああああああああああああああああああああ!!』

## ファムオルタとの決着

ファムは自らの体にソロモンの杖を突き刺してノイズ達が合体をして巨大なファムオルタへと変貌をする。神エボルトこと戦兎は自らの力を使い彼女達をエクスドライブモードへと変身させるが彼自身は力を使い過ぎて変身が解除してしまう。

「さて後は頼んだよ?この世界を守るために戦う戦士たちよ」

全員が神エボルトを見た後にファムオルタの方を見ている。ファムオルタは大量にノイズを発生させて彼女達に襲い掛からせようとしたが響装甲がアームドセイバーの刀身に炎を纏わせて一気に振りかざしてノイズ達を撃破した。

未来はシエンショウジンを纏いエクスドライブモードへと変わつておりそこからビームを放ちファムオルタにダメージを与える。

『おのれええええええええええええええ!!』

ファムオルタは触手を出して彼女達を殺そうとしたがゼロツー、ナイトサバイブ、ワイルドカリスが前に立ちアタッシュカリバーなどを使い翼達に襲い掛からうとした触手を切つていく。

メックヴァラヌスの三人もデヴァステイター状態へと変わりファムオルタへと攻撃をする。

「あんたがビックキーを!!」

「許せません!!」

『黙れええええええええええええ!!あんな奴生きていたつて意味がないのよ!!』

『それがあんたが決めることじゃないんだよ!!』

三人は同時に攻撃をしてファムオルタにダメージを与えるとファイズ、ドライブ、エグゼイドがフォトンブラスター、トレーラ砲、ガシャコンキースラッシュヤーを構えて発砲をしてファムオルタにダメージを与えていく。

マリア、セレナ、翼、奏の四人は突撃をしてダブルアギトも同時に接近をしてシャイニングカリバー、フレイムセイバーとストームハルバードで攻撃をする。

「おまえが響を絶対に許せない!!

黙れ!!

ファムオルタはビームを放つた。全員が回避をしてダブルはガイアメモリをプリズムシールドにセットをする。

『「サイクーン！ ヒート！ ルナ！ シミーナー！ マギシマムドライフ！」

ダブルサイクロンジヨーカー エクストリームから放たれたビッグカーフアイナルフュージョンが放たれてファムオルタにダメージが与える。戦兎とスピルバンは彼らの様子を見ている。

『エホルトさま自分が参戦をしなくてもよろしいのですか？』

「ああ構わない。俺達は元々奴らを追つてこの世界へとやってきた  
だがこの世界は本来は彼女達が守るべきだと思つてね。だからこそ  
俺達は見守るだけだよ……いいね？」

一  
れ  
か  
り  
ま  
し  
た

アムオルタは沙々にダメージを受けていたばかりの戦士たちも着地をしている。ファムオルタはボロボロの状態になつており全員が見ている。

〔ツニシマジヤムラノライブ〕

メモリが次々にマキシマムスロットに刺さつていきマキシマムドライブが発動する。エターナルエッジにエネルギーを纏わせていく丸い球体を作りファムオルタに放つてダメージを与える。

!

「それは君は復讐のために戦つて いるからだ。仲間を信じない者に俺たちは負けたりしない。響ちゃん決めるのは君だ!!」

— 3 —

全員響せやんは工着川ギリを！」

仮面ライダー、シンフォギア、メツクヴァラヌス全員のエネルギー

が響に集中されて行き彼女は空を飛び右手のつきだした。

ファムオルタは触手やビームを上空から落下をしてくる響に対し

ファムオルタへと突撃をしていき触手などが次々に粉碎されて行き ファムオルタを貫通させていき彼女は着地をする。

に戦兎とスピルバンがやつてきた。

「よくやつたね皆。さて・・・・・」

華児はその辺を歩いていた彼女のところへと歩いていく。「道分山道」と一やつてくれる老翁がいた。彼は前世からの罪

るからね重いと思つた方がいいね。「待つてください!!」響ちゃんか」「あの・・・・この人が反省をしているなら許したらどうですか?」「・・・・全く君は優しいね。だけどそれはできないんだ・・・・すまない」

「冗談じゃないわ！あたしはまだ捕まるわけにはいかないのよ！」  
彼女は逃げだそうとしたのでスピルバンが動きだしてレーザーブ  
レードを突き刺した。

か  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
あ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

……これが俺の役目だアリケインバルス!!

そのまま引き抜いてアーケインパルスを発動させて彼女を切り裂く

いた。

「なんてことを!!」

響達は見ているが戦兎は止める。彼自身もし彼女が説得に応じ

なかつたら倒すつもりだつたのでそれをスピルバンことカズマがしこの『我爲目利は日ノ只』、『氣持つ二二二』。

戦士たちも変身が解除されるが響は納得が言つていない。

「どうしてですか！？どうして殺さないと行けなかつたのですか！」

『…………彼女自身の罪は重い…………たとえ君が説得をしても彼女の性格などを考えても無理だ。』

「ですが!!」

「響ちゃんわかつてくれ、彼はそれを承知で殺したんだよ…………自らはもう一度と転生などができるないことを承知でね…………」

莊吉は戦鬼が言つた転生ができないという言葉を聞いてスピルバン自身も戦つているのだと…………こうしてソロモンの杖をめぐる戦いは解決をした。戦鬼とスピルバンことカズマはリュウガとファムの魂を連れて天界の方へと去つていく。

莊吉 side

『こうして戦いは終わつた。だが俺が気になつたのはあのスピルバン及び神エボルトである。彼は俺達をこの世界へと転生をさせてくれた。だが本当に暗黒結晶と呼ばれるものを回収するために俺達をこの世界へと転生させたのか？それは俺自身も調べることが多いため調査を続けることにする』

タイプレーターを撃ち終えた俺はコーヒーを飲み今回の戦いで現れたあのグレートマジンガーなども気になつてゐるがこの家でなんとか知らないが…………

「そっ！」

「当たらないわよ!!」

なんでマリオカートをしているのだろうか？しかもうちで……

次の時系列的にはGX編になるが果たして俺達という存在が原因で崩壊をしている以上普通に期待をするだけ無駄だな…………俺はロストドライバーを出しながら何事もなければいいがなと思いながらコーヒーを飲むのであつた。

## 第4章 新たな事件？突然として現れた仮面ライダー

### 莊吉の調査

ファムオルタ達が起こした事件は莊吉達仮面ライダーやシンフォギア装者たちの活躍によつて響に対する復讐は終わつた。彼女たちは現れた神エボルトとスピルバンによつて回収されられて行き世界は平和になつた。

使われたソロモンの杖はSONGで保管されることになり訃堂曰く。

「我々で保存をしておけばいいじゃないかな？じゃな」

そういつて訃堂が言つたのでSONGで保管されることになつた。一方で場所が変わり了がいるパヴァアリア公明総社では？

「・・・・・・・・」

「了、どうしたの？」

「いや暇だなーと思つてな」

「確かに事件という事件は起こつていなからね」

「だな」

サンジエルマンと話をする了、現在は何も事件などが起こつてもいないので彼らは普通に過ごしていり一方で莊吉は一人で調査をしていた。

愛用のシルクハットをかぶり調査を進めているがなかなか暗黒結晶と呼ばれるものを見つけることができないのである。

「やはりそう簡単に見つかるものじゃないことか・・・・・暗黒結晶・・・・・とてつもない強力な力を持つた結晶・・・・・か」

莊吉はそういうながら辺りを見ているとスタッグフォンがやつてきたので彼は一体何かあつたのかと見ていると光弾が飛んできたので莊吉は回避をする。

「やれやれいつたい誰が攻撃をしてきたんだか・・・・・」

現れたのは仮面ライダータイラントだ。タイラントはソニツクア

ローを引き莊吉に向けて放つてきた。

(さてどうする?今桜花は学校だからダブルになるわけにはいかないからな、なら変身をするならこつちだな)

莊吉はロストドライバーを装着をしてメモリを出して押す。

【スカル】

「おつと変身」

スカルメモリをロストドライバーに装填をして仮面ライダースカルに変身をしてスカルマグナムを放つて攻撃をする。タイラントはソニックアローでスカルマグナムの弾をはじかせていき接近をしてソニックアローを振り下ろして攻撃をしてくる。

スカルは後ろへと下がりスカルマグナムを使い攻撃をするがタイラントにははじかされる。彼はなぜタイラントが現れたのか気になつてているが・・・・今はこの状況を切り抜けないと行けないとらなど撃破することを決意をする。

スカルメモリを外して腰のマキシマムスロットにセットをする。

【スカルマキシマムドライブ!】

胸部からエネルギー状の骸骨を発生させてそのまま蹴りを入れてタイラントに放つた。タイラントはそれを受けて後ろへ下がるあまり効いている様子がないのでこれは厄介だとスカルは思つている。

タイラントはそんなことを気にせずにソニックアローを放つてスカルに攻撃をしてくる。彼はどうしようと考えているとスタッガフオンが近づいて電話がなつていて

「なぜこんな時に?もしもし」

『お父さん大丈夫!?』

「桜花か、なぜ?」

『気になつてスタッガフオンで調べていたらお父さんが襲われているつて知つて、今ならダブルに変身ができるよ!!』

「わかつた。」

スカルはロストドライバーを外してダブルドライバーをセットをする。

【トリガーハー】

【サイクロン】

【変身!!】

【サイクロン！トリガーハー】

サイクロントリガーハーと変身をしてトリガーマグナムを構えて風の弾丸が飛んで行きタイラントに命中をする。そのままメモリを二つとも変えて走りだす。

【ヒート！メタル！】

ヒートメタルへと姿を変えてメタルシャフトをふるいタイラントにダメージを与える。

「は!!」

『お父さん』のタイラントは？』

「わからん、突然として襲われているからな・・・・・一気に決めるぞ!!』

『はい!!』

メタルメモリを外してメタルシャフトにセットをする。

【メタル！マキシマムドライブ！】

【メタルブランディック！】

そのままダツシュをして炎を纏わせたメタルシャフトをふりまわしてタイラントを吹き飛ばす。

タイラントはそのまま爆発をしてダブルは爆発をした場所へと行くが死体などがなかつたのだ。

「どういうことだ？タイラントは確かに攻撃をしてきた。なのに体やドライバーなどがなくなつてているのはいつたい・・・・・」

ダブルは辺りを見るがドライバーなどがなくなつてているのでいつたいどこへ行つたのだろうと探しているが見つからない。

一方で杏奈たちは暗黒結晶を探している。

「どう？」

「そう簡単に見つかるのか？」

「さあ？」

一方でチフオージュシャターではキャロルと勇助が何かのゲーム

をしている。

「さてどうした勇助？」

「ぐぬぬぬぬ」

キヤロルが優勢のようで勇助は両手を組んで考えているのをオートスコアラー達は見ている。

「これは『主人様の負けのようですね』

「だな、あれはマスターが得意なゲームだ。ほかのゲームだつたら勇助殿が勝つのだが……」

「あればかりはねーーーてかマスターも負けず嫌いだしーーー」

「そんなことよりもミカは勇助と戦いたいぞ!!」

「いやあんたさー勇助はあまり身内と戦うのは嫌だつて言つたでしようが・・・・・てか一回戦つてやり過ぎてマスターに怒られたでしょうが・・・・・」

ガリイははあとため息をついて以前のこと思いだしていたのでほかの二人も同じように苦笑いをしている。

## 莊吉の考える謎

莊吉 side

何気に久しぶりな気がするが……まあいいだろう。俺は仮面ライダータイラントを倒したが、奴が変身で使つたであろうゲネシスドライバーなどが消失をしており現場には何も残つていたかつたので不思議に思い家に帰つてからも考え方をしていた。

あのタイラントは一体誰が変身をしたのであろうか？

いずれにしてもアーク結晶つてのも回収もあるから、考えることが多いが……俺自身も色々と考えることが多いかもしれないな。

「師匠？」

「お父さん何考えているの？」

「クリスに桜花？ いつの間に帰つてきたんだ？」

「学校終わつて、まつすぐに帰つてきたら師匠が考え方をしていたから。」

「うん、お父さん……もしかしてタイラントのこと？」

「ああそうだ。奴の変身アイテムなどがなかつたからな。いずれにしても今回のタイラントも含め手だけど……どうも嫌な感じがするんだよな。」

俺は立ちあがりシルクハットをかぶり……事件が再び起きないことを祈りながらコーヒーを飲むことにした。

「師匠、外に出ないのになんでハットをかぶつているんだ？」

「うんうん。」

「…………」

ついいつもの癖でかぶつてしまつたのですぐに外して二人の分も用意することにした。

莊吉 side 終了

一方セレナはため息をついていた。ロビンはマリアとデートを行つており切歌と調は永夢、パラドらと遊びに行つており霧子は連子と共に遊びに行つたので自分は一人でため器をつきながら歩いていた。

「はあ……姉さんはロビンとデートだし、あー羨ましいわって何を言つているんだろう…………つてあれ？」

彼女は突然として景色が変わつたので驚いてしまう。すると彼女に襲い掛かろうと現れたのは黒いパラドクスだつた。

「え?! パラド?」

「……………」

黒いパラドクスは問答無用でセレナに襲い掛かつてきた。彼女はアガートラームを纏い剣でガシャコンバグヴァイザーチエーンソー モードを受け止める。

「く！」

だが黒いパラドクスの力に押されてしまい、彼女は蹴りを受けて吹き飛ばされてしまう。

相手はそのまま止めを刺そうとした時、バイオリンの音が聞こえてきた。

「バイオリン?でもこの音…………聞いたことが…………」

黒いパラドクスはガンモードへと変えて発砲をするが、バイオリンの音が響いており、すると蝙蝠が黒いパラドクスを襲い一人のライダーが着地をする。

仮面ライダーキバである。

「……………」

キバはセレナを見て無事だと確認をした後振り返り、黒いパラドクスに突撃をする。黒いパラドクスはキバにガンモードで放つが、キバは飛びあがり蹴りを入れて着地をした後に接近をして殴りかかる。

「速い…………」

無言で連續した拳で攻撃をして黒いパラドクスを殴り飛ばすと、腰のフェツスルを逆さにくつづいている蝙蝠「キバットバット三世」に噛ませる。

『ウエイクアップ!!』

周りが赤い霧が発生をしていつのまにか月が現れたのでセレナは驚いてしまい、キバットバット三世が右足の鎖を解除をしてキバは飛びあがり必殺技「ダークネスマーンブレイク」が放たれて黒いパラド

クスに命中をして爆発した。

セレナ!!

11

声が聞こえて振り返ると景色が戻つておりセレナと連絡がとれなくなつたと聞いたマリア達が駆けつけた。

ナムを構えようとする。

「さて君は？」

• • • • • • • • • • •

「アタリ、いいしょないが、さあ見つけたかたがいる

「ワタルです」

## ファイズに変身を

レ  
ト  
ル

キバの変身が解除されて、姿を現したのを見てセレナは涙を流しな

がら抱き付いた。

「セレナ、久しぶりだね。」

「もう！ いつたいどこに行つていたの！ 私・・・私！」

それではやく結婚だから房へて来れ

大水

「ああ、一めんなんや

『そして俺様はキバツトバツト三世様だ!! よろしく!!』

(この様子だと彼も同じつてことですね? それにしても黒いパラドク

たタイラントと同じでことか……）

莊吉は考へてゐる頃、チフオージュ・シャトーでは？勇介はキヤロ

〔一〕

「なあ勇介、暇すぎる」

「確かに暇だね。」

「ならキヤロル、暇でしたら仕事を手伝つてくださいよ——」

エルフナインが叫ぶが、キヤロルは勇介に甘えたいからバスといいエルフナインも仕方がないですねといい仕事を引き受ける。

いとキヤロルのこと嫌いになるよ？」

(しまつた・・・ヤンデレモードになつてしまつた。)

一度だけ勇介は本気で怒ってしまい、キヤロルに 対して嫌いと言つてしまつた結果キヤロルはこのよ うな状態になつてしまつるので勇介自身もあまり強く言えなくなつてしまつ。

ファラ達もその状態を見て苦笑いをしてしまう。

## 新しいチーム

「新しいチーム？」

「左様」

訃堂の口から新しいチームという単語を聞いて、弦十郎は首をかしげていた。朔也やあおい、緒川も司令室におり訃堂は改めて説明をすることにした。

「お前も知っている通り、我らは人数が増えたのは知っているじゃろ？」

「ああそうだな。」

「そこでチームを作つて対応をするつてのを考えたのじや。」「確かに、チームにしたらそれで対応ができるからな・・・・・それで？」

「うむ、まず翼、奏、そこに零斗と或歩君のAチーム、響君、未来君、信一君と戒斗君のBチーム、莊吉とクリス君、桜花ちゃん、そこに一真君も加えたDチーム、連子ちゃん、マリア君、ロビン君、セレナ君、ワタル君のEチーム、調君、切歌君、永夢君、霧子ちゃんのFチーム、そしてヒビキ君にメックヴァラヌスの三人のGチームじや。」

「なるほどな・・・・・状況でチームで出撃をさせるつてことだな？」  
「左様、今回莊吉君たちが新しい事件が発生をする可能性があるからの・・・・・・」

「突然としておそいかかる仮面ライダー・・・・・か・・・・・・・・・」

「うむ、いずれにしても警戒を・・・・・何事じや!!」

突然として警報が鳴り、何事かと訃堂が聞いてあおい達が急いで確認をしていると、交戦をしてる人物がいるとカメラを見るとスカル、ナイトが何かと交戦をしている。

「すぐに応援を呼ぶんだ！」

「了解です！」

一方で莊吉は零斗を連れて捜索をしている。現れたライダー達の差がしており彼自身もふーむと調査をしていた。

「すまないね零斗君。」

「いえ、俺も協力はしますよ。ですが…………いつたい誰が?」

「わからない、時期的にキヤロル達が動くと思っていたのだが…………」

二人で話をしていると光の矢が放たれたので二人はスカル、ナイトに変身をして交わすとソニックアローを構えているデューキの姿があつた。

「あれって仮面ライダーデューキ?」

「どうしてあの仮面ライダーが?」

デューキはソニックアローを放ちナイトはダークバイザーではじかせると、スカルはスカルマグナムを構えて発砲をしてダメージを与える。

「はああああああああああああああああ!!」

「ソードベント!」

ウイングランサーを装備をしてデューキに対し突きだすが、ソニックアローを使いはじかせていき、スカルは別のT2メモリを出してマキシマムスロットにセットをする。

【オーシャンマキシマムドライブ!】

「はああああ…………」

周りから水が発生をしてスカルは飛びあがり水を纏わせたライダーをデューキに命中させたが、デューキの姿が変わった。

【ドラゴンフルーツエナジー!】

「な!?」

「姿が変わった?」

ドライバーからエナジーロックシードを外して、ソニックアローに装着をする。

【ロックオン! ドラゴンフルーツエナジー!】

「!!」

二人にソニックアローの矢が放たれて命中をしようとした  
が…………

【ライジングカバンスラッシュ!】

「はああああああああ!!」

ゼロワンがアタッショカリバーでソニックアローの矢をはじかせ

ると、クリス、翼、奏の三人が攻撃をして着地をする。

「師匠！大丈夫ですか？」

「ああ・・・だがどうしてここに？」

「司令から連絡を聞いて飛んできました。」

「まさか、仮面ライダーが相手とはな・・・正直に言つたら驚いているぜ？」

奏たちは武器を構えながら、クリスはロストドライバーを装着をしてアームズメモリを起動させる。

【アームズ！】

「変身!!」

【アームズ！】

イチイバルを纏いながら、仮面ライダーアームズの力を発生させたイチイバルアームズへと変身をして構える。

デュークはソニックアローを構えて霧状へと姿へと変わったのを見てゼロワンは別のプログライズキーを起動させる。

【ブリザード！】

「霧なら凍らせるだけ！」

【オーソライズ！フリージングベア！】

フリージングベアの姿へと変身をして、霧状になつているデュークに対し冷気を発射させてデュークの体が元に戻つたのを確認をしてアームズが左手に装甲が纏われてマシンガンを発射させてダメージを与えると翼、奏の二人がギアをデュークに突き刺す。

「決めな！」

「ああ！」

ナイトはファイナルベントのカードをとりだしてダークバイザーにセットをする。

【ファイナルベント！】

ダークウイングが合体をしてナイトは飛びあがり必殺の飛翔斬が命中をしてデュークの体を貫通をして爆発をする。

だが、その場所に変身アイテムなどが残つていなかつたので全員が首をかしげる。

「やつぱりアイテムなどの残骸がない。」

「どうなつているんだ？」

— 1 —

莊吉はアイテムなどがないのでやはり一体誰がやっているのか？  
と思いながら考えている頃、ウイザードの了、ビーストの麗子の二人  
はあるライダーと交戦をしていた。

「はああああああああああ！」

二人がウェイサーソーリードカン タイズサーベルで相手に対して攻撃をしているが相手はハルバードを振りまわして一人の攻撃をはじかせてダメージを与える。

# 【ライトニング ナウ!】

手から強烈な電撃が放たれて一人を吹き飛はした。

「ぐ！」

「ふつはつはつは！お前達の力で我を止めると思うな!!」

ま 待ちやがれ

卷之三

「お前は？」

「私は大丈夫。… だけど…」

「あああいつを取り逃がしたのはまずかつたな……」

果たして一人が取り逃かしてしまった敵とはいつたい？

## 黒い神父服を着た人物

ワタル side

俺は、セレナや桜花ちゃん、響ちゃん達と一緒に買い物へと来ていた。セレナ曰く俺の服を買いに行くつてことでショッピングモールへときた。

俺は別にいいと言つたがセレナがダメと言つたので信一君、戒斗君と共に来ていた。

「ワタルさん、一応確認ですが・・・・・・」

「なんだい？」

「神工ボルト」

「・・・・・そういうことか。」

二人も神工ボルトという単語を聞いて同じ転生者だつてことがわかつた。まあ俺達がやることは・・・・・ん?

「桜花ちゃん?」

「あ・・・ああああああ・・・・・・・・」

なんだ? 黒い神父服を着た人物を見てから桜花ちゃんが震えていた。俺も嫌な感じがして蝙蝠たちを使い俺達は煙幕のようにしてショッピングモールを後にする。

「どうしたのワタル?」

「・・・・・いいから「逃がすとでも思つてているのかい?」な!」

俺達は前を見ると黒い神父服を着た人物が前にいたので驚いている。俺達は前に立ち構える。

「お前は一体!」

「やはり桜花だつたか・・・・・・さがしたぜ!!」

「あ・・・あああ・・・・・・・・」

「貴様!」

「悪いがてめえらは邪魔だ!」

「シャバドウビタツチヘンシンーン!」

「変身!!」

奴の姿が変わり仮面ライダーソーラーに変身をしたのを見て、俺

達もキバ、アギト、鎧武に変身をする。

「セレナ達は桜花ちゃんを頼む…………こいつは敵だ！」

「わかった。気を付けてね？」

セレナ達に桜花ちゃんを避難させてもらい、俺達は構える。

「ふん！お前達で俺を倒せるとと思うか!!」

【コネクト・ナウ！】

「やつてみないとわからないだろ!!」

「行くぞ!!」

ワタル side 終了

キバ、鎧武、アギトは突撃をしてソーサラーに攻撃をする。

「は!!」

キバとアギトのダブルパンチをハルバードで受け止める。鎧武が無双セイバーのコツクを引っ張り弾が発射される。

だが彼はコモンウェイザードリングをセットをしてバツクルを動かす。

【トルネード・ナウ！】

「は!!」

巨大な竜巻が発生をして三人は交わすとソーサラーが接近をしてキバにハルバードを振り吹き飛ばす。

「が!!」

「ワタルさん！」

【オレンジアームズ！花道オンステージ！ジンバーレモン！ハハ！】

アギトも姿が変わりバーニングフォームへと変身をして突撃をしてバーニングパンチを放つがハルバードでガードをされて、シフトレーバーを動かす。

【スプラッシュ！ナウ！】

「は!!」

「うわあああああああああああ！」

強烈な水流でアギトを吹き飛ばして、キバは起き上がり頭を振るう。

『大丈夫かワタル？』

「ああ、大丈夫だ。」

「せいやああああああああああああああ!!」

二刀流でソーサラーに攻撃をするが、相手は受け止めて鎧武をつか

卷之二

「一ノ丸」

キバが鎧武を抱えて着地をする。

卷之三

一卷之二

お互いに着地をしてソーサラーはハルバードを振り払い構えていると光弾などが放たれてソーサラーはガードをするとスカル、ファイズ、エグゼイド、ドライブ、ナイト、ゼロワン、響鬼、ロビンアギト、ブレイド、さらにシンフォギア装者達が到着をする。

「気を付けてください！あいつを見て桜花ちゃんが・・・・・」  
「野郎が！」

クリスはアームドギアを構えているとソーサラーは待っていたか  
のうごく笑いはじめる。

「ふつはつは！待つていたぞ！我が力を見せてやる！アーヴ結晶よ

「何!  
!?

ソーサラーは懐からアーク結晶をとりだしてそれを自身に植え付けると力がみなぎったのか、ハルバードを振りまわして全員を吹き飛ばした。

二十一

全員が吹き飛ばされて、変身などが解除されてしまう。莊吉も変身  
が解除されて・・・・・倒れてしまう。

力

「ふつふつ、二ヶアーヴ結晶の力だ! や  
ななんて威力をしている……」

「ふつふつふ、これがアーク結晶の力だ！さあまでは「やめてええええ

ええええ!!

ほう  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
」

「櫻花！」

「...」

「私が・・・私があなたの

「私が…、私があなたのことへ行きます…、だから…これ以上この人達に手を出さないでください。」

「ふつふつ最初からそうすればよかつたのだよ。」

桜花は莊吉達の方を見てから、ソーサラーのところへと行き、テレ

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

誰もが負けてしまつた。ソーサラーがア

な力で全員を吹き飛ばして桜花が連れ去られてしまった。

「ううう・・・うああああああああああああああああああああああああああああああ

あああ!!

クリスは泣いた。自分のことをお姉ちゃんと呼んでくれた子を守れなかつて自分で……悔い思ひをこねがう……